
高瀬美恵
ペルソナ2
ETERNAL PUNISHMENT.
罰
電撃文庫


ペルソナ2
ETERNAL PUNISHMENT.
罰
高瀬美恵


七姉妹学園3年生。杏奈がただひとり心を許せる友達。だが、連続猟奇殺人が起こり始めた頃から、行方不明になっている。
周防達哉
Suou Tatsuya
七姉妹学園3年生。将来有望な陸上部の選手だったが、交通事故で選手生命を絶たれて無気力な生活を送っている。
吉栄杏奈
Yoshizaka Anna


七姉妹学園2年生。かつて杏奈の走りに憧れて、陸上部に入部した。杏奈が走れなくなった今も、「お姉さま」と呼んで慕っている。
片山典子
Katayama Noriko
“自分の携帯に自分の携帯から電話をして、恨みのある人間の名を告げると殺してくれる”という、都市伝説中の人物。
ジョーカー
Joker



港南警察署刑事一課強行犯係の巡査部長で、達哉の兄。正義感の強い有能な刑事だが、弟に対しては小言が多く、達哉に反発されている。

周防克哉

Suou Katsuya

天野舞耶

Amano Maya

キスメット出版のティーン向け雑誌「クーレスト」の編集者。高校生の噂を取材している。



インターネットのホームページ「BAOFU」の管理人。ネットを通じてジョーカーの噂を集めている。

パオフゥ

Baofu

某女性下着メーカーの営業部に勤務。舞耶のルームメイトで親友。

芹沢うらら

Serizawa Urara



橿原　淳

Kashihara Jun

春日山高校3年生。七姉妹学園日本史教諭の橿原明成と女優の黒須純子の息子。

高見冴子

Takami Saeko

七姉妹学園の英語教諭。杏奈の担任。生徒の立場になって考えてくれる教師で、人気がある。



朝のテレビ番組で「ワンロン占い」のコーナーを持つ占い師。よく当たると、若い女性を中心に口コミで広がっている。

ワンロン千鶴

Wanron Chizuru

「クーレスト」でカメラマンをしている女性。舞耶とよく組んで仕事をしている。

黛ゆきの

Mayuzumi Yukino

ペルソナ 2

PERSONA

罰

三軒めの居酒屋を出たときには、すでに日付が変わろうとしていた。
駅に急げば、ぎりぎりで終電に間に合う。しかし、どうしてもその気になれなかった。
家へ帰っても、待っているのは妻の際限ない愚痴だ。受験を控えた息子も、まだ起きているかもしれない。酔って帰った父親を、軽蔑しきった目で見下げることだろう。考えただけで胸が悪くなる。
カプセルホテルにでも泊まろうか。昨日も家に帰らなかったから、着たきりのシャツが汗臭い。シャツだけではない、下着も替えていない。
千鳥足で歩き始めた途端、頭がくらくらして転びそうになった。
安酒が回る。彼は身体をかがめて嘔吐した。靴が汚れたが、かまっていられなかった。身体を二つに折って、胃液しか出なくなるまで吐き続けた。
今日のワンロン占い。十一月生まれの「皎龍」の運勢は大凶。何をやってもうまくいかない一日です。大きなアクシデントに見舞われる暗示も。気をつけて過ごしてネ♪
朝のテレビ番組に、そんなコーナーがあったことを思い出した。
なーにがワンロン占いだ。ばかばかしい。十一月生まれの人間は、全員ひどい目に遭うってのか？　ありえないだろう、そんなこと。ふざけるんじゃねえ。

口の中でぶつぶつ文句をつける。言葉と裏腹に、彼は占いの結果に怯えていた。

ワンロン占いはよく当たる。若い女性を中心に口コミで広まった占いだが、最近では中年の主婦やサラリーマン層にも人気を博している。占いの恐ろしさを、彼は身をもって知っていた。そもそも、彼の人生が狂い始めたのは、占いで「大凶」と出たあの日からなのだ。

あの日も、朝のテレビ番組のワンロン占いコーナーで「十一月生まれは大凶」とやっていた。もちろん彼は信じていなかった。占い好きの妻が、しきりに「気をつけて」と注意したが、ばかばかしいと笑い飛ばして出社した。

仕事は絶好調だった。大きな契約をまとめることができ、上司から昇進をほのめかされた。同僚たちからは、やっかみ半分の祝辞を受けた。有頂天の彼は、占いのことなどまったく忘れていた。誘われるままに酒席に付き合い、酔っぱらってハンドルを握った。

小雨がぱらついて視界が悪かったが、上機嫌の彼は気にしなかった。前途は薔薇色。雨ぐらいで湿る運勢じゃない。鼻歌まじりに車を飛ばした。

そこへ、飛び出してきやがったのだ。あの憎らしいガキが。

あわててブレーキを踏んだ。そのつもりだった。だが、酔っぱらっていた彼は、アクセルとブレーキを踏み間違えた。

彼がはねたのは女子高生だった。ヘッドライトに照らされて一瞬振り返った彼女の、恐怖に引きつった顔を今もよく覚えている。

少女は人形みたいにぽーんと吹っ飛んで、動かなくなった。彼はパニックに陥ってその場を逃げ出した。しかし目撃者が車のナンバーを覚えていた。あっけなく捕まった。

女子高生は命を取りとめたが、足に大怪我をした。優秀な営業マンだった彼は、一夜にして「卑劣なひき逃げ犯」に転落した。

さらに不幸だったのは、被害者が陸上競技の選手として将来を嘱望されていたことだ。日常生活に支障のない程度には回復するが、もう二度と選手に戻ることはできないという診断だった。世間の同情は、選手生命を断たれた少女に集まった。

妻は怒りの形相で彼を詰った。だから、出かける前にあれほど言ったのに……大凶ってワンロン占いに出てたじゃないよ……なんでもっと気をつけなかったのよ……バカ。

彼はかっとなって妻を殴った。何が占いだ。悪いのは、俺の車の前に飛び出してきやがったあの小娘だ。占いなんて関係ない。

結局、彼は会社を辞めた。この不況では、再就職も難しかった。近所からは爪弾きにされ、円満だったはずの家庭は崩壊した。

――ばかやろう。

事故から日が経つにつれて、被害者であるはずの少女に対する憎しみが募るようになった。ばかやろう。一生寝たきりってわけじゃあるまいし、ちょっと走れなくなったぐらいで大げさに被害者ヅラするんじゃねーよ。世の中の大部分の人間は、百メートルを十二秒で走ったり

しねーんだよ。それでもみんなまともに生きてんだよ。俺がどれほど悪いことをしたってんだよ。畜生……。

視界がぐるぐる回っている。歩くのがつらかった。彼は路地裏に座りこんだ。

大凶だと？　何を今さら。

これ以上、何か悪いことがあるってのか？　もう車も売っちまった。今さら事故を起こすこともない。

あとはなんだ、俺自身が車にはねられるとでもいうのか？　そのくらい別に怖くない。慰謝料をふんだくれるなら、かえって嬉しいくらいだ……。

「金田」

突然、名前を呼ばれた。

空耳かと思った。こんな場所で、彼の名を呼ぶヤツなんているはずがない。

聞き違いではなかった。いやに楽しそうな、男の声が呼んでいる。

「よう。金田」

彼は顔を上げた。

目の前に、妙なものが立っていた。

男——だろう。声から判断する限り。頭にすっぽり紙袋をかぶっているので、顔はわからなかった。片目の部分にだけ丸く穴があき、その下に裂けた口が描いてある。膝下までの丈の白

衣を着て、その上に黒いコートを引っかけている。足元は、素足にサンダル。手に長い棒を持っていた。

――なんだ、こいつは？

金田はとろんとした目で紙袋の怪人を見上げた。

紙袋に描かれた顔は、子供の落描きみたいに楽しそうだった。金田はその落描きの顔に向けて、へらへら笑い返した。

壁に背中をつけて、身体を支えながら立ち上がる。紙袋男は、彼よりも少し背が高かった。

「なんだ、おまえ。おもしれーヤツだなあ」

金田は呂律の回らぬ口調で言い、嘲笑った。紙袋男は返事をしなかった。

「なんでそんなのかぶってんの？　よっぽど不細工な顔なの？」

くくく、と笑う。紙袋男は無言だ。

金田は急に声を荒らげ、凄んでみせた。

「なんとか言えよ、この変態野郎。いきなり人を呼び捨てにしやがって、ツラぐらい見せろってんだ。ああ？」

手を伸ばし、紙袋男の胸ぐらをつかもうとした。

男は素早くかわして、手にしていた棒を持ち上げた。

――棒じゃない。

ようやく金田は気付いた。紙袋男が握っているのは、日本刀だった。

飲み屋から漏れてくる細々とした明かりを、白刃が反射する。

近くの店から、酔っぱらった女のけたたましい嬌声が聞こえてきた。その声と、目の前の光景とが、あまりに不釣り合いだった。金田はヒクッとしゃっくりをして、紙袋の顔を見直した。

「……なんだぁ？」

自分の声とは思えないぐらい、間の抜けた声が出た。

「な……なんだぁ？　本物かぁ？　まさかよう……おまえ……まさか……」

酔った頭に、ぼんやりと思い浮かんだニュースがあった。

最近世間を騒がせている連続猟奇殺人。確か、被害者はすでに十数人に上っているはずだ。死体はすべてずたずたに身体を裂かれて発見されている。まるで猛獣に食い散らかされた後のようだという噂もある。被害者同士に繋がりはなく、犯人はまったく手がかりを残していない。

若者たちの間では「ジョーカー様」という名が囁かれている。その名の怪人に、憎い相手の名を告げると、殺してくれるのだという。もちろん、たわいない都市伝説と片づけられ、警察もマスコミもまともに相手にしていないが、恐怖のあまり家の外に出られなくなる若者が増えて、これはこれで社会問題になりつつある。

――まさか。

金田は笑った。うつろな、乾いた笑い声が響いた。

まさか。そんなことがあるわけない。猟奇殺人なんて、テレビの中だけの出来事だ。自分の身に起こるはずがない。

「嘘だろ……嘘だよなあ……なあ……」

金田はひきつった笑いを浮かべて逃げようとした。

紙袋男は、刀を無造作に振り上げた。

金田は絶叫した——いや、自分ではそのつもりだったが、かすれた声が頼りなく漏れただけだった。

これは現実なのだ。夢じゃない。

こいつ、ジョーカーだ。

足がもつれる。背中に激痛が走った。紙袋男が、逃げる金田の背後からばっさり袈裟懸けに斬りつけたのだ。

金田は倒れた。今度は右の足首を斬られた。紙袋男は低く声をたてて笑っている。

殺そうと思えば、一太刀でやれるはずだ。だが、そうしない。じわじわと切り刻んで、被害者の悶え苦しむさまを楽しむつもりなのだ。

金田は戦慄した。目前に迫った死よりも、紙袋男が発する底無しの悪意が恐ろしかった。

「や……やめろ……助け……」

金田は起き上がり、倒れ、右足を引きずって、なんとか逃げようともがいた。紙袋男は、そ

れ以上斬りつけようとしなかった。

金田の心に、狂おしい希望が芽生えた。

冷静に考えれば、逃げられるはずのないことは明らかだ。だが、すでに真っ当な思考ができる状態ではなかった。

そうだよな。俺がこんなところで殺されるはずないんだよ。

こいつはジョーカーじゃなくて、ニュースに便乗して悪戯してるだけの模倣犯なんだよ。玩具の日本刀を振りかざして、相手が怖がるのを面白がってるだけのガキなんだよ。

そうだよ。そうに決まってるじゃないか。

金田は狂ったようにぶつぶつつぶやきながら路地を這った。足の腱を切られて、立ち上がれない。地面に両手をついて、無様に身体を引きずった。

追ってこない。そうだよな。冗談だもんな。ちょっとやりすぎだけどな。

突然、金田の目の前に大きな影が降ってきた。

飲み屋の屋根から飛び下りたらしい。犬だった。

犬？　いや、こんな巨大な犬は見たことがない。セントバーナードよりもまだ大きい。毛並みは燃えるように赤かった。鼻先は狐のように尖っており、その下に長い舌がだらんと垂れている。

巨犬は低く唸った。背後で、紙袋男がのんびりした声で言った。

「悪いな、ヘル公。今夜のエサはマズそうだ……我慢してくれ」
犬は不服そうに鼻を鳴らした。
嘘だ。こんなことは、起こるはずがないんだ。
金田の頭上に、巨大な犬の顔が迫ってきた。肉の腐ったような、臭い息を感じる。はあはあと、荒い息づかいが聞こえる。
犬は長い舌を伸ばして、甘えるように金田の顔をなめ回した。
大きく口が開く。よだれが滴っている。

本日の十一月生まれは大凶。気をつけて過ごしてネ♪

金田の悲鳴は途中でぷつっと途切れた。
閉ざされた酒場の扉の向こうから、女たちの楽しげな笑い声が聞こえてくる。

1

「杏奈さん！　大変ッス、杏奈先輩！」
島崎光雄が、叫びながら駆けこんできた。
杏奈は隅の席にぽつんと座って、フロアをぼんやり眺めていた。
光雄の「大変」はいつものことだ。彼は七姉妹学園新聞部に所属する一年生である。新聞部などというところに入部するぐらいだから、とにかく好奇心旺盛で図々しい。取材と称してしょっちゅう騒ぎに首をつっこみ、そのたびに「大変」と騒ぎ立てている。騒いでいるだけならいいのだが、杏奈のファンを自称してやたらに纏わりついてくるので、鬱陶しいことこの上ない。光雄のどんな「大変」も、杏奈の気を引くことはなかった。
珠間瑠市夢崎区、クラブ・ゾディアック。この近隣の高校生たちのたまり場だ。薄暗いフロアに若者たちが戯れている。光雄の大声は音楽にかき消されて、ほとんど客の注意を引いていなかった。
光雄は杏奈の向かい側の席にちゃっかり座った。杏奈は顔をしかめ、煙草を取り出してくわ

るさい。適当にあしらって突き放すに限る。
「何」
「大変な事件が起きたんス。気を落ち着けて聞いてください……」
光雄は、自分のほうこそ落ち着かなければいけないと気付いたのか、大きく深呼吸をしてから囁いた。
「殺人事件のことッス」
「……殺人？」
「今朝のニュースでやってたの、見ませんでした？　平坂区の路地裏で、例のジョーカー様殺人らしい死体が見つかったって」
「ああ」
それならテレビで見た。全国的に話題になっている。今さら、光雄が騒ぐようなニュースではない。
「事件があったのは昨夜遅くなんスけど、死体の身元がわからなかったんです。中年の男性としか。ところが、さっきようやく判明したそうなんス。明朝のニュースで一斉に出ると思うッスけど」
「それがどうかしたの」

「被害者の名前は金田修二郎」
杏奈は、指の間に挟んでいた煙草を取り落としそうになった。
光雄は杏奈の顔を見つめて、深々とうなずいた。
「そうッス。杏奈さんをはねた男なんス」
杏奈は眉を寄せた。
金田修二郎。忘れようにも忘れられない名前だった。女子短距離のエースとして注目されていた杏奈を、車ではねた男。あの事故のせいで杏奈は右足を複雑骨折し、選手生命を断たれたのだ。
「……本当に、あの金田？」
「間違いないッス」
杏奈は煙草をくわえ直した。
忘れられない名前。そして同時に、思い出したくもない名前だった。
事故を起こしたとき、彼は泥酔していた。あわてて逃げようとしてすぐに捕まった。取り調べを受けながらも、まだ酔いの残る口調で言ったという。死んでないの？　なんだ、死んでないの？　じゃ、逃げることなかったな。
今でも、あの男のことを考えると吐き気がこみ上げてくる。まさか、こんな形で金田の名前を耳にしようとは。

「同情なんてできない」
杏奈は辛辣に言った。
「自業自得ね……誰が殺してくれたのか知らないけど、礼を言いたいぐらい」
「杏奈さん、そんなこと言っちゃダメッス」
「わたしの正直な気持ちだから。ポーズだけのお悔やみなんて、かえって死者への冒瀆よ」
「だけど、絶対に言っちゃダメッス。せいせいしたとか、ざまあみろとか」
「そこまで言ってな……」
「殺したのはジョーカー様なんスよ」
光雄はますます声を低くした。顔が真剣だ。
「ジョーカー様は、自分の意志で殺人を犯すわけじゃありません。誰かから依頼されて殺すんです。つまり、誰かが金田を殺してくれって頼んだッス」
「だったらその人に礼を言わないとね。よくぞ依頼してくれたって……」
光雄の妙な表情に気付いて、杏奈は言葉を切った。
突然、思い当たった。なぜ、光雄が真っ先に杏奈に駆け寄ってきて「大変」と言い立てたのか。なぜ、「そんなこと言っちゃいけない」と釘を差すのか。
「あんた……」
杏奈はあきれて、光雄の顔を見た。

「まさか、わたしを疑ってるの？　わたしがジョーカーに依頼したと思ってるの？」
「僕は思ってません。杏奈さんはそんなことする人じゃないッス」
光雄はぷるぷると首を振った。
「だけど、杏奈さんが金田を憎んでいたことは、大勢の人が知ってます。杏奈さんを疑うヤツもきっといると思うんス。だから、言葉には気をつけないと……」
「ばかばかしい」
杏奈は吐き捨てるようにつぶやいた。
「言いたいヤツには言わせておけばいい。わたしは関係ないんだから」
「でも……」
光雄が心配そうに言葉を継ごうとしたときだった。
「女はこえーなぁ」
わざとらしい大声がした。杏奈は顔をしかめた。
「金田ってやつよぉ、ボロ雑巾みたいにずたずただったってよ。内臓とか全部ぐちゃぐちゃにぶちまけられてよ……カラスが群がってつついてたってよ……」
杏奈は腕を組み、じろっと目を上げた。光雄は顔を真っ赤にして振り返った。
ガタイの大きい、ニキビ面の男がにやにやしながらこちらを見ている。背後に舎弟を二人ばかり引きつれていた。

学生服のくせに、顎にちょろちょろと髭を生やしている。髪はオレンジ色。前歯が一本欠けている。

春日山高校の杉本だ。口と態度だけは大きく、強い者にはへつらい、弱い者は徹底的にいじめる。手に負えない男だった。

無視するに限る。杏奈は目を伏せて煙草に手を伸ばした。杉本はねちっこく話しかけてきた。

「なあ、吉栄。おまえがジョーカーに依頼したんだろ？」

光雄は杏奈に向き直って、唇の形だけで「相手にしちゃダメです」と訴えた。言われるまでもない、そのつもりだった。

しかし、杉本はしつこかった。周囲の連中にも聞こえるよう、大声で続けた。

「そういや最近、周防を見ねえなあ。誰か、あいつがどこにいるか知ってるか？」

杏奈は唇を噛んだ。杉本が何を言い出すのか、見当がついたからだ。

「なーんか、おかしいと思わねえか？　周防を見かけなくなったのって、ジョーカー殺人が起き始めてからだよなあ？」

光雄の顔が青ざめている。テーブルの上に置いた手が震えていた。

「ジョーカーの正体って、案外、周防なんじゃねえの？　あいつなら、やりかねないぜ。頭のおかしいヤツだからな……」

杉本は舎弟たちと声を揃えて笑った。

空気が緊張している。周囲の連中が、かたずを呑んでうかがっていた。杉本を、ではない。杏奈をだ。

「オレも気をつけねえとな。あのイカレ野郎に殺されねえように」

「おい！」

我慢できなくなったらしい。光雄が立ち上がった。

光雄と杉本では、体格が違いすぎる。杉本は目を細めた。彼は、自分より弱い者に突っかかられるのが好きだ。思う存分ぶちのめすことができるから。

光雄は震える声で叫んだ。

「周防先輩を侮辱するな！」

「侮辱ぅ？　侮辱じゃねえよ、大したもんだって誉めてるんだぜ。さすが周防達哉……十何人も殺して逃げ回って……ま、兄貴が刑事だ。警察の情報も筒抜けだろうけどな」

「やめろ！」

光雄はぎゅっと拳を握った。もちろん、殴りかかる力も度胸も彼にはない。だが、杉本は面白そうに目を細めた。

「へええ。やる気か？」

三白眼に、凶悪な光が宿る。血に飢えた目だ。光雄は怯んだ。

「おもしれえ。最近、身体がなまってたとこだ。ちょっと相手してもらおうか……」

光雄は震え出した。とっさに飛び出してしまったものの、どうしてよいのかわからなくなっているらしい。
杏奈はため息をついて立ち上がった。
杉本の視線が動く。今にも舌なめずりしそうな顔だ。
「なんだ？　おまえも何か文句あるのか？」
光雄が泣きそうな顔で杏奈を見下ろした。杏奈は静かに杉本に歩み寄った。
杉本はにやにやしながら杏奈を振り返った。何か言おうとしたようだが、その喉から漏れたのは、言葉ではなく悲鳴だった。――杏奈が、火のついた煙草を杉本の顎に押しつけたからだ。肉が焼ける。顎髭が焦げる。杉本は絶叫してのけぞった。舎弟たちはとっさに動けない。杉本の身体を支えたり、「水、水」と騒ぐので手一杯だ。
「このアマ……このクソがぁあ！」
杉本は涙声で叫び、つかみ掛かってきた。杏奈は素早く飛びのいた。陸上選手としては使い物にならなくなったが、杉本の動きを見切る程度の運動能力はまだある。杉本は勢いあまってテーブルに突っ込んだ。派手な音をたててグラスが飛び散る。
「ふざけやがってぇえ！」
荒れ狂う杉本を避けながら、杏奈は手を伸ばし、かたわらのテーブルに置いてあったビール瓶をつかんだ。

振り上げて、思い切りテーブルの角に叩きつける。瓶が割れて、中のビールが飛び散った。怒声がやんだ。杉本は片手を振り上げたポーズのまま固まった。
杏奈は、尖った瓶を杉本の胸元に突きつけて、低い声で言った。
「ジョーカーに頼むまでもない。それ以上達哉を侮辱したら、わたしがあんたを殺してやる」
「こ……この……」
杉本は完全に気圧されていた。顔が蒼白だ。
根は小心者なのだ。意気がってはいるが、本物の殺気に触れた途端に萎縮する。前に達哉に半殺しの目に遭わされて、前歯一本を失ったときも同じだった。
杏奈は瓶を投げ捨て、素早く踵を返した。
「杏奈さん！」
光雄が叫んだが、杏奈は振り返りもしなかった。群がっていた連中があわてて道を開ける。
「覚えてやがれ、このクソアマ！」
杉本の罵声が浴びせられた。追ってこようとはしない。杏奈は扉を押し開けて店の外へ出た。
青白い月が夜空にかかっている。一歩踏み出そうとしたとき、道路の段差に足を取られて転びかけた。自分の足が「不良品」であることを思い知らされたようで、情けなくなる。杏奈は唇を噛んだ。
――達哉。

小さな声で、名前を呼んでみた。

事故以来、こうやって転びそうになることがよくある。ちゃんと歩いているつもりでも、足が上がりきっていないのだ。達哉がそばにいれば、さりげなく支えてくれるのに。

どこにいるんだろう。どこに行っちゃったんだろう。なぜ、急にゾディアックに姿を現わさなくなってしまったんだろう。

周防達哉は、杏奈と同じ七姉妹学園の三年生である。たぶん、このあたりの高校生をつかまえて尋ねたら、半分以上から「知っている」と答えが返ってくるだろう。彼は、ある種の有名人だった。

ただ歩いているだけでなんとなく人目を引く。整った容姿のせいばかりではない。彼には、独特の雰囲気があった。

口数は多くないが、ぼそっとつぶやく一言がいつも核心をついていた。喧嘩っぱやいほうではあったが、杉本のような弱い者いじめは決してせず、むしろ助けになってやることが多かった。以前に杉本をぶちのめしたのは、杉本が年下の生徒を脅しつけて万引きをやらせていたことがわかったからだ。

といっても、いわゆるヒーロータイプ、正義の味方というわけではない。いつも何かにイライラしているような緊張感があって、そのせいで、特別に親しくなる相手は少なかった。

杉本が達哉のことを「イカレ野郎」と呼んだのも、あながち理由のないことではない。確か

に達哉には、キレるとどうなるかわからない物騒なところがあった。一目置かれてはいたが、慕われていたわけではない。それが、周防達哉だった。

杏奈は、数少ない友人の一人だった。以前から同級生ではあったが、親しくなったのは、交通事故の後だ。あれ以来、杏奈は学校をさぼりがちになり、ゾディアックで達哉と顔を合わせることが多くなった。杏奈は彼に、自分と似た魂を感じた。人付き合いはあまり好きではないのに、達哉といると心が安らいだ。

達哉のほうがどう感じていたのかはわからない。だが、杏奈にとって達哉は、友人以上の存在だった。

それなのに達哉は、杏奈にも事情を話さずに行方をくらましてしまった。

最後に会ったとき、彼がいつもとは違う暗い表情をしていたことを覚えている。何かあったのかと聞いてみると、彼は独り言のように「犯した罪は償わなきゃならない」とつぶやいた。おだやかならぬ言葉に杏奈は驚き、どういう意味か尋ねたが、達哉は黙りこんでしまい、それきり口をきいてくれなくなった。あれ以来、達哉の姿を見ていない。

ケータイに何度もかけたが、繋がらなかった。思い切って彼の自宅にも電話してみたが、父親らしい人物が出て、息子は帰ってないと応えた。

杏奈は傷ついていた。達哉が黙って消えてしまったことに。

他の連中には話せなくても、杏奈にだけは気持ちを打ち明けてほしかった……そう思うの

は、勝手だろうか？
　それとも、電話すらできないほど切迫した理由があるのだろうか。何か厄介なことに巻き込まれているのではないか。悪い可能性ばかりが思い浮かんで、たまらない気持ちになった。
　――ジョーカー。
　光雄から聞いた話を思い出した。
　杏奈の選手生命を断った男が、文字通り生命を断たれた。杉本の悪趣味な口調がよみがえる。内臓ぶちまけられて……カラスがつついて……。
　気分が悪くなる。だがその一方で、やはり「ざまあみろ」と思う気持ちがあることは否定できなかった。
　杏奈には、走ることがすべてだったのだ。他には何も取り柄がない。勉強は苦手だし、絵も歌も下手。手先は不器用だし、料理もできない。杏奈から陸上を取ってしまったら、何も残らない。
　あの事故以来、杏奈はからっぽになった。達哉のいない今は、なおさらだ。生きているという実感がまるでない。
　杏奈をこんな灰色の世界に追い込んだ男。金田。死者に対して、こんな気持ちを抱いてはいけないと思っても、どうしても抑えきれない。
　ざまあみろ。自業自得だ。

そんな風に思ってしまう自分が気持ち悪かった。ひどい自己嫌悪に苛まれながら、杏奈は夜道を歩いた。

*

翌朝の学校は、異様な雰囲気につつまれていた。

杏奈が教室に一歩入った途端、クラスメイトたちはぴたっと会話をやめた。

なんの話をしていたかは容易に想像がついた。杏奈は知らぬ顔をして自分の席に座った。

金田の殺害については、今朝のテレビでも新聞でも大々的に報じられていた。「若者たちの間で話題のジョーカー呪い」について触れている記事もちらほらあった。もちろん、良識ある記事は、犯人はジョーカーだなどとは書かない。「連続する殺人事件が若者たちの不安を煽り、無気味な都市伝説を蔓延させている」というスタンスで、犯人の手がかりすらつかめない警察を攻撃していた。

大新聞がどんな記事を書こうとも、高校生の間では「犯人はジョーカー」説は常識だ。疑っている者などほとんどいない。依頼の仕方も、口コミで伝わっていた。

殺人の依頼には、必ず携帯電話を使う。固定電話では駄目らしい。自分の番号にかけると、話し中にならずにジョーカー様に直通する。殺してほしい相手の名前を告げる。それで完了だ。報酬も必要ない。コンビニで買い物をするより簡単に、憎い相手を消すことができる。

金田が杏奈をはねた人物であることは、七姉妹学園の誰もが知っていた。交通事故と、ジョーカー呪い。セブンスの生徒たちは、みんなその二つを結びつけて考えているようだった。

——吉栄さんって、怖いもんね。人殺しの依頼ぐらい、平気でやりそう。

——でも、気持ちわかるー。吉栄さんかわいそうだったもんー。金田って人、殺されて当たり前だよー。

——事件の現場、すごかったらしいよ。駆けつけた警官が全員吐いたって。これまでのジョーカー様殺人の中でも、サイアクだったらしい。

級友たちの囁きが、断片的に耳に入ってくる。杏奈はいらいらした。

金田を殺してやりたいほど憎んでいたのは事実だ。だからといって、ジョーカーに殺人を依頼するようなことはしない。杏奈はそういうやり方を好まない。

別に、クラスの連中に本当の気持ちを理解してほしいとは思わなかったが、憶測だけでひそひそ噂されるのは不快だった。

せめて達哉がいれば、気分をまぎらせられるのに。彼は最近、学校にも姿を見せないのだ。いっそ帰ってしまおうかと思ったが、そうするとまた余計な詮索をされそうだった。杏奈は半分意地になって、授業を受けた。

昼休み。教室にいると息が詰まるので、杏奈は席を立った。廊下を歩いていても、好奇の視線が突き刺さってくる。無視して、顔を上げて歩いた。

「吉栄さん」
声をかけられたので、足を止めた。
隣のクラスの山尾慶子だった。今日、杏奈に声をかけてきたのは彼女が初めてだ。
慶子は、一年のときからずっとクラス委員をつとめている優秀な生徒だ。長い黒髪を、いつも綺麗な三つ編みにしている。色白の眼鏡美少女である。おとなしい性格で、あまり目立つタイプではないが、男子には人気があった。
杏奈とは特に親しいわけではないのだが、慶子のほうはなぜか杏奈に好意をもっているらしい。特に事故の後は、同情しているのかなんだか知らないが、何かにつけて声をかけてくる。学校をサボって遊び歩いている杏奈を、悲しげな顔で注意することも時々ある。杏奈にとっては、少々鬱陶しい相手だった。
慶子は心配そうに眉を曇らせて言った。
「伝言があるの。冴子先生から」
高見冴子は英語教師で、杏奈のクラスの担任である。自分のクラスの杏奈への伝言を、わざわざ違うクラスの慶子に頼むとは奇妙だった。
杏奈が尋ねる前に、慶子が説明した。
「さっき、たまたま用事があって職員室に行ったの。そこで頼まれたのよ。冴子先生が直接話すと目立つから、呼んできてほしいって。クラスの人に変に勘繰られると嫌でしょ」

「……ああ」

先生の気遣いなのだと気づいた。冴子先生は、生徒の立場に立って真剣に考えてくれるので、みんなから好かれている。

「なんの用だろ」

「あのね……言いにくいけど」

慶子は周囲をうかがって、誰も聞いていないことを確かめてから続けた。

「今、刑事が来てるのよ」

「刑事？」

「うん。職員室で冴子先生と話してた。例の事件の聞き込みみたい」

杏奈はうんざりした。生徒たちの無責任なお喋りならともかく、警察まで杏奈に目をつけているというのだろうか。だとしたら、見当はずれもいいところだ。結局、事件はまったく解決に向かっていないということか。

「雑誌記者も取材に来てるみたい。急に注目の的になっちゃったわね、我が校」

「……」

「あ、もちろん吉栄さんが気にすることないよ。警察だって、まさか本気で疑ってるわけじゃないだろうし。事故当時のこととか、ちょっと参考に聞いておきたいだけだと思う」

「別に気にしてないけど」

「そうよね。良かった」
慶子はにこっと笑った。笑うと優等生っぽさが薄れて、急に可愛らしい雰囲気になる。
「とにかく、職員室に行ってみて。大丈夫よ、冴子先生が立ち会ってくれるんだし」
慶子は励ますように言って、去っていった。
杏奈はため息をついた。すっぽかそうかと思ったが、先生の顔をつぶすのは気が進まない。
杏奈は、他の生徒たちほど冴子先生を慕っているわけではないが、一応の好意はもっていた。
この学校の教師の中では、かなりまともなほうだ。
仕方がない。職員室に出向くことにした。

ノックをして扉を開けると、入り口に近い席にいた冴子先生が振り返った。
男が二人立っている。なるほど、これが刑事らしい。
「来た来た。悪いね、吉栄。ちょっと、この人たちが話を聞きたいっていうんだ」
冴子先生は、いつものようにさばさばした口調で言って杏奈を手招いた。
室内には数人の教師がいる。みな、無関心を装っているが、話に耳を傾けているのがあからさまだった。
「こちら、港南署の巡査部長さんと、県警の本部刑事さん。彼女が吉栄杏奈です」
冴子先生が互いを紹介した。杏奈は軽く会釈して、二人の警察官を見た。

若いのと、中年の。若いほうが巡査部長らしい。サングラスをかけ、きっちりスーツを着込んだ、なかなか男前の刑事である。中年のほうはくたびれたコートを引っかけて、苦虫を噛みつぶしたような顔をしている。刑事ドラマに出てくるタイプそのままだった。

「わざわざお呼び立てしてすみませんでした」

若いほうが言って、ぱきっと二つ折りにしたような礼をした。高校生の杏奈に対しても言葉遣いや態度が丁寧なのは、刑事という職業の習性なのか、それともこの男の性格なのか、よくわからない。

「単刀直入に申し上げます。我々は、一昨日の深夜発生した殺人事件についての捜査を行なっているところです。ご存じのことと思いますが、被害者は金田修二郎。以前に交通事故を起こした人物です。そのときの被害者であるあなたに、少々お話をうかがいたいと思い……」

ちっとも単刀直入じゃない。

長話に付き合わされる気はなかった。そこで、杏奈が代わりに話を進めてやった。

「わたし、殺してないわよ」

刑事は絶句した。中年のほうが、若い刑事にちらっと目配せを送った。冴子先生が、あまりカッカするなと目で伝えてきたが、杏奈は無視した。

「犯人捜しなら、他を当たれば。わたし、何も知らないから」

「あー……いや、そういうわけではありません。ただ、被害者の身上をいろいろ調べているう

ちに、事故の件が浮上してきたもので」
「やってないって言ってるのよ。アリバイでも聞きたいの？　一昨日の夜はずっと家にいた。家族とは顔合わせてないから、証言してくれるかどうか知らないけど」
刑事たちは黙りこんだ。杏奈は腕を組み、「他には？」と尋ねた。
「ないなら、終わりにしてほしいんだけど」
「あー……ありがとうございました。ご協力感謝します」
若い刑事はまた、腰から二つ折りの礼をした。
冴子先生は苦笑し、「まったく……」とつぶやいた。杏奈の態度を心配しつつも、とりあえず刑事が解放してくれたので、ほっとしているようだった。
杏奈は職員室を出たが、すぐに呼び止められた。
「待ってくれ」
若いほうの刑事である。一人で職員室を飛び出してきた。
何か聞き忘れたことでもあるのか。冴子先生や、中年の刑事には聞かせられないこと？
杏奈は怪訝に思って刑事を見上げた。
「何。まだ何か聞きたいの？」
「いや、事件のことはもういいんだ。個人的に、君に尋ねたいことがあって」
さっきより、言葉遣いが砕けている。杏奈は刑事を睨んだ。

「電話番号ならお断りだけど。刑事が女子高生口説いていいわけ？」
「そんなことじゃないっ」
刑事は憤然として怒鳴った。冗談の通じない性格らしい。
「君は、三年B組の生徒だな」
「だったら何」
「同じクラスに、周防達哉という生徒がいるだろう」
杏奈は驚いて、刑事の顔を見つめ直した。
なぜ、刑事の口から達哉の名が出るのだろう。まさか、達哉は何か事件を起こしたのだろうか。
昨夜、杉本が言っていたことを思い出した。ジョーカーの正体って、周防じゃねえの……？
ぞっとした。もちろん杏奈は、そんな可能性がこれっぽっちもないことを知っている。だが、警察は……。
杏奈のところにまで聞き込みに来るぐらい、見当はずれの捜査を行なっている警察のことだ。杉本あたりの与太話を真に受けて、達哉に容疑をかけているのかもしれない。
杏奈はさっきよりももっと険しい目で、刑事を睨みつけた。
「達哉は関係ない」
「何？」

「達哉は人殺しなんかしないい。喧嘩で半殺しにすることはあっても、無差別殺人なんてするわけない」
「……半殺し……？」
刑事は呆然とつぶやいた。余計なことを言ったかと、杏奈は舌打ちしたい気分だった。
しかし、刑事の態度は杏奈の予想外だった。彼は心配そうに眉を下げて、うろたえたような声で言った。
「そんなひどい喧嘩をするのか……達哉は」
達哉、という呼び方が奇妙だ。刑事ならば「周防」と呼ぶはずではないか。
やっと杏奈は気が付いた。そういえば、達哉には刑事の兄がいると聞いたことがある。あまり仲が良くないらしく、達哉はその話題に触れられるといつも嫌な顔をした。
では、この男が達哉の兄か。タイプがまるで違うが、そう思ってみるとなんとなく、ほっそりした顎のあたりが似ているような気がする。
「あなた、達哉のお兄さん？」
「あ、ああ。そうだ」
刑事はサングラスを指で押さえ、「なぜわかったのかな」と不思議がった。阿呆でもわかるわと思いながら、杏奈は言った。
「達哉がどうかしたの」


Ken·S

「いや。なんでもないんだ……」
「家にも帰ってないんでしょう」
刑事は、見るからにビクッとした。なかなか感情を表にあらわさない達哉と違い、わかりやすい男である。
「何があったの？　達哉、ぱったり姿を見せなくなったの。ケータイも繋がらないし」
「そうか……友達にも連絡していないのか」
「やばいことにかかわってるんじゃやない？　達哉、無茶するから」
「……そうなのか」
刑事は頭を振った。ひどく落胆しているようだった。
「恥ずかしながら、僕は弟が外でどんなことをしているのかまるで知らないんだ。あいつは何も話してくれないから」
「でしょうね」
杏奈の簡単な相槌に、兄はますます悲しげな様子になった。
「達哉は、僕のことを何か言っていなかったか」
「なんか、お節介でうるさいとか言ってたと思うけど」
「……そうか」
何人かの生徒が二人の脇を通り過ぎ、好奇心むき出しのまなざしを投げかけていった。これ

以上立ち話をしていると、ますます不快な噂の的にされてしまう。

「もう話は終わり？　じゃあ」

踵を返そうとすると、刑事は無理に元気を装った口調で言った。

「達哉について、何かわかったら教えてほしい。僕のほうへ連絡が入ったら、友達を心配させないよう言い聞かせておくから」

この兄はおそらく一生気付かないだろう。そういう世話焼きな性格が、達哉に鬱陶しがられているのだということに。

杏奈は「わかった」と言って、刑事から離れた。

午後の授業が始まるまでに、まだ少し時間があった。

杏奈は中庭に出た。屋内にいるより、少しでも気が晴れるかと思ったのだ。

だが、外に出た途端に、厄介な相手に見つかった。一学年下の片山典子が駆け寄ってきた。

ノリコは陸上部の後輩である。いや、杏奈はもう部を辞めたから、元・後輩というべきか。

杏奈に憧れて陸上を始めたというだけあって、一番熱心な杏奈ファンだ。

「お姉さま……」

何度やめろと言っても、この気色悪い呼びかけをやめない。杏奈が事故に遭ってからは、まるで杏奈を立ち直らせるのが自分の使命だとでも考えているかのように、余計にしつこく纏わ

りついてくるようになった。
ノリコは顔色が悪かった。杏奈の顔を見上げて、消え入りそうな声で言った。
「あの……ジョーカー様事件のこと……」
「何？　あんたもわたしを疑ってるの？」
苛立った杏奈は、刺々しい口調で尋ねた。ノリコは大きく目を見開き、首を横に振った。
「違います！　わたし、そんなこと全然……」
「だったら放っておいてくれない？　鬱陶しいんだけど」
「だけど……あの……」
ノリコは小動物のような目で杏奈を見つめて、小声で尋ねた。
「どう思いますか」
「どうって？」
「あの……殺された金田って人……こ、こんなこと言っちゃいけないかもしれないけど……わたしは、当然だと思うんです……」
ノリコは怯えているようだった。いつも気弱そうな子だが、今日は特にひどい。無理もない。伝えられたニュースはあまりに凄惨だった。
杏奈はノリコの顔を見下ろした。ノリコは笑ったが、いつもの無邪気な笑顔ではなかった。暗い目をしている。

「だって、あの人のせいでお姉さまは走れなくなってしまったんですもの……人の人生を台無しにしておいて、へらへら生きてるなんて……天罰が下ったんだと思うんです。ジョーカー様は、悪いやつをやっつけてくれたんです……あの……」

ノリコは急に涙ぐんだ。笑ったり泣いたり、情緒不安定のようだ。手の甲で涙をぬぐって、取り憑かれたような早口で続ける。

「ごめんなさい、ごめんなさい。こんなこと言っちゃいけないいてすよね。いくら悪人だって身体を裂かれて殺されるなんて……ひどすぎ……」

「それだけ？」

杏奈は顔をしかめた。ノリコはおずおずと杏奈を見上げた。

「用事がないなら、放っておいてほしいんだけど」

「あの……は、はい。ごめんなさい……」

ノリコはうなずき、後じさるように杏奈から離れようとした。

そのときだった。割れるような声が中庭に響いた。

「吉栄ぁあ！」

まったくうんざりする。今日は、誰も彼もが杏奈を捜し、杏奈を呼びつけようとしているようだ。声の主は、振り返るまでもなく明らかだった。

反谷校長だ。両手を腰に当てて立っている。ちょうど、中庭の中央に立てられている校長自

身の銅像の横にいるので、双子のようで滑稽だった。

反谷は、口うるさく陰険で押しつけがましいので、生徒たちから嫌われている。もともと自由な校風で知られていた七姉妹学園なのに、反谷が着任してからは急に校則が厳しくなってしまった。優秀な生徒には猫撫で声で接するが、少しでも問題を起こした生徒には容赦がない。学校の名声と、自分の名誉のことしか考えていない校長だった。陰では、名前をもじって「ハンニャ」というあだ名を付けられている。

杏奈が陸上界の新星として注目を集めていたころ、反谷はしきりに杏奈を持ち上げ、ちやほやした。「君は我が校の宝だ」、「他の生徒の手本になってくれ」顔を合わせるたびに、そんな歯の浮きそうな賛辞を受けた。

事故後、反谷の態度は一変した。走れなくなった元・陸上選手なんて、学校にとって宝どころではない。もともと成績が悪く、素行のほうもどんどん悪化していった杏奈は、もうお荷物でしかなかった。反谷は何かにつけて杏奈に嫌味を言ったり、当たり散らしたりするようになった。杏奈はもともと反谷が嫌いだから、嫌われたところでどうということはない。かえってせいせいしているぐらいだが、いちいち絡まれるのは鬱陶しかった。

無視して通り過ぎようとしたが、反谷はすっと身体を動かして、杏奈の行く手をふさいだ。いつもにも増して不機嫌そうだ。たぶん、訪れた刑事のせいだろうと杏奈は推測した。何よりも体面を重んじる反谷にとって、殺人事件がらみの聞き込みを受けるなんて、恥辱以外の何

物でもないはずだ。
「なんだ、貴様。その反抗的な態度は！」
「……」
「いつかは問題を起こすと思っていたが、ついに警察沙汰か。我が校の名誉を穢しおって……わかってるのか、貴様のような出来損ないの生徒がいると、他の優秀な生徒たちまで同じ目で見られるんだぞ！」
「……」
「ジョーカー様だかなんだか知らんが、大それたことをやってくれたもんだ。貴様は我が校の恥だ！」
「いい加減にしてよ」
　無視しようと思っていたのだが、決めつけるような反谷の口調にむっとして、思わず言い返していた。反谷がわざと挑発し、杏奈を怒らせて、懲罰の機会をつくろうとしていることはわかっていたが、滑り出た言葉は止まらなかった。
「わたしは何もやってない」
「嘘をつけ。警察はおまえのことを根掘り葉掘り聞いていったぞ」
「やってないって言ってるでしょう」
「お姉さまはそんなことしません！」

ノリコが加勢に来た。さっきまで蒼白だった顔が、今は真っ赤になっている。口から唾を飛ばしそうな勢いで、杏奈を押しのけるようにして反谷に食ってかかった。
「何も知らないくせに、お姉さまを犯人扱いしないで！」
「なんだ、貴様は。二年生だな。校長に向かってその口のきき方はなんだ」
「校長先生でも誰でも、お姉さまに向かって失礼なこと言わないでください！」
「ふん」
反谷は嘲笑った。嫌味たっぷりの目で杏奈を見て、ふんぞり返る。
「覚えておけ、我が七姉妹学園は、学問にもスポーツにも秀でた生徒が通う名門校だ。おまえのような出来損ないの来るところではないわ。おまえ自身、優秀な生徒たちと机を並べるのは肩身が狭かろう。中退届けなら、いつでも受理してやる。出来損ない仲間の周防の分まで書いておくといい。手間が省けるわ」
校長はくるっと背を向けて去っていった。
「ひどい……最低……」
ノリコは怒りのあまり震えている。杏奈は反谷の後ろ姿を睨みつけていた。あんな下劣な男の言うことに、いちいち傷ついたり怒ったりする気にはなれない。だが、最後に達哉のことまで侮辱していったのは許せなかった。
「ちょっと！　あんた！」

突然、大声が響いた。
若い女性が杏奈に近づいてくる。生徒ではない。教師でもない。蜘蛛の巣みたいな模様のスーツを着た、背の高い女性だった。なかなか美人だが、思いっきり険しい顔で杏奈を睨みつけ、ずんずん大股に歩み寄ってくる。
女は杏奈の前で仁王立ちになり、憤怒の形相で怒鳴った。
「何よ、あれ！　あそこまで言われて黙ってる気ぃ!?　不甲斐ない！　なんか言い返したらどうなのよぉ!?」
「うらら、うらら」
連れの女が、袖を引っ張っている。こちらは、胸にハートの模様のついた大胆なスーツを着ていた。
どちらも見たことのない人物だった。教育実習というわけでもない。なぜ学校の中庭にこんな二人組が出現したのか、杏奈は不審に思った。
「誰、あんたたち」
「あ、ごめんなさい。はじめまして」
笑顔で言ったのは、ハートのスーツのほうだ。蜘蛛の巣のほうは、まだカリカリして足元の地面を蹴飛ばしたりしている。血の気が多そうだ。
「わたし、キスメット出版の天野舞耶っていうの」

「出版社……？」
「ええ。高校生向けの『クーレスト』って雑誌、知らないかしら。わたしはその雑誌の記者なの。高校生の噂について調べたくて、校内に入る許可をいただいているの」
そういえば、山尾慶子が言っていた。刑事だけではなく、雑誌記者も訪れているらしい、と。
なるほど、記者ならば納得がいく。ＯＬにしては個性的すぎる服装をしていると思った。
うんざりした。誰も彼も、的外れな推測で杏奈をわずらわせる。
「あんたたちも、わたしが殺したと思ってるわけ？」
「いいえ、そういうわけじゃないのよ。わたしはただ……」
「なんでも好きなように書けば」
言い捨てて、杏奈は顔を背けた。
蜘蛛の巣スーツの女が、たまりかねたように言った。
「あんた、そんな無気力な態度でいいわけ？　あんな最低の校長に、あそこまで言わせてさ！　なんとか思い知らせてやりなよ……」
「殺してやる」
自分でも驚くほど、激しい言葉が出た。二人の女性はぎょっとしたように杏奈を見た。
「あんなやつ、殺してやる」
昨夜、杉本にビール瓶を向けたことを思い出した。振り回す気はなかったが、杉本の怯えた

顔を見たとき、暗い喜びがこみ上げた。自分の中に、激しい暴力の衝動があることを初めて知って驚いた。あの一瞬の高揚感は悪くなかった。

杉本も、反谷も、みんな死んでしまえばいい。金田みたいに、ボロ雑巾になって死んでしまえばいいのだ。

杏奈は校舎に向かった。背後で、ノリコが必死の弁明をしているのが聞こえた。

「今のは言葉のあやです。お姉さまは本気じゃないですから。変な記事書かないで……」

記者たちの答えは聞こえなかった。

*

午後の授業中、杏奈はルーズリーフにペンを走らせた。

ノートを取っていたわけではない。退学届をしたためていたのだ。

どうやって書けばいいのかわからない。何枚もルーズリーフを無駄にした揚げ句、ようやくシンプルでわかりやすい退学届ができあがった。

退学届

私こと三年B組吉栄杏奈は、本日限りをもってこんな学校やめさせてもらいます。以上。

文面がおかしいような気もしたが、意図が伝われば上出来だろう。

授業が終わり、杏奈は教室を出た。

これを校長に突きつけて、すべて終わりにするつもりだった。私物を整理し、冴子先生に挨拶して、帰る。明日からはもうこんな学校来ない。やめた後どうするかはまだ考えていなかったが、適当にバイトでもして暮らせばいい。そして達哉を捜すのだ。達哉はきっと「バカだな」と笑うだろうが、杏奈の選択を間違っているとは思わないはずだ。

校長室は、三階の突き当たりにある。近づいた杏奈は、扉が細く開いていることに気付いた。中に誰かいるのだろうか。反谷校長以外の人間がいるなら、出直したほうがいいか……。

杏奈はノックをせずに、扉の隙間から中をのぞきこんでみた。部屋には三人の人物がいた。例の雑誌記者二人と、達哉の兄の刑事。三人ともドアに背を向けている。

お揃いで、何をやっているんだろう。反谷校長の姿が見えないのも変だった。この連中なら、特に遠慮する必要はなさそうだ。杏奈はノブに手をかけ、扉を大きく開けてみた。

三人が一斉に振り返った。全員、奇妙に強ばった表情をしている。

杏奈は嫌な臭いに気付いた。

なんだろう。生々しい悪臭が部屋に充満している。これは——血の臭い？

杏奈は視線を落とした。黒い染みが広がっている。絨毯が黒い液体をたっぷり吸い込んで、長い毛足がぺたんと寝てしまっている。

黒——じゃない。濃い赤。

その事実が頭に染み込むのに数秒の時間がかかった。これは、血の染みだ。部屋に満ちているのは、血と内臓の臭いだ。

杏奈は呆然とした。何かに背中を押されたように、ふらふらと部屋の中に踏み入った。

応接セットの陰に隠れていたものが視界に飛び込んできた。床に、人が倒れている。片手を、かきむしるように前に伸ばしていた。俯しているので顔はわからないが、白髪まじりの長髪は見間違いようがなかった。反谷校長だ。

背広の背中が、絨毯と同じようにたっぷり血を吸い込んでいる。周辺に飛び散っているのは

——杏奈は思わず口を押さえた。血膿にまみれ、ずたずたにちぎれて散乱しているのは、反谷の身体の中身だった。

「あんた……」

震える声が聞こえた。

蜘蛛の巣スーツの女性だった。化け物でも見るような目で、杏奈を見つめている。

「あんた……まさか……」

中庭での会話が、杏奈の脳裏によみがえった。

殺してやる。杏奈は確かにそう言った。この二人の記者は、はっきりそれを耳にしている。
吐き気がする。杏奈は人形のように首を横に振った。思考が混乱し、視界がぐるぐる回り出す。ようやく、恐怖がこみ上げてきた。
「わたしじゃない……」
三人の視線が冷たかった。氷の矢のように、杏奈の瞳を突き刺す。杏奈は逆上して叫んだ。
「わたし、やってない！」
「待ちなさい！」
叫んだのは達哉の兄だ。だが杏奈は素早く校長室を飛び出していた。

選手だったころの足があればいいのに。
杏奈は切実にそう願った。百メートルを十二秒台で走ることのできる足があれば、こんな学校から一目散に逃げ出せるのに。
現在の杏奈の走る速度は、普通の女子高生よりも劣る。右足を庇ったみっともないフォームだ。
思うように動かない足がもどかしい。気持ちばかりあせって、前へつんのめりそうになる。
足だけじゃない、ゾディアックで覚えた酒と煙草のせいで、心肺機能も大幅に低下している。
呼吸が苦しい。

逃げなければ。校長室から遠ざからなければ。犯人にされてしまう。

全身に鳥肌が立っていた。むごたらしい死体の映像が、脳に焼きついている。顔が見えなかったのは幸いだった。死に顔を見たら、その場で嘔吐していたに違いない。

突然、背後が騒がしくなった。獣の咆哮のような、鋭い叫び声が聞こえてきた。人間のものではない。杏奈は、ジョーカー事件のニュースを思い出した。

発見された死体は、いずれも獣に食い散らかされたような惨状を呈しているという。反谷校長の死体も、確かにその通りだった。

まさか、ジョーカーの正体は獣？　ライオンとか、トラとか、クマとか。そんな猛獣が、学校内をうろついている……？

杏奈は足を止め、壁に背をもたせかけて喘いだ。後ろを振り返ったが、曲がり角に遮られて、その向こう側で何が起きているのかわからなかった。何かがぶつかり合うような激しい音がしている。女性の叫び声が混じった。引き返す勇気はなかった。

逃げよう。考えるのは後回し。

呼吸を整え、再び走り出そうとしたときだった。杏奈は何かにぶつかりそうになった。

背後に気を取られているうちにどこからか現われたらしい。長身の人影が、杏奈の行く手をふさいでいた。

奇妙な人物だった。寝間着のような白衣の上にコートをはおり、頭に紙袋をかぶっている。

紙袋の左目の部分に小さく穴が開き、その下に歯をむき出して笑う口が描いてある。
服も紙袋も、点々とどす黒い染みで汚れていた。その染みがなんなのか、考えるまでもなかった。
小さな穴から、目がのぞいている。色素の薄い、小さな虹彩。片目しか見えないが、そこに宿った狂気が杏奈を戦慄させた。
「何……あ……あんた……」
後じさろうとしたが、紙袋の怪人は素早く手を伸ばして杏奈の腕をつかんだ。
加減を知らないつかみ方だった。尖った指先が肌に食い込む。思わず悲鳴が漏れた。
「やっと会えたな、レイディ」
男の声が囁いた。暗い喜びに濡れた声。
背筋がぞくぞくした。男は全身から邪気を発していた。
「待ちわびたぜぇ……おまえに会いたくてよぉ……」
「な、何……！」
杏奈は腕を振りほどこうともがいたが、無駄だった。男はますます力を強める。激しい痛みに、呼吸が止まりそうになった。
男は杏奈の身体を乱暴に引き寄せると、笑い出しそうな声で囁いた。
「一緒に行こう、レイディ」



「何よ、レイディって……わたし……」
杏奈は恐怖に全身を強ばらせながら、必死に喚いた。紙袋の男は満足そうに杏奈の言葉を遮った。
「『そんな柄じゃない』、か？」
「……な……」
「向こう側のおまえもそう言ったんだよなあ。『不服か？』とトーラスが聞いて、『別に』とおまえが答えた。そうだったなあ？」
何を言っているのかわからない。完全に狂っている。
「おっと、再会を懐かしんでる暇はねえな……」
気がつくと、背後の物音がやんでいた。紙袋の男は、杏奈の腕を引っ張った。
「ちょ、ちょっと、何、離して……！」
「来いよ。また楽しくやろうぜ」
男の服には、血の臭いが染みついていた。

機械の動く音が聞こえる。眼下に、巨大な歯車が嚙み合い回っているのが見える。
七姉妹学園の校舎正面には、校名の由来である七つ星のモザイクを埋めこんだ、巨大な時計がある。ここはその裏側だった。校舎の四階に当たる時計台だ。

生徒の立ち入りは禁止されている。もちろん杏奈も入るのは初めてだ。男は杏奈をこの部屋の上部に張り出した細い通路に連れてきたのだった。
「さて、と……連中が追いついてくるまでに、まだ少し時間がある。話をしようぜ」
男は杏奈と真正面から目を合わせた。
袋の奥からのぞく左目が輝いている。狂気を宿した瞳。
「俺はおまえの仲間だ。迎えにきたんだよ」
「仲間……?」
杏奈は激しく首を振った。
「変なこと言わないで。わたし、あんたなんか知らない……!」
「忘れてるだけだ。俺だよ。レオだよ」
「知らないって言ってんでしょう! わたし、ジョーカー呪いなんてやってない。電話なんてかけてない!」
「じきに思い出すさ。俺のことも、『向こう側』のこともな……」
レオと名乗った男は、杏奈の顎をぐいっとつかんで顔を向けさせた。
禍々しい紙袋がすぐ目の前に近づいてくる。杏奈は必死に顔を背けようとしたが、彼の力にはかなわなかった。
「トーラスもアクエリアスも、間もなく目覚める。もちろん、あの方もな。そうすりゃ、『こっ

ち側』の間違いは正される。今度こそ、あの魔女とガキをぶち殺して、託宣を実現させようぜ……」

「人違いよ」

杏奈は顎をつかまれたまま、必死に言い張った。

「わたしは吉栄杏奈。レイディなんて人、知らない……」

「悪いようにはしねえよ。一緒に来い」

「人違いだって……！」

突然、下のほうで激しい音がした。誰かが扉を開けて転がりこんできたのだ。

紙袋の男は素早く杏奈から離れた。杏奈は手すりの間からこわごわ眼下をのぞきこんだ。

三人の人物がこちらを見上げていた。達哉の兄と、記者二人。

「五〇一号、その子から離れろ！」

刑事が叫び、拳銃を抜いた。さっき杏奈が話したときの、人の良さそうなブラコン気味の男とは別人のようだった。紙袋男に対する激しい敵意に、杏奈のほうが怖くなったほどだ。

しかし、紙袋男は少しも動じていなかった。面倒くさそうに怒鳴り返した。

「邪魔すんじゃねえよ。てめえらは、そいつらの相手でもしてやがれ」

杏奈は眼下を見下ろしたが、何が起きているのかよくわからなかった。三人が、敵に対峙したように身構えている。だが、彼らが何に向き合っているのか、杏奈の目には見えなかった。

「来いよ」
紙袋男は杏奈の腕を引いた。杏奈は足を踏んばって抵抗した。
「離して」
「まだわからねえのか？　レイディ、いつまで寝ぼけてる。早く目を覚ませ。この世界が嘘っぱちだってことに気付けよ」
「あんたが……」
時間を稼がなくてはいけない。杏奈はそう直感した。
こいつに連れていかれたら、もう二度と正気の世界へは戻ってこられない。あの刑事たちが助けてくれるまで、ここで粘らなければ助からない。
「あんたが校長を殺したの？」
「そうだよ」
男はあっさり認めた。
「おまえも望んでただろ。あんな男、死んじまえばいいって」
「望んでなんかいない。校長は嫌いだったけど、まさか、あんな……」
思い出すと吐き気がこみ上げてくる。杏奈は浅い呼吸を繰り返した。
「あんた……何者よ……悪魔……」
「悪魔？　俺は、人の望むことをかなえてやってるだけだぜ。『向こう側』であの方がやったの

と同じようによ」
「向こうとかこっちとか、なんのことよ。さっぱりわからない……」
「だから、俺が思い出させてやるよ。来な」
強引に腕を引っ張られた瞬間だった。
銃声が響いた。杏奈の背後で、明かりとりの小さな窓が割れた。
「下りて来い、五〇一号！　抵抗は無駄だぞ！」
刑事だ。どうやら、紙袋男がけしかけた敵を倒したらしい。両手で拳銃を構え、声を張り上げている。
「次は威嚇ではすまさん。観念しろ！」
「――やれやれ」
紙袋男は臆した様子もなく、三人を見下ろした。
「しょうがねえな、ちょっと寝てろや」
紙袋男は片手を上げた。
閃光が迸ったように見えた。身体が竦む。何かはわからないが、男の手のひらからとてつもないエネルギーが放たれたのを感じた。刑事も、他の二人も、声もたてずに倒れた。
「……殺したの？」
「まだだ。こんなに簡単に殺しゃしねえよ。あいつらにはたっぷり思い知らせてやらねえと……

火が足りねえんだよ……愉しい火をつけてやらねぇとなあ……ヒイヤッハアアアア！」
　男は狂ったように笑い出した。
　杏奈は絶望にとらわれた。逃げる術はない。このまま、この男に連れられていくのか。狂気と恐怖に支配された暗黒の世界へと運び去られてしまうのか。
　突然、鋭い破砕音とともに、ガラス片が降りかかってきた。
　杏奈はとっさに腕を上げて顔を庇い、振り返って頭上を見上げた。
　時計台のモザイクが割れている。その縁に、ほっそりしたシルエットが立っていた。
　逆光だが、杏奈には一目でわかった。思わず声を上げた。
「――達哉！」
　少年は身軽に飛び下りてきた。バランスも崩さず着地して、紙袋男に向き直る。
　赤いライダースーツを着た周防達哉だった。杏奈には目もくれず、紙袋男を睨みつけている。
　紙袋男は杏奈を突き放し、達哉に向き直った。彼が上げた声は、喜びとも憎しみともつかぬ興奮で上ずっていた。
「いよいよ現われやがったな、大凶星！　決着をつけようぜ……今度は邪魔させやしねぇ！」
　達哉の髪がなびいた。杏奈は一瞬、強い光に射られたような気がして目を細めた。実際には、光など放たれていなかったのだが。
　こんな達哉は初めて見る。確かに彼は、近寄りがたいピリピリした雰囲気を絶えず漂わせて

いたけれども、これほどまでに圧倒的な力を感じたことはなかった。達哉の目に、透き通った悲しみが見えたような気がした。

「てめぇ……！」

紙袋男の声が聞こえると同時に、杏奈の身体は弾き飛ばされた。まるで、見えない手につかまれたかのように。

背中から壁に叩きつけられた。それきり、杏奈は意識を失ってしまった。

2

目を開いたとき、最初に見えたのは白い天井だった。

杏奈は数度瞬いて、ぼんやりあたりを見回した。

生成りのカーテンと、窓の外に星空が見えた。そして、杏奈を見下ろして、手にしたファイルに何やら書き込んでいる見知らぬ女性。ナースキャップをかぶっている。看護婦だ。

部屋には、消毒薬くさい匂いが漂っている。少しずつ意識がはっきりしてきた。

「ああ、気が付きましたね」

看護婦は事務的な口調で言った。

「自分の名前、わかりますか?」

「……吉栄杏奈」

「よろしい。ここはどこでしょう」

「……病院……?」

「正解。意識ははっきりしてるようね」

看護婦はファイルを閉じた。
「ここは蓮華台南通りの珠間瑠中央病院。あなた、学校で倒れて運ばれたのよ。覚えているかしら」
杏奈は起き上がろうとしたが、看護婦に止められた。
「まだ無理をしないで。大きな怪我はないけど、頭を打ってるんですから、安静にね」
記憶がだんだんはっきりしてきた。杏奈は看護婦を見上げて尋ねた。
「達哉は……？」
「誰？」
「わたしが倒れたとき、あの時計台にいた人たちは……」
「ああ、刑事さんと雑誌社の人ね。三人とも無事よ。安心して」
三人ではない。紙袋男と達哉はどうなったのだろう。
看護婦の口ぶりからすると、人が駆けつけたときすでに二人は姿を消していたようだ。杏奈は目を閉じた。
せっかく会えたのに。また消えてしまった。達哉。
あのとき、達哉は杏奈に一言も声をかけてくれなかった。視線を向けすらしなかった。まるで、杏奈がそこにいたことに気付かなかったみたいに。
切羽詰まった状況で、余裕のなかったことはわかるが、やはり少し悲しい。達哉の関心は、

あの紙袋の男にしか向いていなかった。

あの男のほうも、達哉のことを知っているようだった。なぜだろう。あんな気の狂った殺人鬼が、なぜ達哉のことを……？

あいつが口にした言葉が引っかかる。レイディとか、向こう側とか。狂人の戯言と思えばそれまでだが、それではすまないような気がする。

あいつ、何者なのだろう。確か、レオとか言った。そんな名前に覚えはない。なぜ、杏奈や達哉のことを知っている……？

目を閉じたまま眉を寄せた杏奈の表情を見て、何か勘違いしたらしい。看護婦は親切に説明してくれた。

「記憶が混乱してるのも無理はないわ。校長室のショックが大きすぎたのね」

「……」

「あなたは校長先生の死体を目撃し、ショックを受けて逃げ出した。なんで時計台なんかに逃げこんだの？　とにかく、刑事さんと二人の女性が追いかけていって、倒れてるあなたを見つけたの。ショックのあまり貧血を起こして倒れて、その拍子に頭をぶつけたようね。それほどひどい怪我ではないから、心配はいらないわ。一応、あとで精密検査を受けてもらいますけど」

「……いつ退院できるの」

「検査の結果によってはすぐ出られるわ。おうちの方にも連絡してあるから、間もなく……」

「来ないよ」
杏奈は目を開き、天井を見上げた。
「家族は来ない。あの人たちは、わたしのことなんて別にどうでもいいんだから」
看護婦は黙ってしまった。言葉が見つからない様子だった。
気まずさを隠すようにファイルをぱたぱたやりながら、彼女は話題を変えた。
「そうそう、お友達がお見舞いに来てるわよ。あなたの意識がなかなか戻らないから、帰ったほうがいいって言ったんだけど、待ってるって。下のロビーにいるわ」
達哉だろうか。杏奈の心ははずんだが、看護婦はにこにこしながら言葉を継いだ。
「学校の後輩だそうよ。なんて言ったかしら。確か……片山さん」
ノリコだ。杏奈は激しく失望した。看護婦は「呼んでくるわね」と言い置いて出ていった。
しばらくして、ドアがノックされた。ぶっきらぼうに返事をすると、静かにドアが開いてノリコが顔をのぞかせた。
「あの……お邪魔します」
おどおどした声で言って、入ってきた。杏奈は顔も向けずに、天井を見ていた。
「お姉さま……お加減は……」
「大したことない」
「頭を打ったって聞いて……あの……心配で……」

「大したことないって言ってるでしょ」
「……ごめんなさい」
ノリコはベッドの脇に立った。杏奈はちらっと目を向けて、驚いた。ノリコは泣いていた。
泣くほどのことだろうか。杏奈が無愛想で冷たいのはいつものことだ。いつものノリコなら、杏奈にどれほど邪険にされてもめげず、退かず、しつこく纏わりついてきて、杏奈を辟易させるのだが。
「何……」
面食らって尋ねようとした杏奈に、ノリコはぽろぽろ涙を流しながら繰り返した。
「ごめんなさい……ごめんなさい……わたし……もう……」
しゃくり上げると、ノリコはくるっと背を向け、足早に病室を出ていってしまった。
残された杏奈はあっけにとられた。これではまるで、杏奈がいじめて追い返したみたいではないか。確かに冷たい言い方はしたが。
様子が変だった。わざわざ杏奈が目覚めるのを待っていたくせに、見舞いらしいことも言わずにすぐ帰ってしまうなんて。何かあったのだろうか。
気にかかったが、安静を命じられている身では追いかけるわけにもいかなかった。
ノリコのことだ、きっとまたくだらないことでウジウジ悩んでいるのだろう。そう考えて杏奈は自分を納得させた。

一晩を病院で過ごし、翌日、検査を受けることになった。
待合室で検査の順番を待つ間、ぼんやりテレビを見て過ごした。暇つぶしに目をやっていただけだが、画面に映った顔に、ふと興味を引かれた。
ハイビジョンの画面に、若い女が映っている。最近、よくテレビで見る顔だ。ブームになっている「ワンロン占い」の占い師だった。神秘的な美貌で、人気を博している。
「あ、ワンロン千鶴」
杏奈の隣に座っていた女性が声を上げた。連れの男性に話しかけている。
「あたしファンなの。かっこいいよね」
「占い師だろ。最近やたらに騒がれてるけど、なんかインチキくさいな」
「何言ってるのよ、ワンロン占いは当たるのよ。あたし毎朝テレビでチェックしてるわ」
ワンロン占いには、杏奈はあまりいい感情をもっていない。杏奈が金田の車にはねられた日、テレビのワンロン占いで「十一月生まれは大凶」と出ていたらしい。杏奈はあとからそれを知り、嫌な気分になった。ただの偶然とは思うものの、占いに自分の不運を予言されていたと思うと、いい気はしない。
テレビ画面の右端に表示されている文字に目がいった。この番組の特集タイトルらしい。「ワンロン千鶴、ジョーカーブームに警鐘」とあった。

「……特に中高生を中心に、ジョーカー呪いというものが流行っているそうですが……」
占い師が喋っている。顔立ちから想像される通りの落ち着いた声だ。年齢はまだ二十代半ばぐらいだろうが、すでに大物の風格を身につけている。ファッションも現代風で洗練されており、従来の占い師のイメージとはかけ離れていた。OLの間でカリスマ的人気があるというのもうなずける。
「非常に危険なことです。軽い気持ちでそういった呪術に手を出すのは、絶対にやめていただきたいと思います」
「どういう危険があるんでしょう」
司会者が尋ねている。千鶴は薄い微笑を崩さずに答えた。
「ジョーカーとは、望龍術でいうところの『女媧』に当たります」
「それは……」
「望龍術の基本的な考え方は、ワンロン占いを通じてたびたび申し上げておりますので、ご存じの方が多いと思います。簡単に申しますと、天地のことわりを司る十二匹の龍の動きを読み、未来予測に役立てる。これが望龍術です。この十二匹の龍の他に、陰陽を司る特別な龍が二匹おります。それが伏義と女媧。伏義は活龍とも呼ばれ、すがすがしい生気に満ちた力です。女媧はその反対で、別名を死龍。邪気に満ちた力です」
「すると、ジョーカーというのは……」

「邪気が凝り固まったものと考えてよろしいでしょう。ジョーカー呪いは、自分の憎んでいる相手を死に至らしめる術です。憎しみ、妬み、そういったマイナスの感情をためこみ、悪しき術を試す者は、死龍に取り憑かれてしまうのです。穢れは穢れを呼び、その作用はあっという間に膨れ上がります」

「どういう結果になるのですか」

「昔から、因果応報と申します。ジョーカー呪いを試みた者は、自らがジョーカーに変じる危険があると心に留めるべきです」

千鶴の言葉に、隣に座っていたゲストのコメンテーターが大げさな声を上げた。

「うわあ、こわーい」

「どんな優れた術も、使い方を誤れば恐ろしい結果を招くのですよ」

「でも、それじゃ、千鶴先生」

「ジョーカー呪いが流行ると、どんどんジョーカーが増えていくことになりません？」

ゲストの女性タレントは、不安そうな表情で身を乗り出した。

「その通りです」

「街中、ジョーカーだらけになってしまうってことですか？　大変……」

女性タレントの大げさに怖がった表情がアップになり、コマーシャルに切り替わった。

「ジョーカー呪いってなんだ？」

テレビを見ていた男性が言い、連れの女性は口ごもりながら答えた。

「最近、猟奇殺人が続いてるじゃない……あれよ」

「え？　どういうこと？」

「ジョーカー呪いっていうのは、ジョーカー様にお願いして憎い相手を殺してもらうの。殺人事件の真相は、それだって言われてる……」

「なるほど、うまくできてるな。殺人の依頼なんかするやつは性根が腐ってるから、自分も化け物になっちまう……か。バチが当たって当然ってことだ」

男性は本気にしていないらしく、笑い飛ばした。女性のほうは青ざめ、震えている。

——やったんだな。

杏奈はそう思った。

あの女性、ジョーカー呪いをやってしまって、それで怯えているんだな。

高校生の噂から始まったジョーカー呪いだが、今や広い層に浸透している。憎い相手を手軽に殺せるとなれば、ちょっと試してみたいと思う人間は多いだろう。

気に入らない上司。口うるさい近所。自分を振った相手。それどころか、ちょっと肩がぶつかったというだけで逆上する人間もいる。人が人を憎むきっかけなんて、そこらじゅうに転がっているのだ。自分の手はまったく汚さずに、ただ電話をかけるだけで邪魔な相手を消せるとしたら——これほど魅力的で、これほど恐ろしい呪術はない。

ワンロン千鶴の言ったことは本当だろうか。ジョーカー呪いを実行した者が次々にジョーカーになる……。

千鶴の表情を思い返すと、胡散臭さを感じずにはいられなかった。確かに美人だが、どこか邪悪な気配が漂っていた。邪術の流行をたしなめるような、良識的なことを口にしていたが、その目は陰惨な喜びに輝いていたように思える。似た瞳を杏奈は知っていた。紙袋の奥で光っていた、あの目に似ている。

関連があるのだろうか。流行のワンロン占いとジョーカー呪い。ジョーカーに殺人を依頼した者は、自分がジョーカーになる……。

精密検査の結果は、異常なしだった。杏奈はすぐに退院を許可され、病院を後にした。

駅に向かう途中で、ふいにケータイの着メロが鳴り出した。

杏奈の着メロは、ドラッグストア「サトミタダシ」のテーマ曲である。能天気なメロディなので、人前で鳴り出すとかなり恥ずかしい。むっとしながらバッグの中のケータイを取った。

杏奈の電話は滅多に鳴らない。友人がほとんどいないからだ。以前なら、一番よくかけてくるのは達哉だった。もしや……と思ったが、聞こえてきた声は女性のものだった。

「吉栄さん？」

「……誰？」

「A組の山尾です」
山尾慶子だ。彼女が杏奈のケータイの番号を知っていたことに少し驚いた。教えた覚えはない。
　慶子の声は真剣だった。焦っているようだ。
「大変なことが起きたの。あなたに相談したくて」
「何」
「電話じゃうまく話せないんだけど……片山さんのことなの」
「ノリコ？」
「片山さんが何者かにさらわれてしまったの」
「……何？　誘拐？」
「ただの誘拐じゃないと思うの。いろいろ込み入ってて……とにかく、会って話すわ」
　慶子は、学校の近くのコーヒーショップを待ち合わせ場所に決めた。
　電話を切って、杏奈は考えこんだ。
　ノリコがさらわれた……いったい、誰が、なんの目的で？　ノリコの様子がおかしかったことと、何か関係があるのだろうか？
　待ち合わせ場所に急いだ。店に着くと、慶子はもう席について待っていた。
「どういうこと？　ノリコは誰に……？」

言いかけた杏奈を遮って、慶子はテーブルの上に手を伸ばした。
カタン、と音がした。慶子が携帯電話を置いたのだ。
「これは？」
「片山さんのよ」
慶子の声は緊張していた。わけがわからず、杏奈は慶子の顔を凝視した。
「最初から話すわね。今日、学校で大変なことが起きたの」
「大変なこと？」
「片山さんが急に暴れ出したの」
杏奈は目を見開いた。
「授業中に突然立ち上がって、何かぶつぶつ言い始めたんですって。先生が注意しようとしたら、いきなり襲いかかったらしいの。先生は大怪我を負ったわ」
「ノリコが……まさか……」
「あわてた生徒たちが止めようとしたけど、駄目だった。男子生徒が数人で取り押さえようとしても、かなわなかったんですって。重軽傷者、合わせて二十二人。うち八人は入院が必要なほどの大怪我よ」
「……どういうこと。ノリコにそんな力があるはずは……」
「人間の力じゃない。怪我をした生徒はみんなそう証言しているの。昔で言えば、狐憑きと

か、そんな感じだったみたい。狐よりももっとすごいモノ……化け物が取り憑いてしまったようだったって」
杏奈は、昨日病室を訪れたときのノリコを思い出した。
震えて泣いていた。ひどく弱々しく、頼りなげだった。
あのノリコが、いったいなぜ。
「それで……ノリコは……」
「他のクラスの生徒や先生たちが駆けつけたけど、それでも取り押さえられなかった。学校中がパニックになったとき、突然おかしな連中が現われたの」
「それは？」
「わたしもちらっと見かけただけだから、詳しくはわからないんだけど。三人の男だったわ。みんな黒い服を着て、サングラスをかけていた。喋ってる言葉が一瞬だけ聞こえたけど、日本語じゃなかったわ。たぶん、中国語だと思う。彼らは片山さんを銃で撃った」
杏奈はあやうく叫び声を上げそうになった。血の気が引く。
「麻酔銃だったと思う。片山さんは昏倒したけど、命に別状はないみたい。とにかく、彼らは気を失った片山さんを連れていってしまったの」
「連れていったって……」
「わけがわからないのよ。みんなが騒いでいるうちに、車に押しこめられちゃったの。学校側

は黙認したようよ。いいえ、黙認どころか、教頭先生自らがあの連中に連絡を取った可能性が高いわ。校長先生が亡くなっているから、今学校全体の指揮を執ってるのは教頭先生なの」

教頭は反谷の陰に隠れて存在感が薄かったが、タイプは反谷と同じだ。権力志向で自己保身ばかり考えている、日和見主義者。

「冴子先生は必死に止めようとなさったのよ。でも、かなう相手じゃなかった。混乱のうちに、片山さんは連れていかれてしまったの」

杏奈は椅子の背にもたれかかった。そのまま、ずるずると滑り落ちてしまいそうになった。信じ難い話だ。いったい、何が起きているのだ。

「警察には？」

「もちろん届けたわ。電話じゃ埒が明かないからって、冴子先生がわざわざ署に出向いてね。わたしも気になったからついていったの。だけど、対応がすごくいい加減なのよ。成果は期待できないかもしれない。警察も手一杯なのよ。あちこちで、似たような事件が起きてるらしいから」

「あちこちで……？」

「ええ。片山さんだけじゃないの。人が突然狂暴化し、周囲を傷つけ、黒い車に連れていかれる。そんな事件が頻発してるっていう噂なの」

慶子はグラスを取って喉を潤し、続けた。

「学校はもうめちゃくちゃ。昨日の殺人事件に続いて、今日のこれですもの。みんな、怯えきってるわ」

慶子は、テーブルの上に置いた携帯電話を示した。

「片山さんの鞄は学校に残ったままだった。悪いとは思ったけど、中を調べさせてもらったの。何か手がかりがつかめるんじゃないかと思って。特に変わったものは見つからなかったけど、この携帯電話」

「これが何か？」

「発信履歴が残ってるわ」

杏奈は携帯電話を見つめた。メタリック・ピンクの可愛らしい機種で、いかにもノリコの趣味っぽいクマのストラップが付いている。

なんの変哲もない、ただのケータイ。だが——。

慶子が口にするより先に、杏奈は真相を知った。

ノリコがあんなにも怯え、泣きじゃくっていた理由。おとなしい性格のノリコが突然変貌し、人を傷つけ、どこかへ連れ去られてしまった理由。

なんの変哲もない携帯電話は、今や、人を呪殺する道具になりうるのだ。

「自分自身の番号にかけた記録があるの」

慶子は眼鏡の奥の目を瞬き、低い声で囁いた。

「片山さんは、ジョーカー呪いをしていたのよ」

杏奈は額に手を当てた。頭を抱えこんでしまいたかった。

バカなノリコ……いや、もっとバカなのは杏奈自身だ。なぜ気がつかなかったのだろう。サインはたくさんあったのに。

「金田、か……」

彼の殺害のニュースが伝えられたとき、ノリコは混乱しきっていた。いい気味だと言ってみたり、急に自分を責めてみたり。

いつになく暗い目をしていると思った。ノリコは、半信半疑でやってみた呪いが実現したので、パニックに陥っていたのだ。

ノリコは杏奈に憧れて陸上部に入部してきた。中学生のとき、七姉妹学園の体育祭を見学に来て、走っている杏奈に魅せられたのだという。

——わたしの成績じゃ、七姉妹なんてとても無理だって言われてたんです。でも、がんばって勉強しました。どうしても、お姉さまの後輩になりたかったから。

はにかみながらそう打ち明けたノリコに、杏奈は一言「ばかばかしい」と言い捨てた。それでもノリコは嬉しそうに、杏奈に纏わりついてばかりいた。突き放しても突き放しても、めげずに付き纏うので、しまいに杏奈のほうが折れて、好きにさせておいた。

——お姉さまには遠く及びませんけど、でもわたしも走りたかったんです。お姉さまに少し

でも近づけるように……。
杏奈が事故に遭い、走れなくなったとき、一番泣いたのはノリコだった。悔しい……ひどい……大きな目から涙をぼろぼろ流しながら、何度もそう繰り返していた。
杏奈のかたきを討つつもりで、金田の殺害をジョーカーに依頼してしまったのだろう。子供っぽい復讐心で。だが、実際に金田の死が伝えられると、罪悪感にかられて取り乱した。
「金田だけではないわ」
慶子は沈んだ声で言った。
「自分への発信記録は二回残ってる」
「……」
「吉栄さん、あなた、反谷先生にひどいことを言われたんですってね。片山さんがとても憤慨していたって聞いたわ」
「――まさか」
杏奈は携帯電話に視線を落としてつぶやいた。
「ハンニャ殺しも？　あれも、ノリコが依頼したものだっていうの？」
「おそらく」
杏奈は今度こそ頭を抱えてしまった。人目がなければ、泣きたかった。
なんてことをしたのだ。ノリコは。

どうして気づかなかったのだ。自分は。

金田はともかく、反谷のほうは防げたはずだ。中庭でのノリコの様子がおかしかったことに、杏奈が気づいてさえいれば。

杏奈はしばらくうなだれて、両手で頭を押さえていた。その間、慶子は何も言わなかった。

ようやく杏奈が顔を上げると、慶子は奇妙な目で杏奈を見ていた。

刺すような目だ。温和で優しく、男子生徒からちやほやされている優等生の慶子とは別人のようだった。

だが、杏奈と目を合わせると、慶子は表情をやわらげた。いつものおっとりした眼鏡美少女の顔で言った。

「ワンロン千鶴っていう占い師が、最近よくテレビに出てるわ」

「うん……ワイドショーで見たけど」

杏奈は慶子の一瞬の視線を不思議に思いながら相槌を打った。

今の表情は何。なぜ、あんな怖い顔をして杏奈を見ていたのだろう。

ノリコを追い詰めたのが杏奈だから？　それとも、杏奈がノリコをけしかけてやらせたと思っている……？

しかし、慶子の声はおだやかだった。

「ジョーカー呪いをした者はジョーカーになる。これまで、ジョーカーっていうのは特定の個

人のことだと思われていたけど、そうじゃないのよ。ジョーカーという存在は普遍的なの。きっと、片山さんもジョーカーになってしまったのだと思う。だから彼女は豹変し、すさまじい力を発揮したのよ」

「じゃ、ノリコを連れ去った連中っていうのは……？」

「詳しいことはわからないけれど……新聞部の人たちが必死に調べて、突き止めたことがあるの。黒服の連中の車が、夢崎区に向かったっていう目撃情報があるそうよ」

「夢崎？」

「ゾディアックっていうクラブがあるでしょう。わたしは行ったことないんだけど……」

思いがけない店の名が出たので、杏奈は驚いた。

「彼らはゾディアックに入っていったらしいの。拉致した人をそこに集めてるんじゃないかしら」

「まさか。ゾディアックはただのクラブよ。わたしもよく出入りしてるし……高校生が集まってる……」

「建物の入り口は一つじゃないでしょう。裏があるのよ」

杏奈には信じられなかった。杏奈や達哉がたまり場にしていた店が、まさか、ジョーカー狩りのアジトとして使われているなんて。

だが、手がかりは他にない。ゾディアックを調べてみるしかない。

杏奈はノリコのケータイをつかんで立ち上がった。慶子も席を立ち、言った。
「わたしも手伝うわ」
「いらない」
「一人じゃ危険よ」
「平気」
慶子を巻き込む気はしなかった。もともと、それほど親しい相手ではない。他人と行動を共にするのは好きではない。
「吉栄さん……」
「ノリコを救出したら連絡する。教えてくれてありがと」
杏奈は慶子に背を向け、店を出た。
ノリコのことで頭が一杯だった。慶子が一瞬見せたひややかな表情のことは、もう忘れていた。

*

慶子にはああ言ったものの、やはり一人ではどうしようもない。
達哉がいれば……。もう何十度目になるかわからない思いを抱いて、胸を痛めた。達哉がいれば、きっと力になってくれたはずなのに。

とにした。紙袋をかぶったジョーカーを目撃しているのは、彼らだけだ。きっと力を貸してくれるに違いない。
達哉の兄は、確か港南署の刑事だった。しかし、警察署に行くのは気が引けた。そこで、まず出版社のほうを訪ねることにした。
彼女が口にしていた雑誌の名前は「クーレスト」。その雑誌を本屋で立ち読みし、編集部の住所を調べた。キスメット出版は、青葉区にあった。
バスで青葉区に向かい、住所を頼りに出版社を探した。すぐに見つかった。想像していたよりも大きな、新しいビルだった。
受付で名前を告げ、天野という記者を呼び出してもらうことにした。しばらく待たされた後、エレベーターが開いて、若い女性が出てきた。
天野ではない。近づいてくる彼女を見たとき、杏奈は不思議な感覚にとらわれた。
グレーのジャケットに黄色いパンツの、背の高い女性だった。ウェーブのかかった髪を帽子できっちり押さえた、活動的なスタイルだ。顔つきは少々きつめで、化粧っ気もほとんどないが、美人だった。
初対面のはずだ。以前に会ったことなどあるわけがない。
なのに、なぜか胸が騒いだ。

杏奈は女を凝視し、記憶をフル回転させた。初めて会う人なのに――名前も知らない相手なのに、懐かしい。この気持ちはなんだろう。

女は杏奈の前で立ち止まったが、何も言わずに杏奈の顔を見下ろした。

彼女も、杏奈と同じような既視感を感じているのがわかった。遠い記憶を掘り起こそうとするような、もどかしげな表情を浮かべている。

先に我に返ったのは、相手の女性のほうだった。

「あ……えーと、吉栄さんだったね。舞耶さんに会いに来たって？」

杏奈はうなずいた。

歯切れの良い喋り方と、女性にしては低い落ち着いた声。聞き覚えがある気がする。だが、どこで会ったのかどうしても思い出せない。

「舞耶さんは出かけてるよ。取材だと思うけど」

ともかく、頭を切り替えなければ。この女性は事件には関係がない。デジャ・ヴュなんて、ただの記憶の混乱。錯覚にすぎない。気にしないに限る。

「どこに行ったかわかりますか」

「さあ。あちこち飛び回ってるからね」

「戻ってくる時間は」

「それもわからない。なんの用？　急ぎ？」

ただならぬ雰囲気に気づいたのだろう。女はちょっと考えてから言った。
「なら、舞耶さんのケータイの番号を教えようか」
「お願いします」
女はポケットからアドレス帳を取り出し、番号を告げた。杏奈は自分の携帯電話にその番号を入力した。
「ありがとうございました」
礼を言ったが、なんとなく立ち去り難かった。
女のほうもやはり気にかかっているらしい。エレベーターに戻ろうとせず、杏奈を見ている。
「……あの」
曖昧なままでいるのは気分が悪かった。杏奈は思いきって尋ねた。
「どこかで会ったことありませんか」
「……うん」
女は難しい顔をして、うなずいた。
「実はあたしもさっきから、そんな気がしてるんだよね。吉栄……杏奈さん、だっけ？　以前にこの出版社に来たことない？」
「ありません」
「うーん……」

女は考えこんだが、すぐ諦めたように首を振った。

「おかしなもんだね。そういえば舞耶さんも、デジャ・ヴュがどうこうって言ってたっけ」

「……デジャ・ヴュ……」

「ま、いいや。考えてもわかるわけない。きっとあたしたち、前世で知り合いだったんだ」

冗談めかして言って、女は笑った。

前世。そんなもの、杏奈は信じていない。オカルトなんて興味がない。だが、今は信じたい気分だった。そうとでも考えなければ、説明がつかない。

——向こう側を思い出せ。

紙袋男の言葉が脳裏によみがえった。

向こう側。それがつまり、前世ってこと？　前世のわたしは「レイディ」と呼ばれていて、この女の人と知り合いだった？

浮かんだ考えを、あわてて打ち消す。狂人の戯言にあまり毒されてはいけない。

女はエレベーターに引き返そうとしていた。杏奈は呼び止めた。

「待って」

振り返る。不思議そうに眉を上げた顔に、やっぱり見覚えがある。

「名前、教えてもらえませんか」

「——黛ゆきの」

女はそう名乗り、微笑した。再び背を向けて、エレベーターに乗り込む。杏奈はエレベーターの扉が閉まるまで見守った。

黛ゆきの。

その名が、とても大切なもののように思えるのはなぜだろう？

教えてもらった番号に電話をかけ、天野舞耶に事情を伝えた。

ノリコがジョーカー化し、拉致されたことを告げる。あまりに荒唐無稽な話なので、笑い飛ばされるのではないかと不安だったが、舞耶は余計な質問をせずに杏奈の言葉を信じてくれた。手がかりはクラブ・ゾディアック。そこで待っていると伝えて電話を切り、店に向かった。

ゾディアックは、いつものように若者たちでにぎわっていた。音楽に合わせて踊っている客がいる。テーブル席やカウンターで、グラスを片手に話している客もいる。

杏奈は目立たないように隅の席に腰かけた。店内をうかがったが、厄介なことになりそうな連中――杉本たちは見当たらなかった。

刑事が来ることを考えて、酒ではなくジュースを注文した。運んできた店員に、さりげなくかまをかけてみる。

「入り口のところに、中国人らしい人がいたけど。新しく雇った人？」

「え？　ああ」

若い男性店員は、特に隠す様子もなくうなずいた。
「従業員ってわけじゃないです。最近、この店の経営者が代わったんですよ。新しいオーナーは台湾人だそうです。それで、関係者が出入りしてるんですよ」
「……そう」
「ま、店の営業はこれまでと変わりませんけど」
店員は笑ってカウンターの奥に引っ込んだ。
台湾の組織がゾディアックを買収し、アジトに仕立てたということか。だが、彼らの目的はなんだろう。なぜジョーカー化した人間をさらう？
やり方が強引すぎる。正気を失っているとはいえ、人を車に無理やり押しこめて拉致し、その上、こんな人目につく店に運び込むなんて。
小さな組織にできることじゃない。背後に巨大な黒幕の存在がうかがえる。拉致の事実そのものをもみ消すことすら可能な、腐った権力が蠢く気配がする。
慶子は言っていた。警察に届けたが、対応はいい加減だった、と。大がかりな陰謀が、警察をも巻き込んで進行しているのかもしれない。
間もなく、天野たちが到着した。達哉の兄と、蜘蛛の巣スーツも一緒だ。さらに、もう一人増えている。髪が背に届くほど長く、サングラスで顔を隠した、見るからにあやしい雰囲気の男性である。

四人は杏奈と同じテーブルについた。天野が片手を上げて「チャ～オ」と能天気な挨拶をした。

「身体の具合はどう？」

「病院で検査してもらった。何もないって」

「そう。良かった」

にっこり笑う。天野には、なんとなく場を和ませる雰囲気がある。杏奈の緊張が少しほぐれた。

「あのときはバタバタしちゃったから、あらためて自己紹介するわね。わたしは天野舞耶。『クーレスト』の記者。こちらはわたしの親友の芹沢うらら。某下着メーカーに勤めてるの」

「……よろしく」

蜘蛛の巣スーツの女性が頭を下げた。学校で会ったときに比べて、ずいぶん元気がない。何か気にかかることがあるような表情をしている。

「こちらは周防克哉さん。港南署の刑事さん。あなたの友達の達哉くんのお兄さん……って、知ってるわよね」

「……ええ」

「そのお隣は、パオフゥさん。インターネットを通じてジョーカーの噂を集めてる人なの。お互い、目標が一致したので、協力してるわけ」

男は杏奈にまったく関心がなさそうだった。挙動は静かだが、眼鏡の奥から鋭く店内を観察していることがわかる。ヤバそうな男だと杏奈は思った。

「時計台では、どうも」

一応、礼を言っておく。舞耶は首を振った。

「助けたのはわたしたちじゃないわ。達哉くんが現われて、わたしたちみんなを救ってくれたの」

「達哉はどうなったの？　わたし、気を失ってしまったからあの後どうなったかわからない。達哉は紙袋男と戦ったの？」

「紙袋の男は死んだわ」

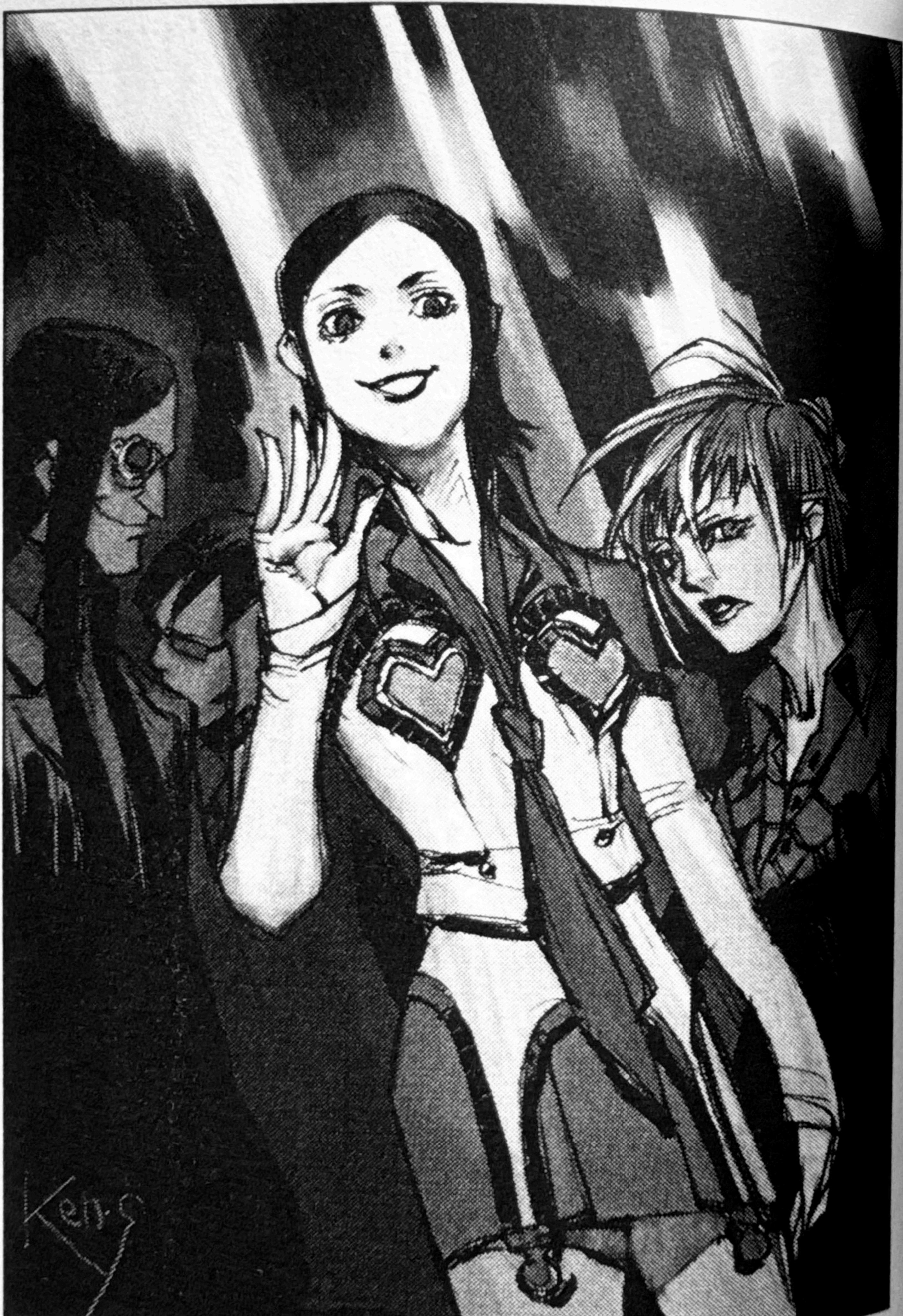
「え……？」

「死んだの」

舞耶は繰り返した。杏奈は信じられない気持ちで舞耶の顔を見つめた。

「時計台で……？　達哉が殺したの……？」

「いいえ。時計台では決着がつかなくて、紙袋の男は逃げたの。彼の正体は、ある精神病院に入院していた患者よ。名前は須藤竜也。依頼を受けるたびに病院を抜け出して、殺人を重ねていたらしいの。わたしたちが病院を突き止めたとき、彼は病院中の人間を殺害していたわ。そして、港南区にある『空の科学館』へ向かったの」


Ken.S

そこなら杏奈も知っている。小学生のころ、社会科見学で行ったことがある。航空機の模型(もけい)などを展示した、面白(おもしろ)い博物館だ。

「須藤は科学館に火をつけたの。そして、人質(ひとじち)を取って、わたしたちに襲いかかってきた。わたしたちだけでは、とてもあいつにかなわなかったと思うけど、そこへまた達哉くんが助けに来てくれたの。結局、紙袋男は戦いに敗れて死んだわ」

杏奈には信じられなかった。あの凶悪(きょうあく)な殺人犯が、こんなにあっけなく消えてしまうなんて。

結局、『向こう側』とはなんだったのだろう。なぜ彼は杏奈を「レイディ」などと呼んだのだろう。全部、精神病患者の妄想(もうそう)？　だったら何も考える必要はないが……。

しかし、引っかかる部分は残る。たとえば、杏奈が黛ゆきのに対して感じた鮮烈(せんれつ)なデジャ・ヴュ。あれはなんだったのだろう。紙袋男とは関係ない、ただの錯覚だったのだろうか？　そうとは思えない。

すべての謎(なぞ)が、未解決のまま宙に放り出されてしまった。大量殺人犯の死を悼(いた)むつもりなんて毛頭(もうとう)なかったが、手がかりが失われてしまったのは残念だった。釈然(しゃくぜん)としない気持ち悪さが付き纏う。

それに、達哉。また現われたなんて。

その事実は、杏奈を勇気づけるどころか、逆に落ち込ませた。

達哉は行方をくらましたわけではなく、どこかに隠れてこちらの動きを見守っているのだ。だが、彼が見ているのは杏奈ではなくこの人たちのほうだ。杏奈からの電話には出てくれないのに、この人たちのことは気にかけている……それが少し寂しかった。

「戦いの後、達哉くんはまたしても姿を消してしまったわ。もうかかわるな、忘れろって言い残してね」

「わたし……」

杏奈はテーブルの上に視線を落としてつぶやいた。

「達哉のことよく知ってると思ってた。一緒にいた時間も長かったし、よく話をしたし……でも、ただの独り善がりだったみたい。わたし、達哉のこと何もわからない」

少し間をおいて、克哉が尋ねた。

「君たちと一緒にいるとき、達哉はどんな風だった？」

「……みんなから怖がられてた。キレると何するかわからないからって。でも、みんな彼を信頼してたよ。達哉は絶対裏切らない。一度口にしたことは必ず守る。達哉が急にいなくなるなんて、よっぽどの事情があるに違いないってみんな言ってる。達哉、優しいから。ただの気まぐれで、みんなに心配かけるようなやつじゃないから」

克哉はちょっと嬉しそうな顔をした。

「達哉が消える前に、何か言ってなかったか。なんでもいい。つまらないと思うようなことで

も。思い出せることはないか」
「そういえば、変なこと言ってた。『罪を償う』だったかな、なんだかよく意味がわからなかったけど」
「罪？」
「うん。確かそう言ってた。どういう意味か聞いたけど、教えてくれなかった」
「罪……つまり、達哉は何か犯罪に手を染めてたということか……？」
克哉は大ショックを受けたらしかった。毅然とした態度が一転し、くるくると壊れたようにうろたえ始めた。
「ま、まさか喧嘩で誰かを傷つけて……その償いのために金策に奔走してるのか、それとも誰かに脅迫されてるのか……ああ達哉……なぜ僕に相談しないんだ……」
「ちょっと、しっかりしてよ。あんたがうろたえてどうすんのよ」
芹沢うららが克哉を叱り飛ばした。さっきよりも、幾分顔色が良くなっている。
うららは杏奈に向き直った。
「達哉くんのことはひとまずおいておこう」
「おくな……」
「黙っててよ、あんたは。それより吉栄さん、あなたの友達がジョーカーになっちゃったって話」

うららはテーブルの上に肘をついて、ずいっと身を乗り出した。

「詳しく聞かせて」

杏奈は、慶子から聞いた話を伝えた。うららは相槌も打たずに聞いていた。

ノリコがジョーカー呪いをしていたことを話すと、うららの瞳が翳った。

「……そう。あの子がね。おとなしそうに見えたけど……」

うららは困惑したような表情で首を振った。

「わかった。わたしたちが必ず助け出すよ」

「わたしも一緒に……」

「大丈夫。ここは任せて。かかわると危険だから」

「でも」

他人任せにするわけにはいかない。ノリコがジョーカー呪いをしたのは、杏奈のためなのだ。

しかし、うららはきっぱり首を振った。

「ジョーカーについては、あんたよりわたしらのほうが詳しい。普通の人間が手を出すと危険なんだ。だから、任せて」

まるで自分たちが普通の人間ではないような口ぶりだった。どういうことか尋ねようとしたが、杏奈の言葉をパオフゥが遮った。

「拉致された連中はどこにいる？」

杏奈はパオフゥの顔を見た。サングラスに隠れて表情はわからないが、口調には有無を言わせぬ力があった。
杏奈は、さっき店員から仕入れた情報を思い出した。
「この店、最近買収されたらしいの。新しいオーナーは台湾人だって。きっと、店の奥をアジトにしてるんだと思う。何を企んで、ジョーカーを集めてるのかはわからないけど」
「――なるほどな」
パオフゥは立ち上がった。店の隅に目立たぬ扉がある。彼はさっさとそちらへ向かった。
「待ちなさいよ、ちょっと……まったく。集団行動のできないヤツ」
うららは舌打ちまじりにパオフゥの後ろ姿を睨み、杏奈に素早く囁いた。
「心配しなくていいよ。ノリコちゃんはわたしが絶対に助けるからね」
杏奈は不思議に思った。この女性、知り合いでもないノリコのために、なぜこんなに親身になるのだろう。人がいいからとか、お節介だからとかいうだけの理由ではなさそうだ。うららの瞳には、固い決意が感じられた。
「杏奈さんは……そうね」
舞耶が立ち上がりながら言った。
「センター街に、ベルベット・ルームへの扉があるの。その中で待っててくれる?」
「ベルベット……? 喫茶店?」

「んーと……そういうわけじゃないんだけど……目立たない、青い扉だから、普通は見過ごしちゃうんだけどね。行けばわかるはず。ちょっとびっくりするかもしれないけど、別に怖い場所じゃないから。わたしたちも後から行くから、安心してね」

謎めいた言葉だった。

一行は咎められることもなく奥の扉の向こうへ消えた。杏奈は店を出て、センター街に向かうことにした。

センター街は不夜城だ。二十四時間営業の飲食店が軒を連ね、あやしげな呪いグッズを売る露店が並び、若者たちが騒ぎながら通りすぎる。

時刻は午後八時。長い夜が始まったばかりだった。杏奈は人ごみに辟易しながら、一軒一軒看板をのぞきこむようにして歩いた。

何度も前を通り過ぎた後で、ようやくベルベット・ルームを見つけた。センター街には何度も来ているが、これまでまったく気づかなかった。通りのはずれに、ひっそりと建っている。一見したところ、さびれたバーという雰囲気だ。

青一色で塗られた扉に、目立たぬ字で「Ｖｅｌｖｅｔ Ｒｏｏｍ」と刻まれている。舞耶が「怖い場所じゃない」と念を押していたが、あの言葉がかえって店のあやしさを強調していた。

杏奈はそっと扉を押し開けてみた。

店内は青い光に包まれていた。床も壁も天井も、微妙に濃淡のある青一色だ。そのせいか、実際以上に広く見えた。通りの奥行きを考えれば、こんなに広いスペースが取れるはずがないのだが。

ピアノのメロディと女性の歌が流れていた。杏奈は後ろ手に扉を閉めた。にぎやかなセンター街から遮断されて、異空間にまぎれこんでしまったような気分になる。

いったい、どんな店なんだろう。雰囲気からすると、酒を飲ませる店のようにも思えるが、刑事を含むあの大人たちが、高校生の杏奈をそんな店に誘うとは考えにくい。

入り口に近い場所に、一人の男がいた。従業員だろうか。しかし、杏奈が近づいていっても顔も向けない。彼が向き合っているのは、何も描いていないキャンバスだった。

手には絵筆を握っている。何か描き出すかと思って杏奈はしばらく背後で見ていたが、彼が動く気配はなかった。

「……あの」

杏奈はおそるおそる声をかけた。

「ここって、画廊か何か？」

男は振り返って杏奈を見た。

じろじろと、爪先から頭まで眺めている……らしい。男の目は色の濃いサングラスで隠されており、視線はわからなかった。

「君は？」

ぶっきらぼうに男は尋ねた。杏奈は少々むっとして答えた。

「客だけど」

「ここがどんな場所かも知らずに来たのか？」

来たくて来たわけじゃない。杏奈は、男にも劣らぬぶっきらぼうな声で言った。

「ここで待ってろって指定されたから。ちょっと待たせてもらう」

「ご勝手に」

男はまたキャンバスに向き直った。

変な店だ。いったい、どんな商売をしているのだろう。

杏奈は男から離れて奥へ進んだ。やはり、通りの奥行きに合わぬくらい広いように思えた。目の錯覚ではない。この店はどこかおかしい。まるで、あの扉を通り抜けた瞬間に、センター街ではない、どこか別の空間に飛ばされたみたいに……。

ぽつんと置かれたソファに、小さな人影が座っている。杏奈はその人物に声をかけようとして、思わず小さな悲鳴を上げて飛びのいた。

男は異形だった。鬢の白髪だけを残した禿頭に、大きく突き出した尖った耳。転がり落ちそうに大きな目玉。紙のように白い皮膚。

それだけでも十分異様だが、とりわけ杏奈を驚かせたのは、彼の鼻だった。天狗のように長

い鼻が、顔の中心に垂れ下がっている。

杏奈は声を上げてしまった自分を恥じ、まじまじとその異形の姿を観察した。

動かない。作り物だ。わざわざ目立つように気味の悪い人形を置いて、客を驚かせる趣向に違いない。

悪趣味だと思いながら、杏奈は胸を撫で下ろし——今度こそ、悲鳴を上げて飛び上がった。人形だとばかり思っていた異形が、じろっと目を動かして杏奈を見たのである。

「ようこそ、ベルベット・ルームへ」

奇怪な鼻をもつ怪人物は、杏奈の悲鳴を気にかけた様子もなく、落ち着いた声でそう言った。

杏奈は呆然とその顔を見つめた。鼻に隠れそうな口が、にまっと笑いを刻んだ。

胸に手を当てた。心臓がばくばくしている。しかし、自分の態度が非常に失礼だったことに気づいて、頭を下げた。

「……悪かったわ。ちょっと、びっくりして」

「よろしいのですよ。ここに初めていらっしゃった方は、皆様同じ反応をされます」

怪人はおだやかな声でそう言った。

見かけは怖いが、態度や口調は落ち着いており、紳士的ですらあった。杏奈が目を瞬いていると、男は続けた。

「わたしはイゴール。今日はどんなご用でいらっしゃったのでしょう」

「用……は、別にないけど」
「新しいペルソナがご入り用なのでは？」
「ペルソナ？」
耳慣れない言葉だった。杏奈は首をかしげた。
イゴールは驚いたような顔をし、顎を撫でた。
「なんと、あなた様はペルソナ使いではない……？　奇妙なことですな。『力』をもたぬ方がこの部屋を訪れるとは」
「ペルソナって何」
「ご存じないなら、ご存じないままのほうがよろしいでしょう。たまさか迷いこまれたのであれば、今すぐ出ていかれるがよろしい。そして、ここのことは忘れておしまいなさい」
「わたし、ここで待ってろって言われたんだけど」
「どなたから？」
「天野舞耶って人」
「おお。天野様のお知り合いでしたか。これは失礼を」
イゴールは丁寧に頭を下げた。
杏奈はあらためて店内を見回した。イゴールの背後にピアノが置いてあり、男性が弾いている。その横で女が歌っていた。曲名はわからなかったが、悲しげで美しい旋律だった。

杏奈の他に、客はいない。見れば見るほど、何をやっている店なのかわからなくなる。
「ここって……？」
尋ねかけた杏奈に、イゴールは椅子を勧めた。杏奈はイゴールと向き合って座った。
「何をしてる店なの？　バーやレストランじゃなさそうだけど」
「ここはベルベット・ルーム。無意識の海にたゆたう自我をすくい上げ、形を与える場所です」
説明を聞いても、さっぱりわからなかった。杏奈は理解を諦めた。
「天野様は、今どちらに？」
「ゾディアックってクラブにいる。わたしの知り合いが……ちょっとヤバいことに巻き込まれてて」
どこまで明かしていいのかわからなかったので、ぼかした言い方をした。だが、イゴールはすべて心得ているようだった。
「なるほど。またしても、ジョーカーに変じてしまった方がおられるのですね」
「またしてもって？　前にもジョーカーになった人がいたの？」
「ああ、口が滑りましたな。お忘れください」
イゴールははぐらかしたが、杏奈は気にかかった。
以前にもこの部屋に、ジョーカー化した人間が運び込まれたことがあったのだろうか。それは誰だろう。天野たちのグループの中の一人……？

思い浮かんだのは、芹沢うららの顔だった。学校で会ったときに比べて、ひどく暗い顔をしていた。杏奈が不思議に思うくらい、ノリコのことに熱心だった。まるで、他人事ではないとでも言いたげに。

彼女だろうか。あの女性が、ジョーカー化したのだろうか——誰かを殺そうと呪いに手を染めたことがあったのだろうか。

人の心はわからない。芹沢うららは、明るくて気の良さそうな女性に見えた。ノリコだって、普段は気が弱くておとなしい子なのだ。彼女たちの中に、恐ろしい殺意がひそんでいるなんて、傍目にはまったくわからなかった。

黙りこんだ杏奈に、イゴールは優しげな声で言った。

「ご心配には及びませんよ。天野様たちなら、きっとその方を無事に連れてきてくださることでしょう。そこから先はわたしの仕事。ジョーカーを抜き取って、虚無の海へ返します」

「抜き取る……って」

どうやらこの怪人は、杏奈の知らないことをいろいろ知っているらしい。

「ジョーカーってなんなの？　わたしは最初、紙袋をかぶった殺人鬼のことだと思ってた。でも、ジョーカーはどんどん増殖して、ゾディアックの奥へ連れ去られてる……どういうこと？」

「さて、なんとお答えすればよいのか」

イゴールはソファの背にもたれかかり、腹の上で手を組んだ。

「ジョーカーとは穢れが具現化したもの……人に作用して力を発揮します。発動の原理はペルソナと同様……ああ失礼、お客様はペルソナをご存じないのでした」
「ペルソナって何？」
「無意識の中に眠るもう一つの自我。人はさまざまな仮面を使い分けて生きております。普段おもてに見せている顔は、選択された仮面の一つにすぎない。いつもは隠されている、意識すらされていない眠れる仮面、それがペルソナ。どんな人の中にもペルソナは隠れておりますが、それを意識して操ることができるのは、ごく一部の方々です。天野様や芹沢様……それに周防様ご兄弟のような」
「……ちょっと待ってよ」
イゴールの説明は杏奈にはさっぱりわからなかったが、一つだけ引っかかった。
「周防兄弟って。お兄さんはともかく、達哉も……弟のほうも、そのペルソナとかいう力を使えるってこと？」
「その通り。お二人とも優れたペルソナ使いでいらっしゃる」
「わたし、そんなの知らない」
杏奈は首を振った。
「達哉がそんな力を使えるなんて、知らない。達哉はそんなこと言ってなかった」
「達哉様のペルソナは、発現しておりませんでした。ご本人も、自分のもつ能力に気づいてお

られなかった。しかし——今は違う。現在の達哉様は、あなたが知っている達哉様とは違います」
「達哉は達哉よ」
杏奈はむっとして言い返した。
「何が起きても、達哉は変わらないよ。変なことを言わないで」
「失礼いたしました」
イゴールはおとなしく引き下がったが、彼の言葉は杏奈を不安にした。
達哉は変わってしまった？　杏奈の知らない達哉に？　そんなこと、ありえない。そう思っても、不安は消えなかった。
失踪以来、達哉がどんどん遠くなってゆくような気がする。連絡もしてくれない。時計台で再会しても、声をかけるどころか、杏奈を見てもくれなかった。
本当に、達哉は変わってしまったんだろうか。彼は杏奈と似た心をもっている——そんな風に思っていたのは、ただの思いこみにすぎなかったのだろうか。
達哉。会いたい。
痛切に思った。冷たくされてもいい。無視されてもいい。一目でいいから会いたい。
「会えますよ」
イゴールは言った。心の中を見透かされたようで、杏奈はぎょっとした。

「ご心配にならなくとも、いずれ必ず会えます。達哉様が、あなたの知っている達哉様に戻られたときに」

「……戻るの？」

イゴールのペースに巻き込まれていることを腹立たしく思いながらも、尋ねずにはいられなかった。

「達哉、戻ってくるの？　また昔みたいにわたしと話してくれる？　何時間でも一緒にいてくれる？　本当に……戻ってくるの？」

「戻られます」

イゴールは断言した。大きな目を動かし、少し悲しげな表情になって。

「現在生じている不均衡は、必ず正されねばならない。世界の歪みが是正された瞬間、達哉様は元の達哉様に戻られます。残酷なことではありますが」

「何が残酷なのよ。達哉が戻ってくるなら、ハッピーエンドじゃない？」

イゴールはうなずいた。杏奈はソファに深く座り直した。

それきり、言葉をかわさなかった。店内には、ピアノと女性の歌だけが響いている。弾き手も歌い手も、客がろくにいないことを気に留めていない様子だった。杏奈に聞かせているというわけでもなく、ただ自分たちだけのために弾き、歌っているようだった。

どのくらいの時間待っただろう。この店では、広さの感覚が狂うのと同じく、時間の感覚ま

でおかしくなってしまう。店に入ってから、まだ数分しか経ってないような気もしたし、丸一日ぐらいの時間が過ぎたような気もした。

だんだん眠くなってきた。杏奈はうとうとして、何度かソファから滑り落ちそうになった。

イゴールはまったく動かず、また人形のような無表情になってソファに座っていた。

突然、店内に馬鹿明るい声が響いたのは、杏奈が「うとうと」から「ぐっすり」に移行しかけたその瞬間だった。

「チャ～オ！」

杏奈ははっとして目を覚ました。この声。天野舞耶だ。

ソファから身を起こし、見回すと、天野たち一行が近づいてくるところだった。

先頭に舞耶、その後ろに周防克哉とパオフゥ。一番後ろにいる二人を見たとき、杏奈は思わず腰を浮かせた。うららに付き添われて、ノリコが立っていた。

「ノリコ……」

つぶやくと、ノリコはびくっとして顔を上げた。

目を合わせて、杏奈ははっとした。突然狂暴化し、教師やクラスメートたちを傷つけたというノリコ。どれほど面変わりしているか、不安だったのだ。

ノリコは変わっていなかった。杏奈が知っている通り、気弱そうでおどおどしていて、上目遣いに人を見る癖のあるノリコだ。

「約束通り、連れてきたわよ」
舞耶が言った。店の異様な雰囲気にも、まったく戸惑う様子がない。慣れているらしい。
イゴールがのっそりと身体を起こした。
「お待ちしておりました、天野様」
「たびたび悪いわね、イゴール。この子をお願い」
舞耶はノリコの手を取って、前に押し出した。
ノリコはおどおどしながら、杏奈を見ている。その唇が小さく動きかけたが、イゴールが遮った。
「かしこまりました。手早くすませてしまいましょう。こちらへ」
ノリコを手招く。ノリコは怖がっている様子だったが、うららが「大丈夫だよ」と強引に背中を押した。
イゴールの手に、いつのまにかコードレス電話機が握られている。イゴールはその送話口に向けて、何か不思議な言葉を囁いた。日本語でも、英語でもない。杏奈には聞き取れない言語だった。
杏奈は目を細めた。ノリコの身体から、淡い光が放たれたように見えた。
似た光景を見たことがある。時計台で、紙袋男と達哉が対峙していたとき。二人の身体から、光が迸ったように見えた。通常の光とは違う——怒り、憎しみ、殺意、狂気、それらが白い気

となって身体から抜け出たようだった。
今、ノリコの身体にも同じことが起きている。杏奈には信じられなかった。おとなしいノリコの中に、これほどのエネルギーが貯えられていたとは。
これまで気づかなかった。どちらかというと弱々しい、生気に乏しい子だと思っていた。
杏奈は間違っていた。この子の中には、杏奈をたじろがせるほどの生々しい、強い力が隠れていたのだ。
光は一瞬、輝きを増し、徐々に薄れていった。その間、一分ほどだっただろうか。光が完全に消えたとき、ノリコはよろめいて床に膝をついた。
杏奈は進み出て手を貸そうとしたが、うららが片手で制した。うららの視線は、「手を出すな」と語っていた。これは、ノリコが自分で乗り切らなくてはならない儀式。終わるまで、誰も手を差し伸べることはできない。
「ジョーカーは祓われました」
イゴールが宣言した。
「しかし、完全に消え去ったわけではありません。ジョーカーは常に無意識の闇にひそみ、外に出る機会をうかがっているもの。あなた様が心を闇に染めれば、いつでも再びジョーカーが戻ってきます」
ノリコは身震いした。イゴールに「決してお忘れになりませんよう」と念を押されて、あわ

てうなずく。おどおどした、頼りないノリコの顔だった。
「ノリコ」
声をかけると、ノリコは振り返った。
怯えが伝わってきた。震えている。杏奈に軽蔑されること……嫌われること……この子は何よりもそれを怖がっている。
杏奈はぎこちなく言った。
「安心して。もう、あんたはジョーカーじゃないから。この人たちが助けてくれたから」
ノリコの大きな目に、涙があふれた。
「お姉さま……」
ノリコは杏奈に飛びついてきた。
人前で、恥ずかしい。以前だったらノリコを突き飛ばして怒ったことだろう。しかし、杏奈はノリコを受け止めてやった。
「ごめんなさい……わたし……ご、ごめんなさい……」
あとの言葉は嗚咽にまぎれた。ノリコはしゃくり上げながら、杏奈にしがみついた。
さすがに照れ臭くなってノリコの身体を突き放し、杏奈は克哉に向き直った。彼はしんみりした顔でノリコと杏奈を見守っていた。
「……ノリコは逮捕されるの？」

「どんな事情にしろ、罪は罪だ。償わなくてはならない」
克哉は真面目な口調でそう答えた。
罪は償わなければならない。達哉が残した台詞と同じだ。
この兄弟、正反対の性格のように見えて、肝心なところでよく似ている。達哉が兄に激しい反発を示していたのも、案外、兄の中に自分と同じ性格を見つけてうんざりしていたせいかもしれない。
「ちょっとぉ……そんな冷たいこと言わなくてもさぁ……」
うららが不服そうに文句を言いかけたが、刑事は素早く言葉を継いだ。
「だが、下手人が死亡している現在、彼女が関与したという証拠はない。立証されない以上、罪に問うことはできない。吉栄くん、当分、君に片山くんの保護観察をお願いしたいのだが」
「保護観察……？」
「まあ、面倒みてやってくれということだ」
「ナ～イス。名裁きね」
舞耶がくすっと笑った。
「別に僕は情に流されて法を枉げているわけではないぞ。これが一番適切な処分だと信じているだけだ。片山くんより先に裁かれるべき人間がいるからな」
「……そうね」

舞耶は表情を引き締めた。
どういうことか杏奈が問おうとしたとき、電子音が鳴り出した。携帯電話だ。克哉が上着の内ポケットから携帯を取り出した。
短いやり取りの後、電話を切って克哉は言った。
「青葉公園だ。密告者がそこに来るらしい」
「密告者って？」
「わからない。情報を提供したいというんだ。スニークと名乗った」
「スニーク……『卑怯者』か。露骨に胡散くせえな」
パオフゥが顔をしかめた。
「罠じゃないの？」
うららの言葉に、克哉は首を振る。
「その可能性もあるが、放置するわけにはいかない。重要な手がかりだ。ジョーカー狩りを行なっている連中からの、内部告発かもしれない」
「行ってみましょうか。青葉公園へ」
「忙しいなあ、もう。あっち行ったりこっち行ったり」
うららが文句をつけたが、克哉はもう出口に向かっている。パオフゥもすぐ後に続き、舞耶はイゴールに「じゃ～ね」と手を振った。

「あの……」
ノリコが声をかける。足を止めて振り返ったのはうららだけだった。
「ありがとうございました。あの……助けていただいて」
頭を下げると、うららは微笑んだ。
「別に、礼を言われる筋合いじゃないわよ。かかわった以上、放っておくわけにもいかなかっただけ」
「でも……みなさんに助けていただかなければ、わたし、どうなっていたか……」
「もう二度と、ジョーカー呪いなんてやめようね」
うららは囁くように言って、素早く踵を返し、仲間たちの後を追っていった。
やめようね――まるで、自分に言い聞かせるかのような言葉だった。杏奈は、自分の勘がはずれていなかったことを悟った。やはり、うららはノリコより前にジョーカー化していたのだ。
だが、それはうららに対する嫌悪感には繋がらなかった。むしろ、そんな出来事を乗り越えてノリコのために親身になってくれたうららに、軽い驚きを覚えた。
杏奈ならば、絶対にしない。そもそもジョーカー呪い自体をやらないだろう。そこまで強く他人を憎む気力がない。
他人にかかわることをずっと避けて生きてきた。例外は達哉だけだった。
杏奈はイゴールに「世話になったわね」と告げて、出口に向かった。ノリコが不安そうに追

に夜も深い。

「帰るのよ」

杏奈は腕時計を見た。ベルベット・ルームにいる間に、時間の感覚がなくなっていた。すでに夜も深い。

「お姉さま、どちらへ」

いすがってきた。

センター街にはまだ若者たちがあふれていた。さすがにみな酔っぱらい、疲労した顔をしている。路上で寝ている者もいる。杏奈とノリコは酔っぱらい数人から声をかけられたが、杏奈がじろっと睨むと、みな退散した。

大通りに出てタクシーを拾うつもりだった。ノリコはもじもじしながらついてくる。

「何してんの。あんたも帰れば」

「……はい。いいえ。あの……でも、もう電車がなくて……」

「始発待つ？　タクシー代貸してあげてもいいけど」

「あの……」

ノリコは上目遣いに杏奈を見て、言った。

「ご一緒してはいけませんか？」

「何？」

「わたし……あの……怖くて。一人で帰るの怖くて……」

「何が怖いの。もうジョーカーは消えたし、黒い車も追ってこないでしょ」
「はい。でも……」
ノリコは泣きそうな顔になった。
杏奈はため息をついた。忘れていた。ノリコは異常に想像力が発達しているのである。陸上部の合宿で、誰かが面白がって怪談を始めたりすると、もう駄目だった。失神しそうなほど怖がるので、ノリコの前では怪談禁止令が出されたほどである。
たとえジョーカーが祓われても、暴走する想像力を止めることはできない。ノリコはきっと、怯えきって眠れぬ夜を過ごすことだろう。
「……うち来る？」
「いいんですか!?」
ノリコの声がはね上がった。
「駄目と言っても来るんでしょう」
「そんなことは、いえ、そんな図々しいことは！　でも、ありがとうございます。ああ、どうしよう、感激です、お姉さま……」
「お姉さまって言うのだけはやめて。家族に聞かれて誤解されるのイヤだから」
「はい、お姉さま」
ノリコはまったく反省の色がなく、浮かれている。タクシーを拾って、二人で乗り込んだ。

家に着いて、バッグから鍵を取り出すと、ノリコは不審そうな顔で尋ねた。
「ご家族は?」
「いるわよ」
「……だったら、なぜ鍵を?」
「使わなきゃドア開かないでしょう。壊せっていうの?」
「……いえ。ごめんなさい」
ノリコは言葉を失った様子で、すごすごと引っ込んだ。
無論、ノリコが言いたかったことはわかっている。家族と同居しているのに、平気でこんな時刻に帰って、自分の鍵で出入りする杏奈が不思議なのだ。ノリコの家なら、帰りがどんなに遅くなっても、親が心配して起きているのだろう。
杏奈の家は違う。杏奈は父母のことなんてなんとも思っていないし、父母のほうも杏奈に関心をもっていない。杏奈が帰宅しているのかどうかすら、意識されていないに違いない。
子供のころからそういう家だと思っていたが、陸上をやめてからはますます家族の心が離れ離れになっていた。事故の直後こそ、両親とも心配そうにしていたが、杏奈の生活態度が崩れ始めてからは、まるでかまわなくなった。たまに、「おまえの躾が悪い」「あなたこそ」と言い合っていることがあるが、杏奈を心配して喧嘩になるのではなく、どちらも自分が責任を負いたくないだけなのだ。

もう慣れていた。期待しなければ、悲しむこともない。杏奈は家族に何も望んでいない。
鍵を開けて中に入り、そのまま二階に上がった。
「すみません、急にお邪魔して……お姉さまのご家族になんと思われるか……」
「いいから」
「朝起きて、お母様がこの部屋に入られたら、びっくりなさいますよね。知らない子が泊まってたりしたら」
「母親はこの部屋には入らない。あんたは勝手に寝て、勝手に帰ってくれればいいの」
「でも、それじゃあまりに失礼です。ご挨拶を……」
「あのね」
杏奈は両手を腰に当てた。ノリコの良い子っぷりには、毎度毎度いらいらする。
「あんたがご挨拶したって、うちの家族はキョトンとするだけ。かえって迷惑なの。余計なこと考えないで、一晩休んだらさっさと帰ってくれるのが一番助かるんだけど」
ノリコは大きな目を見開いて、びっくりしたように杏奈を見た。杏奈はノリコに背を向けて、寝る支度を整えた。
「わたし、ベッドで寝るから。あんた床で寝て」
「はい」
適当に布団を渡してやり、自分はベッドに横になった。ノリコはもぞもぞと服を脱いだり髪

をとかしたり、小一時間もかけてようやく寝る体勢になった。杏奈はもう眠りかけていた。
「お姉さま」
明かりを消した部屋で、ノリコが呼びかけた。杏奈は半分寝ぼけて「何」と応えた。
「ごめんなさい……ご迷惑おかけして……ごめんなさい」
ご迷惑どころじゃないだろう。死んだ金田や反谷にしてみれば。
寝ぼけた頭にそんな考えが浮かんだが、口にはしなかった。杏奈に責める資格はない。金田が死んだと聞いたとき、一瞬ざまあみろと思った。気分がスッとした。
自分の心がおぞましい。ジョーカーは、たぶん杏奈の内にもひそんでいる。
「ジョーカーになっていた間のことは、ほとんど覚えてないんです。意識が朦朧としていて……気がついたら、あの青いお部屋にいたんです。周り、大人の人ばかりで、その中にお姉さまを見つけたとき、涙が出ました。嬉しくて。ありがとうございます……あの、わたしなんかのために。本当にありがとうございます」
「礼なら山尾に言って。あいつが電話してきたんだから」
「山尾さん……ですか。でもお姉さま……わたし、あの人なんだか……」
ノリコの声は小さくなった。杏奈は眠りに落ちた。結局、ノリコがなんと続けたのかは聞き取れなかった。

3

目が覚めたのは、昼近くだった。
杏奈が目をこすりながら起き上がると、ノリコが布団の上にきちんと正座して、こちらを見ていた。
杏奈は寝起きが悪い。低血圧なので、起きた直後は頭が朦朧として、寝る前のことなどほとんど思い出せない。なぜノリコが座っているのかわからなくて、一瞬、パニックになりかけた。
熱愛が嵩じて、ついに寝室にまで潜入してきたのだろうか。まるでストーカーだ。
出てけ、と怒鳴ろうとしたとき、馬鹿丁寧に三つ指をついて「おはようございます」と頭を下げられたので、ようやく昨夜のことを思い出した。
「そうか……あんた、この部屋に泊まって……いつから起きてたの？」
「寝坊をしてしまいました。ほんの三十分ほど前に起きたばかりです」
「……三十分、正座してたの？」
「はい。お姉さまをお起こししないように」

お起こししてくれたほうがマシだった。杏奈はげんなりしてベッドから下りた。
「学校……もう終わっちゃいますね。土曜だし……」
「学校？　行く気でいたの？」
杏奈があきれて尋ねると、ノリコはうつむいて答えた。
「本当は行きたくないんですけど……わたし、みんなに迷惑かけてしまって……わたしのせいで入院した人もいるそうですし。どんな目で見られるかと思うと……」
「なら、行かなきゃいいじゃない」
「でも……」
「行きたくないなら、さぼればいい。自分で決めれば、そのぐらい」
ノリコは感激したような目で杏奈を見た。
「お姉さまって、かっこいい……」
「何が」
「そんな風に自分の意志ではっきり行動できて……わたしには無理です。学校なんか行きたくないって思っても、どうしても、内申書のこととか、親の小言とか、気になっちゃう……」
美化されても困る。別に、杏奈は強い意志をもって学校をさぼっているわけではない。逆に、何もしたくないからずるずるさぼってしまうだけだ。
いや、一つだけあった。杏奈の目標。

「さぼるんでも、登校するんでもいいけど。顔洗って着替えて、さっさと出てってくれる？　わたしも出かけるから」
「お姉さまはどちらへ」
「達哉を捜しに」
「周防先輩……？　居場所、わかったんですか？」
「わからないから捜すのよ」
克哉たちは、ジョーカー狩りの真相を追うので手一杯だ。達哉を捜すのは、杏奈しかいない。
「わたしも、ご一緒していいですか？」
「学校は？」
「学校より周防先輩のほうが大切です。お邪魔はしませんから、連れてってください」
ノリコは懇願するように手を組み合わせた。
はっきり言って、足手まといではある。達哉と再会できたとき、この子がそばにいるのは鬱陶しい。
そう思ったが、言えなかった。杏奈は、ノリコに対して少し負い目を感じている。杏奈のせいでノリコがジョーカー化したのだと思うと、あまり意地の悪い態度は取れなかった。
「勝手にすれば」
そう答えると、ノリコは「はいっ」と嬉しそうにうなずいた。

そのとき、杏奈の携帯電話が鳴り出した。「サトミタダシ」のテーマ曲である。ノリコが目をぱちぱちさせて、「お姉さまらしくない着メロですね」と言った。杏奈は顔をしかめて電話に出た。

「もしもし、吉栄さん？　良かった、無事なのね」

山尾慶子の声だ。

「学校に来ないから、心配したのよ。片山さんがどうなったかもわからないし……」

「ノリコは無事よ」

「……救出できたの？」

「まあね」

詳しく説明するのは面倒くさかったので、適当に切り上げた。

「手を貸してくれた人がいてね。ゾディアックから無事に連れ出した。ノリコはもうジョーカーじゃない。今日は学校休んだけど、元気だから」

「……そう。良かったわね」

杏奈は眉を寄せた。慶子の声には、妙な響きがあった。

ノリコの無事を喜んでいる風ではない。何か、警戒しているような緊張が感じられた。

不思議に思ったが、慶子は素早く話題を変えていた。

「あのね、いいニュースを聞いたので電話したの」

「何」
「周防くんの居場所、わかったかもしれないの」
杏奈は電話を握りしめた。
「……本当？」
「たぶん。ごめんなさい、はっきりしたことは言えないんだけど……間違いないと思う」
「どこ？　達哉、どこにいるの？」
「港南区の廃工場を知ってるかしら？　その付近て、周防くんらしい人を何度か見かけたっていう人がいるの。ひょっとすると人違いかもしれないんだけど……吉栄さん、周防くんのこと心配してたでしょ。少しでも手がかりになるかと思って」
「……わかった。ありがと」
「わたしも行くわ。授業が終わってから待ち合わせましょう。場所は……」
慶子は廃工場への道順を説明し、電話を切った。
廃工場。なんてそんなところにいるんだろう。姿を隠しているのだろうか。誰かから逃げているのだろうか。なんでもいい、会って話せばわかる。
達哉。やっと会える。イゴールがなんと言おうと、達哉は変わってなんかいないってことを確かめなくては。
「周防先輩のこと、わかったんですか？」

ノリコが声をはずませた。

「うん。山尾が手がかりをつかんだみたい」

「山尾さん……？　なぜ……？」

急に、声のトーンが落ちる。杏奈はノリコの顔を見た。ノリコは心配そうに杏奈を見上げている。

そういえば、昨夜、寝入る間際に慶子の話題が出たことを思い出した。ノリコは何か言いかけたが、杏奈はちゃんと聞かずに眠ってしまったのだった。

「山尾がどうかしたの？」

尋ねると、ノリコはあわてたように首を振った。

「いいえ、なんでも」

「言いたいことがあるなら言えば」

「いえ。なんでもないです」

ノリコは首を振り続けている。追及するのも面倒くさいので、話題をそこで打ち切った。達哉のことで頭がいっぱいで、他のことを考えたくなかった。

待ち合わせの時刻に合わせて家を出た。空は曇っていたが、杏奈の心は明るかった。

電車を乗り継いで港南区の駅で降り、慶子から教えられた通りに廃工場を目指した。歩いて行くと、まもなく右手に廃墟のような建物が見えてきた。火事にあったらしく、無残に焼けこ

げている。

「あれ、空の科学館ですよね」

ノリコが指差し、驚きの声を上げた。

「焼けちゃったんですね。わあ……残念。わたし、小学生のときに見学に来たことあります。飛行機の模型とかあって、面白かったのに……」

舞耶から聞いた話を思い出した。あの紙袋男はここで舞耶たちと戦ったのだ。苦戦する舞耶たちを達哉が助け、紙袋男は死んだ。そして達哉はまた姿を消した……。

廃工場は科学館のすぐ近くだ。達哉らしい人を見かけたという目撃情報には、信憑性があるように思えた。

廃工場はすぐにわかった。有刺鉄線で周囲を囲われているが、管理が杜撰らしく、ところどころに破れ目がある。敷地内に入るのは簡単だった。

「吉栄さん」

声をかけて、近づいてきた人影がある。山尾慶子だった。

いつものように髪をきっちり編んで、レンズの丸い眼鏡をかけて、学校の規定通りの制服を少しも着崩さずに着ている。生徒手帳に「模範」として載せてやりたいような、優等生スタイルである。

慶子はノリコにも微笑みかけた。ノリコは、杏奈の後ろに隠れるように立っている。

「片山さん。もうすっかり正気に返ったのね。良かったわね」
「は、はい」
ノリコはおどおどしている。人見知りはもともと激しい子だが、今日は特に極端なようだった。杏奈の背後に隠れて、出てこようとしない。
「吉栄さんが助けてくれたのね？　感謝しなきゃね」
「はい」
「そんなことより、達哉はどこ？」
杏奈が尋ねると、慶子は背後の建物を指差した。
「たぶん、この工場の中よ。ここはね、しばらく前に閉鎖されてしまったの。なんだか、オバケが出るとかいう噂が立って、従業員が嫌がったからですって」
「オバケ？」
「ばかばかしいわよね。きっと、他に理由があるんだけど、外部に公表できない事情があって、誤魔化してるんだと思うわ。ともかく、今は使われてない工場なんだけど、時々中に入りこんで騒ぐ中高生のグループがいるらしいの。それで、火の不始末とかあったらまずいから、何日かおきに警備員が巡回してるそうなの。わたしが聞いたのは、その警備員の話」
話しながら、慶子は建物に向かって歩き始めた。杏奈とノリコも後に続く。
敷地には、足首が埋まるほどの丈まで雑草が伸びている。曇り空の下、うずくまる怪物のよ

うな工場と雑草の取り合わせは、寒々しかったという
「その警備員によれば、高校生らしい男の子が一人で廃工場に潜りこんでるのを見たっていうの。声をかけようとしたら、逃げ出しちゃったんですって。人相ははっきりわからなかったけど、七姉妹学園の制服を着てたそうよ。背が高くて、髪がちょっと長めだったって……ね、周防くんの特徴と合うでしょう」
杏奈は無言でうなずいた。
間違いない。達哉だ。他に、こんな廃工場に出入りする生徒がいるとは思えない。
「一度だけじゃなく、何度か目撃してるそうなの。廃工場をねぐらにしてるらしいって、警備員はカリカリしてたわ。どういう事情があるのかわからないけど、周防くんは家に帰れなくて、この工場で寝泊まりしてるんじゃないかしら。気味の悪い場所だけど、雨露はしのげるし。周防くんって、オバケの噂なんか全然怖がらなさそうだし……」
工場の扉は施錠されていたが、慶子はポケットから鍵束を取り出した。杏奈の心に小さな不信感が芽生えた。
「あんた、なんでそんなの持ってるの？」
「話を聞かせてくれた警備員に、ちょっとお願いしてね。合鍵を手に入れたの」
こともなげに言って、慶子は鉄扉を開き、中へ滑りこんだ。
ちょっとお願い、というのがどういうことか、具体的に聞くのは気が進まなかった。

物静かな優等生にしては、大胆な真似をする。ジョーカー事件を通じて、人は見かけによらないのだということを学んだ杏奈だが、それにしても今日の慶子には少し驚かされた。

「お姉さま……」

ノリコが不安そうに杏奈の背後で声を上げた。杏奈は振り向きもせずに言った。

「怖いなら帰れば」

「いいえ……帰りません。大丈夫です」

工場内は寒かった。人気がないのだから当然だが、そのせいばかりではなく、ちりちりするような不快な冷気が凝っているように思えた。杏奈は思わず首をすくめた。

三人で工場の奥へ進んだ。人気のない建物の中は、ひっそりして薄寒い。三人の足音だけが、高い天井にうつろに反響している。窓はいくつかあるが、いずれも小さく、通路は暗かった。数メートル離れると、もう相手の顔を判別するのが難しくなる。

達哉はこんなところで寝泊まりしてるんだろうか。一人きりで。

彼が孤独を恐れない性格であることは知っている。だが、それにしてもここは寂しすぎる。寒すぎる。オバケが出るというばかばかしい噂話すらも、ここなら信じられそうだ。こんな場所でひっそりと隠れなくてはならないなんて、どんな事情があるのだろう……。

「こっちよ」

慶子は内部の構造をよく知っているらしく、迷いのない足取りで先を行く。角を曲がり、突

き当たりの鉄扉の前で足を止めた。
ここも施錠されていたが、慶子の鍵束で開けることができた。
「暗いから、足元気をつけて」
慶子に続いて中に入る。この部屋には、通路と違って窓がない。中は真っ暗だった。
杏奈はバッグの中に手をつっこんだ。いつも持ち歩いているペンライトを取り出し、つけてみる。頼りない光ではあるが、ないよりはずっとマシだ。
光をゆっくり滑らせてみる。コンテナのようなものがいくつか見える。奥にあるのはベルトコンベアーらしい。壁際に並んだロッカーの扉が開け放たれている。あわてて人が逃げ出したあとのようで、気味が悪かった。
「あら、吉栄さん。いいもの持ってるのね」
慶子の姿は見えなかった。いつのまにか、部屋の奥に入りこんでいるらしい。杏奈はそちらへ近づいていった。ノリコも杏奈の背中にぴったりくっついてくる。
「気をつけてね。足元、悪いから……」
慶子の声はコンテナの陰から聞こえてくる。杏奈は足元を照らしながら、ゆっくり進んだ。
「ちょっと止まって、山尾。こんなところではぐれたら……」
「はぐれたら？」
杏奈は足を止めた。

今の慶子の声。背後から聞こえた。
前方にいると思っていたのに、いつのまにか、足音を殺して回りこんでいたらしい。
それに、これまでの慶子の声とは調子が違っていた。笑いを含んだ、皮肉な声音だった。
扉の閉まる音がした。杏奈は、呆然と立っているノリコを突き飛ばすようにして、出入口に駆け寄った。
一瞬遅かった。杏奈が扉に手をかけた瞬間、錠の下りる音がした。
「山尾!?」
杏奈は扉を叩いた。ガンガンと、むなしい音が工場内に反響する。
「何やってんの!? どういうつもり!? ここ開けなさいよ、山尾!?」
「あら大変。はぐれちゃった」
慶子の声が、鉄扉の向こうで大笑いした。
杏奈は扉を叩くのをやめ、唇を噛んだ。
自分の単純さが呪わしくなる。達哉のことで頭がいっぱいで、慶子の嘘にあっけなく引っかかった。達哉のことさえなければ、もっと警戒しただろうに……。
「理由を聞かせて」
杏奈はつとめて落ち着いた声を出した。ノリコが杏奈の背中にしがみついて泣き出した。
「なんでこんなことするの? 山尾、あんた……」

「山尾さん、でしょ」
慶子は憎々しげに嘲った。
「あんたに呼び捨てにされるいわれはないわよ」
「……山尾さん。理由を聞かせてほしい。どういうことなの？」
「こっちが聞きたいわ」
慶子の声は吐き捨てるように言った。
「吉栄、あんた何者？」
「……どういう意味？」
「すっとぼけんじゃねえよ！」
ガン、と音がした。向こう側で慶子が扉を蹴飛ばしたらしい。
杏奈は扉を睨んだ。いつもの山尾慶子ではない。何かが彼女を変えてしまったのか――それとも、これまで本性を隠してきただけなのか。いずれにせよ、これまで彼女を甘く見すぎていたことを認めざるをえなかった。
「とぼけてるわけじゃない。本当に、言ってる意味がわからない。わたしは吉栄杏奈よ。何者って聞かれても、それ以外には答えられない」
「じゃあ、わたしが言ってやるよ」
慶子の声は低く囁いた。杏奈は聞き逃さないよう、扉に耳をつけた。

「レイディ・スコルピオン。その名に聞き覚えは？」
「……何、それ」
杏奈は面食らった。いったい何を言われるのかと身構えていたのに、肩すかしを食ったような気分だ。
レイディ。紙袋の男も杏奈をそう呼んだ。何か関係があるのだろうか？
「わたし、自分のケータイに電話かけたの」
慶子の声が続けた。
「ジョーカー呪いをやってみたの。ジョーカー様にお願いしたのよ。あんたを……吉栄杏奈を殺してほしいって」
杏奈は驚いた。
慶子のことを友達とは思っていなかったが、どちらかといえば好意をもたれていると思っていた。慶子は何かにつけて杏奈に話しかけてきたし、他の生徒たちの口さがない噂から庇ってくれることもたびたびあった。
「なぜ？」
杏奈は冷たい鉄扉に手を置いて尋ねた。
「なぜ、わたしを殺したかったの？」
「おまえが彼に纏わりついてるからだよ」

「だって……」

杏奈は大きく息を吸い込んだ。

なるほど。それで納得がいった。

「達哉のこと？」

「その呼び方がむかつくんだよ！　学校中でおまえだけだよ、あの人をなれなれしく名前で呼んだりするのは！」

また扉を蹴飛ばす音。

「山尾……」

と言ってから、「さん」と一応付け加えておいた。

「達哉のこと好きだったの？」

慶子の声は答えなかった。沈黙が数秒間続き、杏奈は不安になった。慶子が怒ってこのまま帰ってしまったら、面倒なことになる。

長い沈黙の後で、慶子の声はぽつりと告げた。

「入学したときから、ずっと見てた」

声はかすかに震えていた。さっきまでの口汚い罵りが嘘のようだ。杏奈が知っている通りの、優等生の口調に戻っていた。

「同級生の中で一番かっこいいし、目立ってたから。最初は、外見に惹かれた。でも、ずっと

見てるうちにわかった。彼に惹きつけられたのは顔のせいだけじゃなくて……彼の強さのせいだったんだって。みんなから怖がられて……友達もほとんどつくらなくて……先生たちから問題児呼ばわりされて……それでもいつも真っ直ぐ前を見てた。わたし、あの人が好きだった。本当に好きだった。片思いでよかったのよ。気持ちを打ち明けようなんて思わなかった。遠くから見ていられるだけでよかったのに……おまえが……」

慶子の声は、突然甲高くはね上がった。

「おまえがあの人に近づくから！　わたしが話すことすらできなかったあの人に、恋人気取りで近づくから！」

「恋人気取り？」

杏奈は鸚鵡返しにつぶやいた。

口の端に、苦い笑いが浮かぶ。傍からはそんな風に見えていたのか。

確かに杏奈は達哉を好きだった。彼に対してもっていた感情は、友情ではなく恋に近かった。だが、達哉にはそんな夢想を許さない怖さがあった。知り合って間もなく、杏奈はそれを思い知った。

甘い感情を見せたら、さっさと離れていってしまいそうな気がした。だから、自分の感情はなるべく押し殺した。達哉は杏奈に優しかったが、杏奈がひそかに望んでいたような特別な感情を見せてくれることは決してなかった。親しくしているつもりでも、達哉には決して他人に

心の内を見せない頑なさがあった。
寂しさに胸を嚙まれる。杏奈は、達哉のことをまるで理解してなかった……。
「じゃあ、山尾……さん。あんたがわたしに近づいたのも、いろいろ話しかけてきたのも、全部達哉のため？　わたしが達哉に近づきすぎないよう、見張るため？」
「決まってんだろ。でなきゃ、誰があんたなんかに」
慶子の声は嘲笑い、続けた。
「わたしはたびたび言ったはずよ。クラブなんかに出入りするなとか、周防くんみたいな人とはあまりかかわらないほうがいいとか」
「……確かにね」
心配そうな口調で忠告されたことが何度かあった。優等生の委員長らしい、余計なお節介と思って無視していた。まさか、慶子の真意が別にあるとは思いもしなかった。
「でもおまえは聞き入れなかった。だからジョーカー様にお願いしたの。おまえさえいなくなれば、周防くんはわたしに目を向けてくれる。おまえなんかより彼にふさわしい相手がいるってことに気がついてくれる」
「……で？」
「ジョーカー様はなんて言ったと思う？　おまえの名前を告げたら、途端に大笑いしたよ。気味が悪いくらい笑い転げてから、言ったよ。そいつは殺せねえなって」

杏奈は額を押さえた。紙袋男の笑い声が脳裏によみがえる。

「驚いた。ジョーカー様はどんなターゲットも無条件に殺ってくれるって聞いてたから。理由を聞いたら、彼は言った。そいつは俺の仲間だ。レイディ・スコルピオンを殺すわけにはいかねえ……ってね」

「何よ、それ」

無性に腹立たしくなってきた。

杏奈の知らないところで、勝手に「恋人気取り」にして、勝手に知らないあだ名を付けて、殺せだの殺せないだの。まるで茶番だ。

「レイディなんてわたしは知らない。ジョーカーだって、全然知らない。あいつはわたしのことを誰か別人と間違えてただけ……」

「ジョーカーに間違いはない。とぼけるんじゃねえよ。おまえはジョーカーの仲間。金田だって反谷だって、おまえが殺ったんだろ？」

「違う」

「お姉さま……」

ノリコが震えながら声を上げた。

杏奈が制止する間もなく、扉を叩きながら叫び始めた。

「お姉さまはそんなことしてません！　誤解です、ジョーカーに電話して二人を殺すよう頼ん

だのはわたしなんです。お姉さまは何も……！」
「うるせえんだよ。ガキは黙ってな」
慶子の一言で、ノリコは扉を叩くのをやめて、しゃくりあげた。
恨みをこめた声が続けた。
「ゾディアックに連れていかれた人はたくさんいる。警察だって動きゃしない。なのに、なぜ片山だけ返された？　吉栄、おまえがジョーカーに繋がってるからだろ」
「違う。それは全然関係な……」
「周防くんに何をしたの？　なぜ彼は学校に来ないの？」
「こっちが知りたいわよ。そんなこと」
「おまえ、まさか周防くんを……殺したんじゃないの？」
「何？」
力が抜けてしまった。杏奈は扉にもたれかかった。
恋人気取りだの、ジョーカーの仲間だの、慶子の頭の中は間違った思いこみだらけだが、これは極めつけだ。
「なんでわたしが達哉を……」
「彼に迫ってふられて、腹いせに殺っちまったんじゃないの？　ジョーカーのお仲間なら、そのくらい簡単だろ」

「バカじゃないの」

　思わず、つぶやいていた。なんとか慶子を宥めすかさなければならないことを忘れていた。慶子の誤解はあまりにも的外れで、怒りよりも笑いがこみあげてくるほどだ。

　杏奈のつぶやきは慶子を怒らせた。それは表面張力で保たれていたコップの水に、最後の一滴を加えたようなものだった。

「死ね！」

　慶子は激昂して喚いた。

「死ね死ね死ね！　おまえも片山も！　そこでくたばっちまいな。飢えて、干からびて、ミイラみたいになって死んじゃいな！」

「山尾……」

「呼び捨てにするなって言ってんだろ。いいこと教えてあげる。工場にオバケが出るっていう噂、あれは嘘じゃないんだよ。工場で働いてた連中が何人も目撃してんだよ。良かったね、ミイラになるより、化け物に食われたほうが楽に死ねるよ、きっと」

　慶子は笑い出した。少しずつ、笑い声が遠ざかっていく。

「山尾！　待って、山尾！」

　無駄と知りながら、杏奈は扉を叩いた。五、六回叩いただけで、拳が痛くなった。

　もう慶子の笑い声は聞こえない。杏奈は怒りをこめて扉を一度蹴飛ばし、その場に座りこん

てしまった。
ノリコは泣きながら、杏奈の隣に座って、ぴったり身体を寄せてきた。杏奈は左手に握ったままだったペンライトを消して、ポケットにしまった。真っ暗になった。
「お姉さま……明かりを……」
ノリコはますます怯えて、杏奈にしがみついてきた。
「電池がもったいない。節約しないと」
「……はい」
「大丈夫よ。そのうち、警備員が回ってくる。あんたの親だって心配して捜索願いを出すだろうし。何時間か我慢してれば、出られるよ」
ノリコを励ますためにそう言ってみたが、自分の言葉を信じてはいなかった。警備員の巡回云々は、慶子の作り話かもしれない。ここはとっくに見捨てられた廃工場で、警備なんてしてないかもしれない。ノリコの親が捜索願いを出したとしても、警察がこんな場所を捜すとは思えない。杏奈もノリコも、廃工場に向かうことを誰にも告げなかった。
思いついて、バッグの中から携帯電話を取り出してみたが、圏外だった。
慶子の言う通り、ここで死ぬんだろうか。飢えて、干からびて。
冗談じゃない。
「あの人……山尾さんって……やっぱり噂は本当だったんですね……」

ノリコが震える声でつぶやいた。

「噂って？」

「外見は可愛いけど、実はすごい怖いって聞いたんです。二重人格みたいにすごいって。気に入らない人にはひどいことするけど、絶対に自分だってバレるようなやり方はしないとか。可愛がってるペットを殺されたり……トイレに閉じこめられたり……体育のときに用具のネジはずされて、大怪我した子もいるんです。犯人はわからなかったけど、被害に遭ったのは山尾さんに嫌われた人たちばかりなんです。一度きりじゃなくて、何度も」

「……早く言ってよ、そういうことは」

「でも、あくまでも噂で、証拠はないんです。あやふやな憶測で、人の悪口を言ったりしてはいけないと思って」

「時と場合によるでしょ」

ノリコを責めても仕方がない。慶子の上辺にころっとだまされていたのは、杏奈のほうだ。優等生の笑顔の裏で、杏奈への憎しみを少しずつ増幅させていたのか。殺してやりたいと思いつめるぐらいに。

好きな相手に話しかけることもできない臆病さと、気に入らない相手を徹底的に排除しようとする残酷さ……それらが慶子の心の中でどんなバランスを取っていたのか考えると、無気味だった。

人は、無数の仮面をつけて生きている。イゴールの言葉を思い出す。ノリコやうららの中に意外な殺意が隠れていたのと同様に、慶子もまた人に知られない顔をもっていたのだ。

「お姉さま……オバケって、本当にいると思います？」

黙っていると不安になるらしく、ノリコが囁いた。

「いるわけないでしょ。ばかばかしい」

「でも……あの……錯覚かもしれないんですけど、さっきからなんとなく……嫌な気配を感じるんです。何か、わたしたち以外に動いてるものがあるような……」

「バカね」

杏奈は不機嫌に叱りつけた。

「錯覚に決まってるでしょ。怖いと思うから怖いのよ」

「だけど……」

「何？　あんた霊感あるの？　幽霊見たことあるの？」

「ないです……なかったです。でも……記憶が曖昧なんですけど……わたし、ジョーカーになってた間、変なものを見たような気がするんです」

「何を？」

「化け物……天狗みたいなのとか……ふわふわ漂う女の人とか……そういうのがゾディアックの廊下にうようよしてたような気がするんです。そのときの記憶は混乱してて、よく思い出せ

ないんですけど」
「幻覚でしょ。わたしはゾディアックに何度も出入りしてるけど、そんなもの見たことない。ジョーカーに変わってたとき、あんたの意識は正常じゃなかったはずだし」
「それは……そうなんですけど……」
「くだらないこと言わないで。いらいらするから」
「……すみません」
ノリコは黙りこんだ。杏奈は立ち上がった。
「お姉さま」
ノリコもあわてて立った。杏奈はノリコの手を引いて歩き出した。
「どうするんですか?」
「奥のほうに別の出入り口があるかもしれないから探す」
暗闇の中にじっとしていることに耐えられなくなったのだ。ノリコのように化け物の幻影に怯えているわけではないが、ミイラになって死ぬ自分を想像すると気が滅入った。何かしていたほうがいい。
ペンライトをつけた。一筋の明かりが、いくらか気分を落ち着かせてくれた。
「十分間だけ、これをつけておこう。十分過ぎたら、また消すから」
「はい」

工場内はかなり広かった。機材が放置されたままになっているので、ぶつかったり躓いたりしないよう、ペンライトで照らしながらゆっくり進む。しばらく歩くと、反対側の壁にぶつかった。

壁沿いにぐるっと回ってみる。扉があったが、鍵がかかっていた。

「駄目か……」

挫けそうになる。ペンライトをつけてから、とっくに十分は過ぎている。だが、消す勇気が出なかった。

「お姉さま」

また歩き出そうとした杏奈を、ノリコが引き止めた。

「そっち……行かないほうが……」

「どうして？」

「なんだか……嫌な気配が……」

「まだそんなこと言ってるの？」

杏奈はノリコの手を振り払って歩き出した。ノリコは杏奈の腕にあわてて縋りつき、引きずられるようについてくる。

「やめましょうよ、お姉さま。引き返したほうが」

「何言ってるの。他に扉があるかもしれない。探さないと」

「だけど……」
いらいらした。杏奈の神経も張り詰めている。甘え声や泣き声を出されると、ブチ切れそうになる。
「いい加減にして。気に入らないなら、あんただけ引き返して最初の扉のところで待ってて」
「い、嫌です……」
ノリコの手を振りほどいて、また歩き出したときだった。
空気が震えた。
音は聞こえない。だが、何者かが声にならぬ叫びを発したような波動を、肌に直接感じた。
杏奈は立ち止まった。
錯覚？　ノリコがばかなことを言うから、杏奈まで幻覚にとらわれている？
ノリコが震え出した。さっきよりもずっと強い力で杏奈にしがみつき、行かせまいと引っ張っている。
「お姉さま……今の……」
「なんでもないわよ。ただの隙間風でしょ」
「駄目です。この先、やっぱり何かいる……！」
突然、ノリコは「きゃあああああ！」と悲鳴を上げた。杏奈はびっくりして飛び下がった。
ペンライトを前方に向ける。素早く上下左右に動かしたが、視界に入ったのは積み上げられ

たコンテナだけだった。
「……ばか！　急に変な声出さないで……」
叱りつけた杏奈を、ノリコが泣きじゃくりながら引っ張った。
「逃げて、お姉さま。危ない！」
風が杏奈の頰を撫でた。
髪がなびく。隙間風どころではない。窓のない工場内なのに……こんな強い風など、起きるはずがないのに。
「そこに……いる……」
ノリコが指差す。そちらへ光を向けてみたが、やはり何も見えない。
「何がいるっていうのよ」
「そこです。コンテナの横に……浮いてる」
「何が！」
杏奈も逆上していた。片手でペンライトをコンテナ周辺に向け、もう片方の手でノリコの腕をつかんで揺さぶる。
「見なさいよ！　何もいないじゃない！」
「います。ほら。今ちょうど光の中に……お姉さま……あぶない！」
ノリコが杏奈を引きずるようにして床に倒れた。

身を伏せた二人の上を、何か大きな影が過ぎていった。
杏奈は顔を上げ、狂ったようにライトを振り回した。だが、影の正体はとらえきれない。
「見えないんですか？　まさか、お姉さま、見えてないんですか？」
ノリコが震え声で尋ねる。
「見えない。気配は感じたけど……」
「わたし、見えます。龍みたいな、変なものが飛んでる。また……来ます！」
ノリコは立ち上がり、杏奈をコンテナの陰に突き飛ばした。
二人でうずくまり、呼吸を整える。
「お姉さま、明かり消してください。それ、目印になってる」
「だけど……」
「消して。暗がりでも向こうの姿は見えます。ぼうっと光ってるから……」
言われた通りにペンライトを消した。視界が闇に閉ざされる。杏奈には、すぐ横にいるノリコの顔さえ見分けられなくなった。
「見えるの？　あんた、どうしてそんな……」
「お姉さま、こっちへ……きゃあああああ」
悲鳴。杏奈はノリコの腕をつかんだ。
「どうしたの」

「何か飛んできた……つぶてみたいなもの……頬に当たって……」
杏奈は手探りでノリコの顔を触ってみた。指先がぬるぬるした。血が出ている。
幻覚じゃない。確かにノリコは異形を見ている。近くに何かがいる。
ジョーカー化したとき、化け物を見たと言っていた。あの経験のせいで、ノリコは今までにない能力を獲得したのかもしれない。常人の目には見えない、この世のものならぬ影を見てしまう力を。
工場に勤めていた人が化け物を目撃したという話もあった。杏奈はこれまで霊感だの超能力だのいうオカルトめいた力を一切信じていなかったが、他人と違った目をもつ人は、存在するのかもしれない。
慶子の嘲笑が頭の中に響き渡る。ミイラになるよりは、化け物に食われたほうが楽に死ねるよ。
「ノリコ、化け物どっちにいる?」
「右……こっちをうかがってるみたい……」
「動いたら教えて」
杏奈は鞄の中をまさぐった。明かりがないので、手探りで中身をかき回す。何か、武器になりそうなものはないか。ナイフがあれば……いや、そんなものは持ち歩いてない。せめて裁縫セットでも入れておけばよかった。なんでもいい、尖ったペンでも……。

だが、何もなかった。せいぜい、家の鍵が見つかったぐらいだ。
こんなものでは戦えない。杏奈は唇を嚙んだ。
周囲を探ってみる。鉄棒(てつぼう)かパイプか何か見つからないか。だが、そんなものが都合(つごう)よく落ちているはずがない。
ノリコが小声で囁いた。
「動き始めました。でも、こっちを見失ってるみたい。探してる……」
杏奈は隠れ場所からそろそろ這(は)い出した。気づいたノリコが引き止める。
「どうするんですか、お姉さま。出ていったらあぶない……」
「いつまでもここに隠れてるわけにいかないでしょ」
行き止まりの場所で襲(おそ)われたら、もう逃げ場がない。退路(たいろ)を確保したほうがいい。
「でも……」
「あんたは下がってて。敵(てき)の動きを教えて」
「いいえ、わたしも戦います。お姉さまと一緒に」
「引っ込んでて」
「いいえ。わたしだってきっとお役に……」
「怪我したいの？」
杏奈は吐き捨てるようにつぶやいた。

「走れなくなったらどうするの？」
ノリコは絶句した。その隙に、杏奈は彼女から離れて、一人で立った。
ノリコにはまだ陸上がある。杏奈には何もない。だったら、杏奈が戦うべきだ。
鍵を手の中で弄びながら、呼吸を整える。恐怖のあまりパニックに陥ってもおかしくない状況なのに、不思議に頭の芯が冴えている。高揚感が、恐怖を押し流す。
なんだろう。この感じは。
杏奈はこれまでほとんど喧嘩というものをしたことがない。トラブルは極力避けてきた。どういうかたちであれ、他人とかかわるのが面倒くさかったからだ。ゾディアックで杉本に煙草を押しつけたのが、唯一の例外だった。
だが、戦いを前にしたぞくぞくするような緊張感には覚えがあった。頭が冴えて、全身に力が漲って——いつもの何倍もの力を発揮できるような気がする。
なぜだろう。初めてじゃない。杏奈は確かに、この感じを知っている。
こうして敵に向き合ったことが、以前にもあった。確かにあった。
どのくらい昔のことなのか、どんな状況だったのか、まるで思い出せない。デジャ・ヴュ。そう呼ぶしかない感覚だった。
一人ではなかったような気がする。杏奈のかたわらに、誰かがいた。杏奈は、その人と一緒に戦った。その人の背中を守って、夢中で戦った。

なんだろう。あれは、いつのことだったんだろう。杏奈を守ってくれたのは、誰だったんだろう……?

「来ます。右上から」

夢想に耽っている場合ではなかった。ノリコの声に応じて、その方向に向き直る。

今ここに、杏奈を助けてくれる人はいない。逆に、杏奈が守らなければならない後輩がいる。

杏奈がなんとかしなければならない。

肌が粟立つ。耳の奥が痺れる。人間の耳には聞き取ることのできない高い音が空気を震わせている。

風音。杏奈は吹き飛ばされ、背後のコンテナに叩きつけられた。

頭を打った。くらくらきた。時計台でぶつけたときの怪我が、まだ治りきっていない。同じところを強打した。

気を失ったら終わりだ。杏奈は必死に身体を起こした。

「お姉さま、大丈夫ですか!?」

「平気。どこにいる?」

「上……また来ます!」

ノリコの叫びとほとんど同時に、青白い閃光が走った。稲妻のような。

雷撃はわずかに杏奈の身体からそれた。背後の壁が砕ける音。

鳥肌が立った。あんなのに直撃されたら即死だ。
時計台のことを思い出す。紙袋男に連れ去られかけた杏奈を、達哉が助けに来てくれた。空の科学館では、苦戦する舞耶たちを助けてくれたのだという。今度も来てくれないだろうか。
絶体絶命の瞬間に、来てくれないだろうか。
もう一度、稲妻が光った。右腕に焼けるような痛みが走る。重傷ではないが、皮膚をかすめていた。
思わず呻き声が漏れた。
「お姉さま!?」
ノリコの声に応える気力もなかった。
心が絶望に塗りつぶされてゆく。達哉は来てくれない。
さっき、戦いの経験があるなんて思ったのはただの錯覚だった。杏奈には戦えない。姿を見ることすらできない敵に、じわじわ嬲り殺されていくだけ。
ノリコのことを、初めてかわいそうだと思った。
杏奈のためにジョーカーとなり、杏奈のためにこんな場所に閉じこめられてしまったノリコ。杏奈なんかにかかわらなければ、こんな悲惨な目に遭うこともなかったのに……。
大きな翼のようなものが、はばたく音がする。強い風が吹きつける。杏奈は歯を食いしばって、暗闇を睨みつけた。

死ぬ瞬間は痛いんだろうか。交通事故のときよりも？
見えない敵が、邪悪な喜びを撒き散らしている。久々の獲物を得て、舌なめずりの音すら聞こえそうな気がする。
その瞬間だった。突然、白い光がはじけた。
網膜に焼きつくほどの強烈な輝きだった。白々とした光の中に、龍のような姿が見えた。
これが、ノリコの見ていた化け物か。赤みを帯びた蛇のような胴体に、コウモリのような羽根を持っている。想像していたよりずっとおぞましい姿だった。
怪物は怯えていた。白い光に射られて、空中で竦んでいる。
その身体が、尻尾の先のほうから崩れ始めた。光がまぶしすぎて直視できないが、確かに、龍は崩れていた。
まるで、砂で作った像が波に洗われて、脆く崩れさるように。身体を構成している分子の一粒一粒が結合をとかれてしまったかのように。
これは現実なのか？　さっきまで見えなかったのに。ペンライトの光ではまったく見えなかったのに。
龍の身体がのけぞる。崩壊から逃れようと、必死に身を捩っているようだった。
だが、まったく無駄だった。尻尾のほうから崩れ始めた龍は、あっという間に赤い塵となって霧散した。

「お姉さま……」

ノリコが這いよってくる。杏奈は目をこすり、何度も瞬いた。まぶしすぎる。世界中を焼き尽くそうとするかのような、凶悪な光。

杏奈は戦慄した。この光には、生物を一瞬で殺す力がある？　自分もノリコも、龍と同じように崩れさってしまうんだろうか……？

どこかで笑い声を聞いたような気がした。杏奈は目を閉じて、両手で耳をふさいだ。

気が遠くなる。身体ごと、どこかへ運ばれていくような気がする。

それきり、杏奈は気を失った。

*

……ケーキ作るんだよ。休みのたんびに。

イイ年して何してやがる……って思うよな。

俺は甘いものなんか嫌いだって、何度言っても聞きゃしねぇ。これは甘くないから、絶対おいしいからって言い張って、無理やり食わせようとするんだよ。

刑事だぜ、一応。あんなんで、犯人なんか捕まえられるのか？

いいお兄さんじゃない。

よくない。鬱陶しいだけだ……。

でも、うらやましいよ。わたし、家族におやつなんて作ってもらったことないから。

……。

お小遣い渡されて、なんか好きなもの自分で買って食べろって。ずっと小さいときからそうだった。うち、そういう家だから。

……干渉されるより、百倍マシじゃねーか？

今ならね、そう思うけど。小さいころは嫌だった。友達の家は、お小遣いの使いみちを結構親がチェックしたりするの。ひと月にお小遣いいくらとか決まってて、あんまりお菓子ばっかり食べちゃ駄目とかね。でも、うち関係ないの。いくら使っても、何を買っても、親、なんとも言わなかった。せびるだけくれたから、なんか親へのあてつけみたいに山ほどジャンクフード買って食べてた。一度にアイスクリームたくさん食べすぎて、おなか壊したこともある。

……杏奈、今度、食ってみるか？　あれだけ毎週作ってるんだ。腕はまあまあだろ……いい加減、捨てちまうだけってのも、もったいないしな……。

＊

目を開いたとき、天井の模様がにじんで見えた。

杏奈は何度か瞬いた。頬に冷たいものが滑り落ちた。眠ったまま泣いていたらしい。

達哉の夢なんか見たからだ。兄のことを語る達哉の、嫌そうな口調。杏奈のほうを見たときの、わずかに細めた優しい目。全部、覚えてる通りだ。すぐ手の届く場所にあったのに……今ではもう、夢の中でしか会えない。

達哉。

優しかった。みんなから怖がられてたけど、すごく優しかった。

お兄さんに会ったよ。そう話したら、どんな顔するだろう。

ケーキ、今度食べさせてくださいって言ってみようか。あのお兄さん、優しそうだから、きっと作ってくれると思う。

でも本当はわたしも甘いものは好きじゃないんだ。お酒の入ったケーキがいいな……。

杏奈は腕を持ち上げ、目をこすった。そのときようやく、自分が見知らぬ部屋に寝かされて

いることに気づいた。
天井から、シャンデリアのようなきらきらした照明が下がっている。身体にかけられた布団の中身は、たぶん羽毛なのだろう、ふんわりと軽くて暖かい。
杏奈は横たわったまま、視線を動かした。
豪華な部屋だ。杏奈が寝かされているベッドは、四隅にガーゴイルのような彫刻のついた立派なものだった。壁際に、ドレッサーと背の高い柱時計が見える。繊細な細工のテーブルと、椅子が三脚。窓はなかった。
ベッドの柱の彫刻は、気を失う直前の出来事を思い出させた。
龍のような化け物が、粉々に砕け散った。その寸前、まばゆい白い光が目を焼いた。
どうなったんだろう。ここはどこだろう。誰が杏奈を廃工場から連れ出してくれたんだろう。
ノリコは……？
杏奈は身体を起こした。
「気がついたかね」
低い、男の声がした。杏奈はびくっとして、そちらへ目を向けた。
気がつかなかった。ベッドの頭側に、男が立って杏奈を見下ろしていた。
杏奈が眠っているのをずっと見てたんだろうか。睨みつけたが、男はまったく表情を変えなかった。

奇妙な人物だ。背が高く、色白で、彫りの深い顔立ちをしている。肩より長く伸びた髪は、見事なプラチナ・ブロンドだった。外国人のようだが、日本語は滑らかだ。

左目を、時計の文字盤のような模様のあるモノクルで隠していた。残る右目は、深みのある琥珀の色。謎めいた笑みを浮かべて杏奈を見ている。

「……あんた、誰？」

杏奈は自分の服装をチェックしながら尋ねた。

廃工場で倒れたときのままだ。勝手に着替えさせられたりしていなかったので、とりあえずほっとした。

男からの答えはない。杏奈は続けて質問した。

「ここ、どこ？」

「ここは時間城」

「……え？」

「蓮華台のロータスを知っているね？　ここは、その中にある店の一つ」

ロータスは、七姉妹学園の近くにあるショッピングモールである。ドラッグストアなどが入っているので、杏奈もたびたび学校帰りに立ち寄ったことがあった。

時間城。そういえば、そんな店がロータスの片隅にあったような気がする。古めかしい店構えなので、杏奈は入ったことがなかった。ショウウィンドウに、古い時計や人形などが並べて

あった。確か、アンティークを扱っている店だったような……。
この部屋も、男も、なんとなく現実離れしているように思えたが、自分のよく知っているショッピングモールの中だと聞いてひとまず安心した。
だが、ますます疑問が嵩じる。港南区の廃工場で倒れたはずなのに、なぜ蓮華台のアンティーク・ショップなんかにいるのだろう？
杏奈は後頭部に手を当てた。ぶつけた箇所が痛い。右腕には包帯が巻かれていた。廃工場で、龍の放った稲妻に焼かれたことを思い出した。
龍の化け物も、白い光も、夢などではなかった。
「じゃ、あなた時間城の店主？」
「その通り」
「わたし、廃工場で倒れたはずだけど。なぜ、ここにいるの？　あなたが助けてくれたの？」
杏奈の疑問に、男は薄笑いを浮かべただけだった。
「……廃工場に、怪物がいたでしょう。龍みたいな……あれをやっつけたの、あなた？」
やはり答えはない。
「ノリコは？」
「ご友人なら無事だ。君より先に目覚め、家に戻っている」
「……そう」

ほっとしたが、そうするとまた別の疑問が生じた。
ノリコが自分で帰るはずはない。お姉さまが気がつくまで待っていると言い張るに決まっている。あの子は、言い出したら梃子でも動かないのだ。この男が強制的に、杏奈と引き離したに違いない。
男に対する警戒心が強まる。ただの人間と思えない。何者……？
「今しばらく、この部屋で休養したほうがいい。君は疲れているようだから」
「疲れてなんかいない」
こんな得体の知れない男、かかわるとろくなことにならない。とっとと逃げ出すに限る。そう思って、ベッドから下りようとしたとき、男が言った。
「泣いていたね」
杏奈はベッドに半身を残したまま、男を振り返り、睨みつけた。
やはり寝顔を見ていたのだ。悪趣味。
だが男はからかうように続けた。
「恋しい男のことでも思い出したかな」
「……あんたに関係ない。帰る」
「もうしばらく、休んだほうがよいと思うが」
「帰る」

靴はベッドサイドに揃えてあった。鞄もきちんとサイドテーブルの上に置いてある。
まだ少し頭がふらふらする。よろめきながら靴を履き、鞄を手に取る。
「世話かけたわね。じゃあ」
戸口に向かおうとしたときだった。
男は、かすかに笑いを含んだ声で言った。
「気をつけて。レイディ」
杏奈は振り返った。顔が強ばった。
レイディ。その呼び名が引っかかる。
ただの偶然かもしれない。深い意味などなくて、ただ女性に対する呼びかけとして使っただけかもしれない。だが、男の口調は意味ありげだった。すべてを見透かして嘲笑しているかのように。
杏奈は息を吸い込み、男を睨んだ。男は琥珀の隻眼で杏奈を見つめ返している。
「あなた……何者?」
「言ったはずだ。ここは時間城。わたしはその店主。人は『伯爵』と呼ぶ。もちろん、かりそめの呼び名にすぎないが」
「なぜ、わたしをレイディと呼んだの? あなた、何か知ってるの?」
「君が知りたがっていることならば、おそらくすべて」

杏奈は男に歩み寄った。心臓がどきどきし始めた。
伯爵と名乗る男に対する警戒心は強まる一方だ。だが、それでも彼の言葉には抗しきれない力があった。
謎がとける。紙袋の男が残した言葉の意味も……達哉の行方も？
「達哉、どこにいるの？」
杏奈は男を見上げて尋ねた。男は微笑んで答えた。
「最初の質問がそれか？　君が知るべき重要なことは他にあるというのに」
「答えてよ。知ってるんでしょ？　達哉はどこにいるの？」
杏奈は思わず声を荒らげかけたが、こらえて、言われた通りに腰を下ろした。
「かけたまえ」
伯爵は優雅に手を持ち上げて、椅子を示した。杏奈は思わず声を荒らげかけたが、こらえて、言われた通りに腰を下ろした。
「話してくれるのね？」
正面に座った伯爵に確認する。銀髪の男は曖昧な微笑を浮かべた。
「よかろう。ただ、君には少々、忍耐力が足りない。結論を急がず、わたしの話を最初から聞いてほしい」
「……わかった」
本当は、達哉の居場所を聞き出してすぐにでも飛び出していきたい。だが、ここは伯爵に従

っておくしかなかった。

伯爵は細い指を組み合わせて、不思議な言葉を口にした。

「パラレル・ワールドという概念を知っているかね？」

「……何？」

「この世のありようは一通りではない。もしも、あのとき違う行動を取っていれば、違う結末が待っていたかもしれない。そう想像してみることはないか。たとえば……あの雨の日、部活の練習をさぼって早く帰っていれば。君は車にはねられることはなく、別の人生を歩んでいた」

杏奈は膝の上に置いた手を握りしめた。

この男、なぜそんなことまで知っている。薄気味が悪かった。彼の言葉は杏奈の胸に痛みをもたらした。

それは、病院のベッドの中で何度も考えたことだ。あの日、部活がなければ。雨があんなに降ってなければ。もっと左右に注意して横断していれば。

後日、病室に見舞いにきた母がぽつりと漏らしたことがある。杏奈、十一月生まれだものねえ……大凶って出てたのよ。事故の日。テレビのワンロン占いで見たの。朝、出かける前に注意しておかなきゃと思ってたのに、言いそびれたの。占いって怖いわねえ……。

占いなんて信じてない。だが、母の言葉は杏奈の胸を突き刺した。

どうして一言、今日は気をつけなさいって言っておいてくれなかったの。そうすれば、いつ

もより車に注意してたかもしれないのに。
　ほんの少し気をつけるだけで、運命が変わっていたかもしれないのに。どうして……。
　考えれば考えるほど悔しさがこみあげて、幾夜も声を殺して泣いた。
「この世界において、君は車にはねられて選手生命を断たれた。だが、あの雨の日の時点から枝分かれした、別の世界があるかもしれない。君は車にはねられそうになったが、かろうじて避けることができた。もちろん、その後も陸上選手のままだ。全国的な注目を集め、オリンピックを目指してがんばっているかもしれない」
「妄想だわ」
　杏奈は低くつぶやいた。
「もしも……なんて、現実にはありえない。過ぎ去ったことをあれこれ考えるなんて、未練にすぎない」
「未練。そう、いかにも」
　伯爵は愉しげに笑った。
「だが、人は未練を断ち切れぬもの。誰もが愚かしい夢を見る。もしもあのときこうしていれば……あんな場所に行かなければ……あんなことを言わなければ……未練がましい妄想を抱いて、過去の自分を悔み続けるもの……」
「……なんの話なの？　そんなこと、達哉に関係あるの？」

「結論を急がないと約束したはずだが」
杏奈はむっとして、唇を結んだ。
「レイディ・スコルピオン。紙袋の男は君をそう呼んだだろう。それは、『向こう側』での君の呼び名だ」
「向こう側って……」
「パラレル・ワールドと考えてほしい。この世界と非常によく似た、しかし微妙にずれた世界。そこにもちゃんと珠間瑠市が存在し、君やわたしが存在している」
杏奈は目を伏せた。伯爵と視線を合わせるのが怖かった。
この男、狂ってる？　こんな馬鹿げた話を大真面目に話すなんて。
怖い。伯爵の話が怖い。荒唐無稽な妄想に違いないのに……鳥肌が立つ。
「その世界において、君と紙袋の男——キング・レオとは仲間だった。ある組織に所属し、同じ理念に従って行動していた」
「……嘘。なんでわたしが、あんな凶悪な殺人鬼と……」
杏奈は笑おうとしたが、どうしても笑えなかった。
怖い。震えが止まらない。この男は何を言ってる……？
「周防達哉とその仲間たちは、君たちの企みを阻止しようと戦っていた。彼らはよくやった。だが、所詮は人間——運命に逆らうことはできなかった」

伯爵は言葉を切った。杏奈はようやく目を上げて、彼の顔を見た。
邪悪な微笑。背筋が凍る。杏奈はあわてて目をそらせた。
「敗れたのだよ。彼らは」
「……」
「『向こう側』の世界は滅びの危機にさらされた。そのとき、彼らは一つの選択をした。リセット。すなわち、それ以前の十年間の出来事をすべて無にし、やり直そうという選択だ」
「そんなことが……できるはず……」
「彼らはそれを行なった。十年前の時点から枝分かれした、新たな世界を創造したのだ。それが『こちら側』。今、我々が生きているこの世界だ。『こちら側』の人々は、もちろん『向こう側』のことを知らない。自分たちがリセット後の世界に生きていることなど想像すらせず、平凡な日常を生きている。だが、保たれてきた均衡に異変が生じた。特異点……バランスを崩す者が現われたためだ。他ならぬ、周防達哉。リセットを行なった者たちの一人」
杏奈は伯爵の顔に目を戻した。
仮面を思わせる美しい顔を、食い入るように見つめる。頭痛がした。頭蓋の内側からハンマーで叩かれているような、ひどい痛みだ。
「彼は、他の人々のように忘却することを拒んだのだ。そのせいでリセットが完全に行なわれなかった。まったく異なる次元に存在するはずだった二つの世界に、融合が起こり始めた。現

在、『こちら側』の世界の人々が、『向こう側』の記憶に悩まされる事態が生じている。人はそれをデジャ・ヴュと呼ぶ。前世の記憶と思いこむ人もある」

杏奈の脳裏に、断片的な記憶が過っていく。

黛ゆきの。初対面のはずなのに、懐かしさを覚えた。初めて聞く名なのに、大事なものに思えた。

廃工場で化け物に向き合ったとき。戦いの高揚感を確かに知っていると思った。喧嘩すらしたことがないのに。

あれは——『向こう側』の記憶？　もう一人の杏奈。おぞましい殺人鬼と手を結び、達哉たちと戦った杏奈……。

「嘘……そんなの」

杏奈は首を振った。声に力が入らない。

「思い当たることがあるだろう？」

伯爵は冷笑した。

「紙袋の男はなんと言ったかね。この世界の歪みを正そう……今度こそマイヤの託宣を成就させよう……そう告げたはずだ」

「あなたは……」

何者。

すべての謎の答えを知り、手のひらの上で転がして楽しんでいる。とてつもなく邪悪で、冷たい意図を感じる。
杏奈は震えた。何より恐ろしいのは、この男に以前に会ったような気がすることだった。ありえない。こんな特徴的な人物に会ったことがあれば、忘れるはずがない。だが、この凍りつくような悪意には確かに覚えがあった。
デジャ・ヴュ。『向こう側』の記憶。『向こう側』の杏奈はこの男に会ったことがあるのだ。
「紙袋の男――須藤竜也は、望みを果たせず、科学館で死んだ。『向こう側』の彼とまったく同じく。結局、誰も運命からは逃れられない。時は繰り返す」
「……どうなるの？」
杏奈は握りしめた手にぎゅっと力をこめた。
「『向こう側』の世界は滅びたんでしょ？　だからリセットしたんでしょ？　また同じことを繰り返すとしたら、この世界は……滅びるの？」
「その通り」
軽い口調で、伯爵は答えた。
「『向こう側』とは違う形で、だが最終的には同じ道を辿って、この世界は消滅する。地中に深く埋められたアメノトリフネが浮上し、十二匹の龍が走る。選ばれた一握りの人間を除いて、人類は滅亡する……」

「アメノ……フネ？　選ばれた人間……？」
「いずれわかる。一つ違いがあるとすれば、今回はもうリセットはきかないということ。逃れる道はない」
「あなたは狂ってる」
杏奈は決めつけた。だが、自分の言葉をまったく信じてはいなかった。
狂人のとてつもない妄想。そう思えば、とりあえずは安心できる。だが、そうやって片づけるには、男の言葉には重みがありすぎた。
「達哉の居場所を教えて。彼はどこにいるの」
杏奈は立ち上がった。これ以上、この男と向き合うことに耐えられなかった。
テーブルに両手をつき、伯爵の顔を睨む。気力を振り絞って語気を強める。
「知ってるって言ったわよね。教えてよ……もう、ごたくはたっぷり聞いたわ。向こう側だの滅亡だの、そんなくだらない妄想はもうたくさん。達哉の居場所を教えてよ」
「アラヤ神社へ行くがいい」
伯爵はそう告げた。
アラヤ神社。学校の近くにある神社だ。古びた、ちっぽけな神社で、杏奈は何度も前を通りかかったことがあるが、鳥居をくぐったことはない。
「神社ね。達哉はそこにいるのね」

伯爵は答えなかった。自明のことに、答える必要などないと思っているようだった。

杏奈は踵を返し、部屋の扉を押し開けた。もう伯爵は引き止めなかった。

階段を下り、アンティークショップを通り抜けて外へ出る。そこは確かに、よく見知ったショッピングモール「ロータス」だった。

振り返ると、少々敷居が高いが別におかしなところは何もないアンティークショップ「時間城」がある。

あの男、何者なんだろう。普通の人間じゃない。なぜこんな場所で、こんな店を開いているんだろう。

だが、今考えるべきことは別にあった。杏奈は足を早めた。

達哉。今度こそ会える。

4

ロータスからアラヤ神社まで、かなりの距離があるが、杏奈は小走りに走り続けた。息が切れても、足を止めなかった。

やがて、石造りの鳥居が見えてきた。小さな神社だが、周囲の木々はよく手入れされている。鳥居をくぐり、石段を上る。境内はあまり広くない。街の喧騒から離れて、清々しい空気が満ちている。参道には石畳が敷き詰められ、その奥に古びた社殿が見える。

社の前に、一人の少年が立っていた。

こちらに背を向けている。参拝するわけでもなく、社の前にただじっと佇んでいる。

赤いライダースーツの背中を見たとき、杏奈は泣きそうになった。

やっとつかまえた。

「達哉!」

叫ぶと、少年は驚いたように振り返った。

杏奈は駆け寄って、呼吸を整えた。

「達哉……何……何やって……今まで……」

うまく言葉が出てこない。言いたいことは山ほどあるのに、なんと言っていいかわからなかった。

達哉は戸惑ったような顔で杏奈を見下ろしていた。瞳に影がある。杏奈がこれまでに見たこともない、苦しげな表情だった。

言葉を続けようと口を開きかけたとき、達哉はためらいがちな声でつぶやいた。

「……吉栄……か」

杏奈は目を瞬いた。何度も瞬いて、達哉の顔を見直した。

吉栄？　達哉はそんな呼び方しなかった。ただのクラスメートだったころならともかく、親しくなってからは「杏奈」と呼ぶか、ちょっとぶっきらぼうに「おまえ」と言うか、どちらかだった。

唖然としている杏奈を見て、達哉は気まずそうに目を伏せた。

杏奈は一歩後ろに下がった。視線はそのまま、少年からそらせない。やっと会えた嬉しさでのぼせていた頭から、すっと血の気が引いていく。

「あんた……誰？」

自分でも思いがけない言葉をつぶやいていた。

達哉は素早く杏奈に視線を戻した。険しいまなざしで見つめられ、杏奈はまた一歩退いた。

疑惑が確信に変わる。

違う。達哉と同じ顔をしていても、表情が全然違う。こんな人は、知らない。

「誰。あんた、達哉じゃない……！」

杏奈は叫んだが、達哉の顔をした少年は黙って歩き出した。

神社から出ていこうとしている。杏奈は駆け寄って彼の腕をつかんだ。

「答えて。あんた誰」

「……周防達哉」

少年は諦めたように答えた。杏奈は少年の前に回りこみ、行く手をふさいだ。

「達哉じゃない。わたしは達哉をよく知ってる。誰よ、あんた。なぜ達哉と同じ顔をしてるの

……」

イゴールの謎めいた言葉がよみがえる。現在の達哉様は、あなたが知っている達哉様とは違います。

あのときは、ただの比喩だと思った。達哉が行方をくらまし、杏奈の知らない世界に飛び込んでいってしまったことを、そういう風に表現しているだけだと思った。

だが、違った。比喩でもなんでもない。イゴールはごくシンプルに、事実を述べていたのだ。

今、杏奈の目の前にいるのは、達哉の顔をした別人だ。

一つの可能性に気づいて、杏奈は震える声で尋ねた。

「まさか、達哉、記憶喪失？　頭ぶつけて、記憶がなくなっちゃってる？　……ああ、でも」
この少年は、杏奈を「吉栄」と呼んだ。記憶が失われているなら、そんな名も出てこないはずだ。
あと、考えられる可能性としては……達哉の身体を誰かが乗っ取っている？　地球侵略を企む宇宙人とか？　そんな荒唐無稽な考えすら浮かんでくる。
達哉に会えばすべて解決すると思っていた。もつれた糸がほどけるように、いろいろな謎が明らかになるだろうと。だが、実際は逆だった。達哉と対峙した瞬間、杏奈はさらに深い迷宮に踏み込んでしまった。
達哉の顔をした少年は、かすかに眉を寄せたあの苦しげな表情で杏奈を見下ろした。心臓がぎゅっと縮まったような気がして、杏奈は胸を押さえた。
達哉と同じ顔で、そんな表情をしないでほしい。達哉はもっとふてぶてしかった。怒ったりむくれたりすることはあっても、そんなつらそうな顔を見せることはなかった。
そんな顔をしないでほしい。胸が……苦しくなる。
「――すまない」
少年はぽつりとつぶやき、杏奈から離れようとした。杏奈はまた彼の腕をつかんだ。
「答えになってない。あんた誰なの。ちゃんと話して」
「今は話せない」

「今はってどういうこと？　明日なら話せるの？　明後日ならいいの？」

少年は答えなかった。

「……あんた、ひょっとして、『向こう側』の達哉？」

おそるおそる、口にしてみた。途端に、少年の顔色が変わった。

「君は……」

つぶやいて、少年は唇をきつく噛んだ。杏奈は、自分の言葉が的を射ていたことを知った。

パラレル・ワールド。伯爵から聞かされても、現実味がなかった。どこかにこの珠間瑠市と同じ世界が存在していて、そこには杏奈も達哉も生きていて……そんなこと、とても信じられなかった。

だが、現に杏奈の目の前に、知らない達哉が立っている。同じ顔をして、同じ声で、杏奈をよそよそしく「君」と呼ぶ達哉がいる。

『向こう側』で、達哉と杏奈は敵対していた。伯爵はそう言った。では、この達哉は、わたしを憎んでいる……？

「まさか、君に記憶があるはずはない」

少年は険しい目で杏奈を見下ろした。何を言われたかわからず、杏奈は彼を睨み返した。

「君は『こちら側』の人間だ。『向こう側』を知るはずがない」

「……知らない。『向こう側』のことなんて」


Keh S.

「誰から聞いたんだ」
少年は苛立ったように声を荒らげた。
杏奈はもう一度首を振った。この少年は杏奈を敵視している……しかも、達哉の身体を乗っ取っている……そう思うと、迂闊なことは喋れなかった。
「──奴か」
少年は忌々しげにつぶやいた。それが伯爵のことをさしているのか、それとも誰か別の人物と間違えているのかわからなかったが、杏奈は黙っていた。
「『向こう側』のことは考えるな。もう絶対に……この件にはかかわるな」
少年の言葉に、杏奈は怒りを覚えた。
「かかわるなって、どういうこと。達哉を諦めろってこと？」
「違う」
「達哉はどこにいるの？　あんた、達哉に何をしたの？　あんたがここにいるってことは、まさか、本物の達哉が『向こう側』に飛ばされたってこと……？」
言ってしまってから、「本物」という言葉の無意味さに気づいた。
どちらが本物でも偽物でもない。この少年は『向こう側』の本物。杏奈が知っているのは、『こちら側』の本物。『向こう側』の本物になんて用はない。杏奈が求めている達哉は、たった一人きりだ。

「そうじゃない」
「説明して。何がなんだかわからない」
「わからないままでいいんだ」
「勝手だわ」
「すまない」
どうしても、話す気はなさそうだった。意志の強さは、どちら側の達哉も同じらしい。
「いつから入れ代わってたの？『こちら側』の達哉と」
「……」
「時計台で助けてくれたのは、あなたね？『罪を償う』って言ってたのも、あなただったのね？」
「……ああ」
「罪って何？『こちら側』の達哉を乗っ取ってしまったこと？」
「それだけじゃない」
「もっと恐ろしいことをしたの？」
不吉な予感に、心が震えた。
「達哉は……わたしの知ってる達哉は、無事なの？　それだけ教えて」
「……無事だよ」

「帰ってくるの？」
「必ず」
「達哉は絶対に約束を破らなかった」
杏奈は真っ直ぐに少年の目を見つめた。
「あなたもそう？　信じてもいいの？」
少年はたじろいだようだった。はっきり答えず、唇をきゅっと結んでうつむいた。
――違う。こんなの達哉じゃない。
怒りと悲しみがこみあげてくる。こいつのせいで……こんなやつのせいで、杏奈が好きだった達哉が消えてしまったなんて。
「返してよ。達哉、返してよ」
杏奈は少年に詰め寄った。
「あんたなんかいらない。わたしが会いたいのは、『こちら側』の本物の達哉よ。達哉はあんたみたいに女々しい顔してなかった。人と話すとき目をそらしたりしなかった。いつでも真っ直ぐ前を見てた。あんたなんか、元の世界に帰って。本当の達哉を返してよ！」
達哉の顔をした少年は顔を背けて応えた。
「……約束する。必ず、『こちら側』の達哉を返す」
「本当ね。破らないわね」

「……バラの花との約束は、必ず守るさ」
少年がいきなり奇妙な言葉をつぶやいたので、杏奈は驚いた。
彼は苦笑して続けた。
「絵本だよ。王子は旅に出るけど、結局自分の星に戻る。バラとの約束を守るために。バラは……王子にとってただ一つのバラだから。他のものとは換えられない、大切なバラだから」
杏奈は意外な思いで少年の顔を見上げた。
百八十センチを超える長身をライダースーツに包んだ男が口にするには、似合わない台詞だった。だが、滑稽な気はしなかった。彼がその言葉をずっと大切にし続けてきたことが、なんとなく感じられた。
「ロマンティストね」
「……いや」
「こっちの達哉はきっと、絵本なんて読んでなかったと思う。そんなタイプじゃないから。達哉が読んでた本なんて、バイク雑誌ぐらいしか思い浮かばない」
「俺もそうだよ。本当は。ただ……」
少年は微笑んだ。初めて見せた、優しい顔だった。
「友達が教えてくれた」
「絵本のことを？」

「……そう」
「女の子？」
「いや」
瞳がまた翳った。
杏奈は、この少年に対する敵意がだんだん薄らいでいくのを感じた。
彼の表情から感じ取れるのは、喪失感だった。何よりも大事なものを失った人間の、絶望と孤独だった。
たぶん、この人はこちら側の達哉よりずっと凄絶な経験をしているのだ。煮えきらない態度も、翳りのある表情も、彼の弱さのあらわれではない。むしろ、その逆。そう気づいた。
大事な人が死んだのだろうか。一生会えないところへ去ってしまったのだろうか。恋人？　それとも、彼に絵本のことを教えてくれた友達？
「……ねえ」
杏奈は口調をやわらげた。
「『向こう側』では、わたしとあなたは敵対してたんでしょう？」
「……」
「だったらわたし、『こちら側』のわたしでよかった。達哉と仲良くなれてよかった」
少年は一瞬、つらそうな顔をした。杏奈の言葉は、彼の心を深く抉ったようだった。

『こちら側』の世界を大切に思うなら、もう『向こう側』のことは考えないでくれ。俺のせいで、世界が壊れかけている。『こちら側』の人たちが『向こう側』に気づき始めると、それだけ揺らぎが大きくなる。だから、どうか忘れてくれ。『こちら側』の違和は、必ず元に戻す。それだけは約束する」
「わかった。最後に一つだけ、聞いてもいい？」
少年は不安そうに杏奈を見た。杏奈は思い切って尋ねた。
「『向こう側』のわたしは、走ってる？」
少年は怪訝そうな顔をした。杏奈は自分の右足を指で示した。
「わたし、陸上の選手だったの。短距離やってて、これでも結構優秀だったのよ。でも、交通事故に遭ってね。足、駄目になった」
「……」
「『向こう側』ではどうなの？　やっぱり同じ？　わたし、事故に遭って選手やめてるの？」
少年は躊躇したようだった。一呼吸分のためらいの後、ぎこちなく首を横に振り、答えた。
「走ってるよ。『向こう側』では事故はなかった。君はずっと陸上選手として活躍してる。俺は陸上のことはよくわからないが……いい記録を次々に出してるって聞いた」
「……そう」
杏奈はうなずいた。少年は杏奈と目を合わせなかった。

「良かった。そう聞くと、なんだかほっとする。変ね。わたしとはまったく関係ない話なのに……どこかでまだ走ってる自分がいるんだと思うと、少し嬉しい」

少年は杏奈から目をそらせたまま、踵を返した。

「ありがとう。達哉」

杏奈の言葉にも、振り返らなかった。石段を下り、鳥居をくぐって去ってゆく。杏奈はしばらくその後ろ姿を見送っていた。

彼が嘘をついたことはわかっていた。

杏奈は少しズルをした。最初から答えのわかっている質問を彼に投げかけたのだ。彼がどう答えるか、試したくて。

少し考えればわかる。『向こう側』の杏奈は、紙袋男のような連中と手を組み、よからぬ企みに加担していたらしい。ずっと陸上選手を続けているなら、そんなことにはならないはずだ。『向こう側』でも、やはり同じように事故は起きたのだ。杏奈は走れなくなって自暴自棄に陥り、紙袋男などに近づいてしまったに違いない。「こちら側」の杏奈が、やはりヤケになって学校をサボり、クラブに入り浸って遊び歩いていたのと同じように。

よく似た二つの世界。同じ町に同じ人が住み、少しだけ違う人生を歩んでいる。しかし杏奈の人生は変わらなかった。どちらも同じ、灰色の日々。杏奈がオリンピックに出場したり、日

本記録を塗り替えたりする世界は、どこにもない。
だが、達哉の嘘は嬉しかった。彼は杏奈を傷つけまいとしてくれたのだ。
『こちら側』の達哉と同じなら、きっと嘘をつくのは苦手だろうに。
杏奈はゆっくり石段を下りた。無茶を続けたせいだろうか、足が重かった。
アラヤ神社まで駆け続けたときは、気が昂ぶっていて意識しなかったのだが、現在の杏奈の足は激しい運動に耐えられるほど丈夫ではなかった。右足はほとんど上がらず、階段を下りるのに苦労した。
杏奈は唇を噛み、転ばないように一歩一歩階段を下りた。
かっこ悪い。口の中でつぶやく。涙がにじんで、石段がぼやけた。

*

「お姉さま!?　お姉さまですか!?　ご無事なんですね……ああ良かった……お姉さまにもしものことがあったら……わたし……」
語尾は、しゃくりあげるような声にまぎれてしまった。
ノリコからの電話である。アラヤ神社を出て、これからどうしようか考えているところへかかってきた。
元気そうな様子なので、杏奈もとりあえずほっとした。この泣き声だけはどうにかしてほし

かったが。
「今どこにいるの？」
「家です。自宅。父も母もわたしのことを死ぬほど心配してて、わたしが帰ったらもう大喜びで、今夜はお寿司を食べに連れてってくれるって！　お姉さま、ロータスにあるがってん寿司って知ってますか。うちは家族でよく行くんです。あまり高くなくて、おいしいんです！」
「……お寿司はどうでもいいから、助かったときの状況を聞きたいんだけど。廃工場で何が起きたか、覚えてる？」
「白い光がぱーっと射して……龍が崩れたところまでは覚えてるんですけど、その後はさっぱり。気絶しちゃったみたいです」
　杏奈の記憶と同じだ。
「気がついたら、自宅の近くの公園にいたんです。ベンチで寝ていたんです。周りに人がいなくて良かったです。誰かに見られたら恥ずかしかった」
「ということは、あんたはあの男に会ってないの？」
「あの男？」
「片目を隠した、銀髪の……」
「誰ですか？」
　では、ノリコは時間城には連れてこられなかったのだ。

伯爵の企みがますますわからなくなる。なぜ杏奈だけをあの部屋に連れていったのか。「向こう側」のことを教えたのは、なぜなのか。

「……どう思う？　誰がわたしたちを廃工場から連れ出したんだと思う？」

ノリコは少し沈黙をおいてから、自信なさそうに答えた。

「やっぱり……見回りにきた警備の人とか……警察とか……」

「だったら、救出した被害者を公園なんかに放置するはずない」

「……そうですね。まさか山尾さんが改心して戻ってきて……」

「ありえない」

「でも、それじゃ誰が……」

しばらく沈黙が続いた。杏奈は、伯爵のことを話そうかどうか迷ったが、黙っておくことにした。あんな得体の知れない人物のことを教えても、ノリコを怖がらせるだけだろう。

「ノリコ、当分は外に出ないほうがいい。お寿司もお預けにして」

「どうしてですか？」

「山尾に姿を見られたら面倒くさいことになる。あいつは、わたしたちが廃工場で死んだと思ってるはずだから」

「あ……はい。でも……それじゃ、学校は？」

「学校？」

「月曜は登校しようかなって思ってたんですけど……テストが近いし……部活もあるので……」
杏奈は額を押さえた。この状況下で、まだこれまで通りの生活を続けようとするノリコは、よほど度胸があるのか、鈍感なのか、どちらかだ。
「あのね、山尾はわたしたちを殺そうとしたのよ。生きて逃れたことがわかれば、今度こそ本気でかかってくる。わたしたちを消さなきゃ、自分の悪行がバレるんだから」
「……そうですね」
「殺されたければ、学校でも寿司屋でも行くのね。わたしは知らないから」
「そんな……」
ノリコはまた泣き声になった。
「警察に届けましょう。山尾さんの本性をみんなにバラせば、あの人きっと逮捕されて……」
「警察が信用できる？　自慢じゃないけど、わたしは山尾よりずっと素行が悪い。食い違う証言をすれば、信用されるのは山尾のほうよ」
「それじゃ……どうすれば……」
杏奈は考えこんだ。
ノリコを一人で自宅に置いておくのは、あまりにも不安だ。もしも帰っていることが慶子にバレたら、ひとたまりもない。
「……一緒にいたほうがいいわね。しばらく、うちに泊まる？」

「え⁉　いいんですか！」
ノリコの声が嬉しそうにはずんだ。状況がわかっていないらしい。
「遊びじゃないの。しばらく家に帰れないかもしれない。親にもちゃんと口止めしといて」
「はい！」
「家を出るところを見られたりしないよう、気をつけて」
「わかりました！」
元気な返事をして、ノリコは電話を切った。
杏奈は自分も自宅に戻って、ノリコを待つことにした。親の無関心がありがたい。娘がどんな厄介に巻き込まれているか、父母は少しも知らずにいる。
自室の鍵をかけて、ベッドに倒れこんだ。目を閉じると、アラヤ神社で出会った少年の顔が思い浮かぶ。達哉と同じ顔。でも、まるで別人の表情。
『こちら側』の達哉よりも大人びていた。深い憂いを抱えて、たった一人きりで耐えているような、あの瞳のせいだ。あれは、喪失の悲しみを知っている目だ。
杏奈は、いつだったか父親と交わした会話を思い出した。
父はほとんど家にいない。仕事に没頭して、家庭のことは妻に任せきりだった。娘が学校をさぼって遊び歩くようになったとき、初めて、何か父親らしいことをせねばと思ったらしい。

突然、杏奈を書斎に呼びつけて説教を始めた。

最近、悪い友達と遊び歩いてるそうだな。事故で走れなくなって、つらいのはわかる。だが、そんなことで挫けてどうする？　世の中には、もっと苦しい思いをしている人だってたくさんいる。歩けなくても、目が見えなくても、明るく生きてる人たちがいるんだぞ。恥ずかしくないのか……。

杏奈は笑った。そうしたら、いきなり殴られた。

父には絶対にわかるまい。夢をもったことのない人間は、夢を失うことの意味を知らない。挫折を嗤うのは、決まって、挫折を知らない人間なのだ。他人との比較で自分を慰めるなんて、杏奈にはそんな傲慢なことはできない。

『向こう側』の達哉は、何を失ったのだろう。彼が犯した罪とは、リセットを不完全なものにしてしまったこと？　だったら、彼が負うべき罰は何？

続いて思い出したのは、小憎らしい伯爵の顔だった。

あいつは達哉の居所を正確に知っていた。やはり、ただの妄想狂ではなかったということだ。彼の言葉、どこまで信じてよいのだろう。向こう側……世界の破滅……すべて本当のことなんだろうか？

十二匹の龍が走る。確かそう言っていた。ワンロン占いは、十二匹の龍を誕生月のシンボルとしている。ワンロン……ジョーカー……向こう側……すべては一つの糸で繋がっている？

一時間後、ノリコがやってきた。大きなバッグを下げて、ニットの帽子をかぶって、サングラスをかけている。どう見ても、ただ悪目立ちしているだけだが、本人は変装のつもりらしい。

「……見つからなかった?」

「大丈夫です。つけられてないか、ちゃんと確認してきました」

杏奈はベッドに腰かけた。ノリコは床に正座して、心配そうに杏奈を見上げた。

その顔を見下ろしながら、杏奈はなんとなく自分に変化が起き始めているのを感じていた。

これまでの杏奈だったら、ノリコを呼び寄せて守ることなんて、きっと考えなかった。ノリコが襲われようが殺されようが、どうでもよかった。他人にはかかわりたくない。面倒なことはしたくない。それが杏奈のポリシーだった。

だが、今はそんな風に思えない。身体の内側から、不思議な力が湧いてくるような気がした。

なぜだろう。ノリコをトラブルに巻き込んでしまった罪悪感のせい? それとも――。

達哉が力を与えてくれた?

悲しくて、そして強い目をしていた。『向こう側』の達哉。あの目を思い出すと、胸が痛くなる。その痛みが、杏奈を動かす。

杏奈は足を組んで、スリッパを引っかけた爪先をゆらゆらさせながら言った。

「これからのことを考えよう。いつまでも逃げ回っていられないし、山尾と決着をつけないと」

「決着……って」
杏奈はバッグの中から携帯電話を取り出した。登録している電話番号は数件しかない。数少ない番号の中から、島崎光雄を選び出した。
七姉妹学園新聞部の一年生。お調子者の光雄は、「何か用事があったら、なんでも言いつけてください」と、半ば無理やり杏奈のケータイに番号を登録させたのである。これまでかけたことはなかったが、初めて役に立ってくれそうだ。
電話に出た光雄は、杏奈からだと知ると、ひっくり返りそうな声を上げた。
「杏奈さん!? 今、どこです? 家? うわー、心配してたんスよ! 時計台で倒れて病院へ運ばれたって聞いて……」
そんなこと、はるか昔に思える。
「大変なことが起きたんッスよ。落ち着いて聞いてください。二年の片山さんが急に暴れ出して、黒い車に連れていかれたんッス。我が新聞部が総力を上げて調べた結果、なんとクラブ・ゾディアックに……」
「知ってる。その件はもう片づいた」
「……え?」
光雄は間の抜けた声を出した。七姉妹学園新聞部は確かに優秀だが、このところの展開はめまぐるしすぎて、さすがの新聞部も追いついてこられないらしい。

「頼みたいことがあるの。詳しい事情は言えないんだけど、何も聞かずに引き受けてくれない?」
「そりゃもう、杏奈さんの頼みなら!」
光雄は調子よく言った。
「三年の山尾慶子を知ってる?」
「はい、もちろん」
「彼女の動きを伝えてほしいの。学校で何か不審なことをしてないか、放課後どんな行動をしているか、誰に電話してたか、わかること全部。彼女には、何も気づかれないように」
「……山尾さんが、どうかしたんッスか?」
「聞かないで。どう、頼める?」
「も、もちろんッス」
「わたしもノリコも、当分、学校には行かない。しばらく自宅に隠れてるけど、家にも帰ってない、行方がわからないってことにしてほしいの。そういう話を広めてくれる?」
「でも……新聞部員として、嘘を広めるのはちょっと……」
光雄はためらったようだが、杏奈が無言で待っていると、仕方なさそうに答えた。
「……わかりました。杏奈さんの頼みなら断れないッス。でもいったい、何を……」
「感謝するわ」
それ以上質問される前に、電話を切った。

あと、何かできることはないだろうか。しばらく考えこんだ。
ふと気づくと、ノリコがバッグからノートを取り出して膝の上に広げている。
「……何してんの」
「一応、勉強しておこうと思って。試験が近いので」
杏奈は脱力した。この期に及んで、勉強道具一揃い、持ってきたらしい。
ノリコは杏奈のあきれ顔を見上げて、弁解するように言った。
「わたし、先学期の成績悪かったから、今度はがんばらないといけないんです。特に歴史……樫原先生の授業、難しくって」
「樫原の授業なんて、わかるほうがおかしいのよ」
辛辣に言って、ベッドに横になった。
樫原明成は日本史の教師である。いわゆる妄想史観、トンデモ理論に取り憑かれており、すぐに授業を脱線して、超古代文明がどうとか、ユダヤの陰謀がどうとかいう話にもっていってしまう。生徒たちは、バカにして面白がるか、まったく相手にしないかの、どちらかである。
杏奈は、樫原のテストをたびたび白紙で提出し、教師を嘆かせた。
「でも、結構面白いですよ。樫原先生のお話。わたし、好きです。脱線しすぎて、日本史なのかなんなのかわからなくなっちゃうけど」
「ただの妄想狂よ。よくあれで教師がつとまる……」

言いかけて、杏奈は身体を起こした。
橿原の授業内容なんて、ほとんど覚えていない。ただ、彼がやけに目をキラキラさせて、珠閒瑠市に伝わる伝説について語っていたことを思い出した。杏奈は半分眠りながら聞き流していたが、確か、この街の地下に船が埋まっていて……という話だった。
伯爵の話にも出てきた。地下の船。
「ノリコ、そのノート見せて」
杏奈はベッドから下りて、ノリコのノートを奪い取った。ちまちました几帳面な字が並んでいる。橿原の授業は脱線が多すぎるので、普通の生徒はノートなどろくに取らずに好き勝手なことをしているものだが、真面目なノリコはいちいち橿原の話を書きとめていたようだ。
ほとんど日本史の授業内容とは関係のなさそうな単語ばかりだった。ノートをぱらぱらめくっていた杏奈の手が止まった。
アメノトリフネ。その文字が目に飛び込んできた。
「ノリコ、これ」
ノートの文字を指差す。ノリコはのぞきこんで答えた。
「あ、橿原先生のお得意ですね。アメノトリフネ伝説」
「これ何？　どういう意味？」
「えっと……確か、大昔に空から船がやってきて……それが珠閒瑠市の地下に埋まってて……

という話だったと思います。戦国時代のお殿様が船の上にお城を建てて、それが珠間瑠市のもとになったとか……」

さすが橿原の授業だ。さっぱりわからない。

杏奈はノートをノリコに突き返し、机の引き出しを開けた。引き出しの中は、お世辞にも整頓されているとは言いがたい。それをさらに引っ掻き回した。

「お姉さま？　何を探してらっしゃるんです？」

「名簿」

答えると同時に見つかった。七姉妹学園の全生徒・職員のアドレスを記載した名簿である。教師のページを開き、橿原の電話番号と住所を確認する。杏奈の家からさほど遠くない。

電話をしてみると、橿原はすでに帰宅していた。三年B組の吉栄と名乗ると、ひどく驚いたようだった。

「先生に質問したいことがあるんです。学校では聞けないんです。これからお宅に伺いたいのですが」

有無を言わせずまくしたてた。橿原は面食らったような様子で「それはかまわないが……」と答えた。橿原がうろたえているうちに、杏奈は電話を切った。

ノリコが目をぱちぱちさせている。

「どうなさったんですか、お姉さま。急にそんな熱心に……日本史に目覚めたのですか」

「ばか言わないで」
コートをつかんで、部屋を出る。ノリコもあわててついてきた。
階段を下りながら、ノリコはニットの帽子を深々とかぶり、サングラスをかけて怪しい変装を整えた。一応、用心しながら外へ出た。慶子が見張っている様子はなかった。
「どうしちゃったんですか。なぜ、櫨原先生に……？」
ノリコは聞きたがったが、杏奈は説明せずに足を速めた。バスに乗り込み、櫨原の家の近くの停留所で下りるまで、一言も口をきかなかった。
大通りを離れて、閑静な坂道を上っていく。珠間瑠市の中でも、特に高級住宅街として知られる地域だった。並んでいる邸宅は、広い庭をもつ豪壮なものばかりだ。
「櫨原のくせに、一等地に住んでるわね……住所からするとこのあたりなんだけど」
きょろきょろしながら、一軒一軒確認していく。すでに日はすっかり暮れている。街灯はついているが、薄闇の中で表札をいちいち確認するのは骨が折れた。
「ここじゃないですか」
ノリコがサングラスを下げながら指差したのは、ひときわ高い塀に囲われた屋敷だった。
杏奈は門の隙間から中をのぞいてみた。周囲の屋敷と比べても、特に目立つ立派な構えの洋館が見える。美しい花壇のある広い庭と、瀟洒な白壁の三階建の邸宅。杏奈は首をかしげた。
「いくらなんでも立派すぎる。あんな冴えない教師が、こんな家に住めるわけない。学校の給

料なんて、たかが知れてるし」

「でも、お姉さま」

ノリコは表札を示した。杏奈は目を近づけて、驚いた。確かに「櫺原」と書いてあった。

「なんで……あの櫺原が……」

思わず絶句してしまう。彼のイメージにあまりに合わない。いつも安っぽいシャツとよれたズボン、冴えないベストを着ている中年教師が、なぜこれほどの豪邸に住めるのか。

「まるで芸能人の家じゃない。なんで、あいつ……」

「ご存じないのですか、お姉さま」

ノリコは杏奈を見上げて言った。

「櫺原先生の奥様って、芸能人ですよ」

「……え？」

「女優の黒須純子ですよ。まさか、ご存じなかったんですか？　有名な話なのに」

杏奈は唖然とした。

確かに、自分が情報に疎すぎることを認めざるをえなかった。

＊

「あー……よく来てくれたね……」

二人をリビングに通して、檀原はそわそわしていた。
いきなり女生徒が二人、自宅まで押しかけてきたので、戸惑っている様子だった。しかも、一人は問題児の吉栄杏奈。もう一人はジョーカー化して学校を破壊した片山典子である。その上、ノリコは帽子とサングラスで怪しい変装をしている。檀原が逃げ腰になるのも、当然といえば当然だった。
　杏奈は腕を組み、無言で、部屋の様子を観察した。
　二十畳ほどの広いリビングルームに、革張りのソファとテーブルが置かれている。窓際には観葉植物が飾られ、アンティーク風のキャビネットには高そうな洋酒がずらっと並んでいる。インテリア雑誌のグラビアに登場しそうな部屋である。くたびれたセーターを着た檀原は、ひどく場違いな場所に迷いこんで途方に暮れているように見えた。とても、家の当主とは思えない。
「妻は仕事で出かけていてね……あー……すまない。わたし一人では、どこにお茶があるのかもよくわからなくて……」
「おかまいなく」
「片山くん、君は……」
「もう大丈夫です。ご迷惑おかけしました」
　ノリコはサングラスと帽子を取って、ぺこっと頭を下げた。

樋原はほっとしたように肩の力を抜いた。ジョーカー・ノリコが襲撃にきたと怯えていたのかもしれない。
「それで、君たちの用事というのは……？」
「先生に、質問があるんです」
杏奈は組んでいた腕をほどいて、座り直した。
「アメノトリフネについて、教えていただきたいんです」
樋原の目が大きく見開かれた。その顔が、嬉しそうにほころんだ。
「トリフネに興味をもってくれたのかい？　それで、わざわざ話を聞きに？　まさか吉栄くん、君がねえ……いや、すまない。君はまったくわたしの授業に興味をもってないように見えたから……やる気を出してくれたなんて、驚いたよ。嬉しいよ」
にこにこと、本当に嬉しそうに何度もうなずいている樋原を見ると、後ろめたかった。樋原の授業になんて、一片の興味もない。ただ、アメノトリフネについて聞きたいだけなのだ。
「よし、説明しよう。アメノトリフネというのはね」
樋原が張り切って話し始めたときだった。廊下のほうで物音がして、ドアが開いた。学生服の少年が顔をのぞかせた。
「ただいま……あ、すみません。お客様？」
「父さんの教え子が来てくれたんだよ」

檀原はちょっと自慢げだった。父さん、と言ったところを見ると、この少年は息子らしい。
杏奈は驚いた。檀原の息子は、くたびれた父親とは似ても似つかぬ美少年だった。
少年は杏奈とノリコに会釈をして、いったん奥へ引っ込んだ。
「息子の淳だ。高校三年だから、吉栄くんと同じ年だね。春日山高校に通っている」
杏奈は少年の美貌を思い返し、何か引っかかるものを感じた。
黛ゆきのに会ったときと同じだ。デジャ・ヴュ。初めて会った相手とは思えない。
これもやはり『向こう側』の記憶なのだろうか。檀原の息子と杏奈は、『向こう側』で知り合いだった……？
やがて再びドアが開き、淳が戻ってきた。トレイにハーブティーのポットとカップをのせて運んできた。
香りのよいカモミールのお茶を、杏奈とノリコに勧める。女の子よりも優雅な仕草である。
少なくとも杏奈にはとても真似ができない。
少年の美しい横顔を見つめて、杏奈は考えこんだ。
やはり、知っている。初めて見る顔ではない。それも、どこかで通りすがりに見かけたことがあるという程度ではなく……もっと深く知っているような気がしてならない。
杏奈の視線に気づいたのか、淳は顔を上げた。
「何か？」

「……ごめんなさい。どこかで会ったような気がしたから」
「ええ」
淳は驚いた様子もなくうなずいた。
彼にもやはり記憶があるのか。どきっとしたが、淳は静かな微笑を浮かべて続けた。
「よく言われるんです。前に会ったことがないかって、いろんな人から」
「……？」
「母に似てるんです。母は女優だから、テレビで顔を知ってる方が多くて。それで、僕のこともどこかで会ったような気がするらしいんです」
「……あ。ええ」
杏奈は一応、うなずいておいた。
そんな意味じゃない。確かにこの少年は母親に――女優の黒須純子によく似た顔立ちをしているが、杏奈のデジャ・ヴュはそんなことで説明がつくものではない。
ノリコが杏奈のほうをうかがって、フフッと笑い声を立てた。杏奈が美しい少年に気を取られたと思っているらしい。睨むと、あわてて神妙な顔に戻った。
淳が出ていくと、橿原が口を開いた。
「さて、トリフネについて説明しよう。そうだなあ、何から始めようかなあ……」
「手短に、わかりやすくお願いします」



「うん。まず、アメノトリフネというのはね」
橿原はテーブルの上にあったメモ用紙を引き寄せて、さらさらと文字を書いた。
天鳥船。
「漢字で書くとこうなる。日本神話に出てくる神様の名前だ」
「神……？　船じゃないんですか」
「説明するよ。天鳥船は、別名を鳥之石楠船神（トリノイワクスフネノカミ）という。伊邪那岐（いざなぎ）、伊邪那美（いざなみ）から生まれた神々のうちの一人で……伊邪那岐と伊邪那美のことは知っているかな？」
「……名前ぐらいは」
「なんだか頼りないね。この二柱の神は三十五の島と十四の神を生み、日本の基礎をつくった神様だ。天鳥船は二人が生んだ神々の一人。日本神話には、国譲り（くにゆずり）という場面があるんだが……」
「……」
「あー、つまり、葦原（あしはら）の中（なか）つ国を治めていた大国主命（オオクニヌシノミコト）に対して、高天原（たかまがはら）の神々が『その国をくれ』と言ったわけだ。最初、大国主は拒否（きょひ）したんだが、高天原は何度も使いを出した。最後に派遣（はけん）されたのが、建御雷之男神（タケミカヅチ）という雷（いかずち）の神様で、そのお供をしたのが天鳥船なんだ。なぜトリフネがお供になったかというと、古来、雷は船に乗って地上に下りるという信仰（しんこう）があったためで……」
「……よくわからないので、手短に」

「うーん、面白い話なんだがなあ。つまりまあ、簡単に言えば、アメノトリフネは船であり、同時に神でもある。雷神の神聖な乗り物としてとらえられていたということだ。だが、そんな建前上の解釈とは別に、この神話からはもっと深い意味を読み取ることができる。トリフネを文字どおり、空から飛来した船と考えたらどうだろう。宇宙から来た船。すなわちUFOだよ」

　櫨原は急に生き生きとし始めた。

　杏奈とノリコはそっと目配せを交わした。これでこそ櫨原だ。

「そうなると、高天原という名で呼ばれていた場所は、はるか宇宙の彼方の天体を指しているのではないかと想像がつく。神々とは、地球に降り立った宇宙人だったんだよ。彼らは巨大な宇宙船アメノトリフネに乗って地球にやってきた。そして、この珠閒瑠の地に降臨した。吉栄くん、戦国時代の武将、澄丸清忠の名は知っているね？」

「……いいえ」

「いかんなあ。郷土の歴史ぐらい、知っておかなければ。清忠は、現在、本丸公園がある場所に城を築いた人物だ。いわば、珠閒瑠市の開祖だね。彼がこの地に居を定めたのは、このあたりの地下にアメノトリフネが埋まっているという伝説があったためだ……というのが歴史学者の定説なんだが、わたしは別の考えをもっている」

「なんですか？」

「清忠は本当にトリフネ伝説を信じていたのだろうか？　いや、むしろ、伝説を流布させるこ

とにより言霊の力を借りようとしたのではないかと思うんだ」
「コトダマ……？」
「口に出した言葉は力をもつ。現代でも、何か不吉なことを言うと『縁起でもない』と叱られたりするね。あれは、言葉にすることで、不吉な事柄が実現してしまうことを恐れる心理だ」
「言葉にすると……実現する？」
神話だのＵＦＯだの武将だのでこんがらがっていた杏奈の頭の中に、稲妻のように一条の光が走った。
だが、手がかりを手繰り寄せる前に、その閃きは消えてしまった。後には、どうしても思い出せない夢のようなもどかしさが残っただけだった。
なんだろう。何がこんなに引っかかるのだろう。言葉にすると実現する……。
──七姉妹学園の呪いって知ってます？　校章をつけてると顔が崩れ。セブンスは呪われて。いろんな噂がホントに。珠閒瑠市に何かが。噂が現実化するような力が。
奔流のように、言葉が脳内をかけめぐった。杏奈は勢いよく頭を振った。
指先が凍るように冷たい。気分が悪い。なんだ、今のは。これも『向こう側』の記憶なのか。
『向こう側』でも、同じような話が交わされたことがあったのか……？
櫺原の熱のこもった話は続いている。
「戦国時代のことだ、今よりもずっと民衆は無知で、迷信深かった。地中深くに神話時代の船

が埋まってるなんて話も、たやすく信じたに違いない。人々の間でトリフネ伝説が繰り返し語られた。その言葉の力によって、本当に出現してしまったんだ。何もないはずの地下に――巨大な船が」

杏奈は大きく息を吸い込んだ。ますます気分が悪くなってきた。

噂が現実化する。地下の船……宇宙から飛来した……マイヤの神々……シバルバー……イン・ラケチは成就されねばならない。

頭の中にいくつもの言葉が明滅し、交錯する。杏奈の意志とはまったく無関係に。まるで、何者かが頭の中に囁きかけてくるかのように。宇宙から……電波だよ……電波電波電波……。

「清忠は望龍術を操って天下統一を目指したと言われている。トリフネ伝説は、彼の計画を実現させるためにどうしても必要だったんだ」

「望龍術!?」

杏奈は大声を出した。頭の中に響いてくる毒々しい声を振り払いたかった。

橿原は驚いたように杏奈の顔を見直し、うなずいた。

「そう。最近、ワンロン占いとかいって話題になっているね。もとは中国で生まれた風水の考え方だ。天帝から遣わされた十二匹の龍の動きを予測し、国運を占う秘術のことだ」

「十二匹の龍……」

「龍とは、龍脈。大地を流れる陰陽の気のことだ。家を建てたり、あるいは都市を造ったりす

るときには、この龍脈の流れを読んで、それに沿った造営をするのが吉とされている。本来はそういう前向きな使い方をするものなんだが、逆に、この龍脈を操ることによって、大規模な破壊を引き起こすことができる。いわば、裏の望龍術。清忠は、この邪術を極めようとしたらしい」

十二匹の龍が走る——世界は破滅へ向かう。杏奈は震えた。伯爵の禍々しい笑い声が聞こえてきそうだ。

橿原は、杏奈の様子を見て心配になったらしい。気遣うように言った。

「だが、清忠の野望は実現しなかった。周防辰之進という若者が彼の企みに気づき、彼を討ったからだ」

「……周防？」

「伝説によれば、周防謀反の際、一夜にして無気味な城が建ったとも、トリフネが浮上したとも言われている。周防の決断がもう一歩遅ければ、清忠の野望がかなっていたかもしれない。危ういところだったんだ」

「——龍は」

「え？」

「龍は、どうやったら動かせるんですか？　人間の力で、龍を走らせるなんてことが……？」

「龍は邪気を嫌う」

「だから、大量の邪気がひとところに集まれば、龍たちは暴れ始めるんだよ。たとえば戦争のような巨大な悪が生じると、龍脈に乱れが生じる……」

槶原はペンを弄びながら言った。

槶原は歴史上の例を挙げて説明し始めたが、もう杏奈の耳には入っていなかった。

珠間瑠市を覆う陰謀のかたちが見えてきた。誰かが、龍を走らせようと企んでいるのだ。龍を動かすための鍵は邪気――穢れ。ジョーカーと化した人々が狩り集められている理由は、おそらくそれだ。

連続猟奇殺人、ジョーカー、ワンロン占い。ばらばらだったパズルのピースが繋がる。恐るべき一枚の絵が見えてくる。凝縮された邪気が十二匹の龍を走らせ、世界は破滅に向かう。

だが、誰が、なんのために？　世界滅亡を望む人間なんて、どこにいる？

――選ばれた一握りの人間を除いて、人類は滅亡する。

伯爵はそう言った。世界が滅びた後も、生き残る少数の人がいるということ？　それは誰？

アメノトリフネ。天翔る船。地中に眠る、神々の乗り物。もしも、その船が本当に浮上したら。船に乗りこんだ人だけは脱出することができる。滅亡する世界から――選ばれた者たちだけの楽園へ。

途方もない話だった。到底、信じ難い。

「邪気って……たとえば、魔物とか、怪物とか、そういうものですか？」

ノリコが小さな声で質問した。櫃原はそちらへ顔を向けて答えた。
「そういうものも含まれるだろうね。というより、むしろ、人々の悪意が凝り固まって、邪気の濃度が高まった場所には、魔が引き寄せられる。邪気が邪気を呼び、魔が魔を呼ぶ。穢れがどんどん増幅していくんだ」
「お姉さま、廃工場の化け物って……」
ノリコは杏奈のほうを見た。顔が紙のように白い。余計なことを言うな、と釘を差そうとしたとき、櫃原が口を挟んだ。
「廃工場？　港南区のかい？」
杏奈はノリコを目で叱った。廃工場で起きた出来事を、教師に知られたら面倒なことになる。ノリコは反省したように視線を下げた。
櫃原は心配そうに身を乗り出した。
「あんな場所には近づいちゃ駄目だ。危険だからね」
「……はあ」
「あそこは邪気の吹き溜りだ。珠間瑠市の中でも特に危険なスポットだから、絶対に近づいちゃいけない」
櫃原の口調は別人のように力強く、真剣な響きがあった。杏奈とノリコは顔を見合わせた。
杏奈が尋ねた。

「どういうことですか？　廃工場に、何か……？」

「あそこは、昔の処刑場跡なんだ」

榁原は寒気を感じたように首の後ろを撫でながら答えた。

「清忠の時代、貧苦に喘いで一揆を起こそうとした農民を、あの場所で大量に殺戮したと言われている。そして謀反の際には、清忠自身の一族が同じ場所で殺された。江戸時代以降もずっと、処刑場として使われてきたんだよ」

まったく知らなかった。杏奈は廃工場に一歩踏み込んだときの嫌な感じを思い出し、鳥肌が立つのを感じた。

「維新後はしばらく空き地になってたそうだが、戦後、ある企業が買収して工場を建てることになった。反対の声が多かったというよ。ちゃんと神社を建てて鎮魂すべきだ、とね」

「……」

「だが、企業側は耳を貸さず、工事を強行した。これは噂だが、工事のとき、大量の人骨が出たらしい。しかし企業側はそれを隠してしまった。そんなものを届け出たら、工事に支障があるというのでね。ひそかに処分してしまったというんだ。ひどい話だよ」

「それじゃ……」

杏奈は喉が渇いていることに気づいた。ハーブティーで潤したが、ひりつくような渇きはおさまらなかった。

「工場が閉鎖されたのは……」

「さまざまな怪事が起きたからだ。工場内で化け物を見たという証言が相次いだ。ひとりでに機械が動き出したり、物が落ちてきたり、事故も多発した。結局、従業員がどんどんやめていって、工場は封鎖されてしまったんだ。当たり前だよ。あんなものはさっさと取り壊して、鎮魂の神社を建てるべきなんだ」

杏奈は、自分の身体がかすかに震えているのを自覚した。

数百年の時間をかけて、蓄積された怨念。人々の恨みと怒りが染み込んだ土地。それを無造作に掘り返し、工場を建て、最終的には封鎖してしまったのだ。

最悪。閉ざされた空間に、邪気がいよいよ凝集する。魔は魔を呼び、穢れは膨れ上がる——。

杏奈とノリコがあそこから脱出できたのは、本当に幸運だったのだ。伯爵は邪悪な人物に違いないが、あの場所から救ってくれたことだけは感謝しておかねばなるまい。もしもあのまま長時間過ごしていたら——考えただけでぞっとする。

杏奈は立ち上がった。

「もう帰るのかい？　じきに妻が帰ってくる。もう少し、ゆっくりしていけば……」

「いえ。お邪魔しました」

ノリコは黒須純子に会いたそうだったが、杏奈は彼女を急かして辞去することにした。

5

天野舞耶に電話してみたが、通じなかった。

ためらいながら、達哉にもかけてみたが、こちらもやはり通じない。克哉やうららの連絡先は知らない。杏奈は彼らに連絡を取ることを諦めた。

彼らも戦い続けているのだろう。祈るしかなかった。龍脈を操ろうとする者たちを止めることができるのは、彼らしかいない。

動きがあったのは、樫原の家を訪れた三日後だった。昼ごろ、島崎光雄から電話がかかってきた。

「頼まれてた山尾さんのことなんスけど……」

学校かららしい。背後で生徒たちの騒がしい声が聞こえている。

「今日、学校来てないんですよ」

「休み？」

「それが、ちょっとおかしくて」

光雄は声をひそめた。
「朝は、いつもより早く家を出たらしいんです。普通に制服着て鞄持って。部活があるから、早く行くって家族に言ってたらしいです」
「部活……？」
「嘘の口実だったようです。山尾さんは園芸部なんスけど、そんな朝早くから活動予定はないって園芸部の人たちは言ってます。とにかく、いつもより一時間ぐらい早めに家を出て、そのまま行方不明なんです。学校に来てないんです」
杏奈は携帯電話を握り直した。かたわらでノリコが、聞き耳を立てている。
「授業が始まる時間になって、先生が不審に思ったようです。山尾さんが無断欠席することなんて、これまでになかったそうですから。それで心配して、山尾さんちに電話したらしいんです。そしたら、とっくに家を出てるってわかって。今、ちょっとした騒ぎになってるんです。夕方になっても見つからなかったら、警察に届けることになると思います。……ジョーカー化したんじゃないかって噂も立ち始めてます。登校の途中で発症して、例の黒い車に連れていかれたんじゃないかって。山尾ファンの男子はみんな、彼女がジョーカー呪いなんかするはずないって反対してますけどね……」
杏奈は礼を言って電話を切った。
どう考えるべきだろう。慶子は確かにジョーカーに殺人を依頼したが、断られた。契約は成

立しなかったのだ。それでもジョーカー化するということはありえるだろうか？
いや、彼女は自分の意志で家族に嘘をつき、家を早く出た。登校前に、どこかに立ち寄るつもりだったのだ。
その時点では、学校を休むつもりはなかったのだろう。最初から休むつもりであれば、怪しまれることのないように連絡を入れているはずだ。慶子の性格から考えて、そういうことをおろそかにするとは考えにくい。
慶子の用事はそれほど時間のかかるものではなく、済ませてそのまま登校するつもりだった。しかし、何か異変が生じた……。
考えられることは一つだ。慶子は廃工場へ向かったのだ。犯人は現場に戻る。杏奈とノリコがどうなったか気になって、確かめるつもりだったに違いない。
慶子は、杏奈とノリコが廃工場で死んでいるものと予想していただろう。食べ物も水もなく、夜はぐっと冷え込むあの場所に閉じこめられたら、今日まで生きている可能性は限りなく低い。二人の死を確認するつもりで、廃工場に足を運んだのだ。
だが、二人はそこにいなかった。二人が逃げたことを知った慶子は、きっとパニックに陥っただろう。杏奈たちが証言すれば、慶子の悪行は明らかになる。杏奈だけなら大人たちに信頼されないかもしれないが、ノリコも一緒だ。申し開きは難しくなる。
自分の不利を悟って、逃げたのだろうか。どこへ？　着替えも所持金もなくて、逃げ回れる

はずがない。そのくらい、慶子にもわかっているはずだ……。
「廃工場……でしょうか」
ノリコも杏奈と同じ考えに至ったようだった。青ざめた顔で言った。
「山尾さん……わたしたちがどうなったか確認するために、廃工場に向かったのでは……」
「たぶんね。問題はその後よ。わたしたちが逃げ出したことに気づいて、どうするつもりなのか……」
「ひょっとして、まだ廃工場の中にいるのでは」
「……何?」
「山尾さん、あそこから出てこられなくなっちゃったのでは」
「どうして？　万が一、何かのはずみで鍵がかかってしまったとしても、あいつ鍵束持ってる」
「そういう意味じゃなくて……」
ノリコは唾を飲み込んだ。
「工場の化け物に捕まってしまったのでは……ひょっとすると……殺されてるかも」
杏奈は眉を寄せた。まさか、と言いかけてやめた。
自分が仕掛けた罠に陥るとは間抜けな話だが、可能性はある。慶子は、廃工場に化け物が出るという噂を、あまり真面目にとらえていないようだった。用心を怠って、不用意に中へ踏み込んだのかもしれない。

映画のようにはっきりと、映像が思い浮かんだ。杏奈たちの死を確認しようと、閉ざした鉄扉の向こう側へ声をかける慶子。返事がないので安心して、ゆっくり鉄扉を開ける。途端に、待ちかまえていた悪魔が襲いかかる……。

杏奈は身震いした。

「行ってみよう。廃工場へ」

「え……」

ノリコは目を見開き、激しく首を振った。

「駄目です。危険です。橿原先生がおっしゃってたじゃないですか、絶対近づいちゃいけないって」

「山尾が中で食われてるかもしれない」

言ってしまってから、自分の言葉のグロテスクさに吐き気を催した。獣に食い散らかされたような死体――反谷の死にざまを思い出す。

ノリコは泣きそうな顔になっている。

「だったら、警察に知らせればいいじゃないですか。廃工場に女の子が閉じこめられてるって通報すれば、きっと捜してくれる……」

「警察は当てにならない」

「だけど！　悪戯電話だと思われても、一応、廃工場の見回りぐらいはしてくれるはずです。

実際、山尾さんは行方不明なんだから……」

「わたしが行きたいの。放っておけないの」

自分の台詞とは思えなかった。以前の杏奈なら絶対に言わない言葉だ。放っておけない……なんて。

達哉なら、きっと同じようにする。他人任せにせずに、自分でなんとかしようとする。彼に笑われる臆病者にはなりたくなかった。

達哉が無事に戻ってきたら、きっと驚くだろう。杏奈、どうかしたのか……からかうように、そう言うかもしれない。

達哉のことを考えると、勇気が湧いてきた。杏奈は電話を取って、切ったばかりの光雄にかけ直した。

「一つ、教えてほしいことがあるんだけど」

「なんッスか？　山尾さんのことなら、まだ手がかりは全然……」

「武器が手に入る店、どこか知らない？」

「は!?」

光雄の声が裏返った。よほどびっくりしたらしい。

「ど……どうしたんッスか!?　喧嘩ッスか!?」

「違うわよ。ちょっと必要なの。理由は聞かないで。子供だましのナイフなんかじゃ困るの……

本格的に戦えるやつ。できれば、お祓いがしてあるとか鍛えてきてるとか、何か霊的なパワーのありそうなやつがいいんだけど」
光雄はしばらく絶句していた。いくら新聞部員でも、さすがにこんな頼みごとは無理だったか……と思いかけたとき、光雄のあきれたような声が聞こえた。
「杏奈さん、悪魔退治でもするんスか？」
「理由は聞かないでって言ったはずだけど」
「わかりました。オレもあんまり詳しくはないんスけど……カス校の友達から聞いた情報があります」
「カス校？」
春日山高校のことだ。確か、榲原の息子もそこに通っているということだった。
「カス校の地下に、防空壕があるんですよ。今は使ってなくて封鎖してあるんスけど、時々、肝試しをやることがあるらしいんです。あの学校、荒っぽいヤツが多いから。体育会なんかが、新入生歓迎儀式とかいってやるそうッス。武器を持たせて、中をぐるっと一周してこいとか」
「……くだらない」
「それを言っちゃおしまいです。中、結構ヤバいらしいんスよ。変なものがウヨウヨしてるって。霊感のあるヤツなんかが入ると、マジで発狂寸前になるらしいッス。オレも友達から聞いただけだから、どこまで信じていいかわからないんですけどね……昔、その防空壕で死んだ人

が大勢いたから、何か怨霊みたいなのが巣食ってるって話なんス」
廃工場と似たような状況だ。杏奈がこれまで知らなかっただけで、一見平和な珠間瑠市にも、危ないスポットはいくつか存在していたのだ。
「その肝試しのときに使う武器を、あちこちで調達してるんです。まあ、みんな金ないから、普通は安い武器で済ませます。バットとか、木刀とか。ちょっとマシな場合でも、サバイバルナイフとか」
「……よくそんな装備で、怨霊だらけの防空壕に入る気になるわね」
「体育会ッスから。ただ、中には武器オタクみたいなヤツもいて、そういう連中は武器に凝ります。そういうヤツらがどこで調達するのか、聞いたことがあるんス」
「教えて」
「市内に何軒かあるらしいんですけど、オレが聞いたのは二軒。一軒は平坂区のカメヤ横丁にある東亜ディフェンスってサバイバル・ショップで、モロにミリタリー・オタク御用達みたいな店だそうッス。もう一軒は……これは意外なんですけど、宝石屋です」
「宝石？」
「鳴海区に、プレアデスっていうホテルがあるんです。そこのショッピング・アーケードに入ってるパパラチャっていう宝石屋が、武器の開発をやってくれるそうッス。オーダー次第で、どんな武器も手に入るとか……ただし、むちゃくちゃ高価です。高校生じゃとても手が出ない

くらい。だから、肝試しに使われたことはほとんどないんですけど、以前に一人だけ、すげえ金持ちの息子がいて、なんかすごい武器をオーダーしたらしいんです。そいつ、群がる悪霊をばたばたなぎ倒して史上最短タイムで肝試しをクリアし、カス校の伝説となったそうラッス」

「伝説……ね」

今一つ、信憑性がなかったが、光雄はムキになって「本当ッス」と主張した。

電話を切って、杏奈は考えた。ミリタリー・オタク御用達と、謎の宝石屋。どちらに行くべきか迷ったが、「群がる悪霊をなぎ倒し……」という光雄の話が気に入った。これから戦う相手は、人間ではない。悪魔どもだ。特別な武器を手に入れたほうがいい。

杏奈が部屋を出ようとすると、ノリコがくっついてきた。

「お姉さま、どちらへ？」

「買い物よ。その前に、資金調達」

「資金って……」

杏奈は階下の様子をうかがい、足音をしのばせて階段を下りた。都合よく、母親は外出していた。

杏奈は、母の寝室のドアを開けた。父母はもう何年も前から寝室を別にしている。

「お姉さま、何を……」

ノリコが不安そうな声を上げている。杏奈はかまわず室内に入り、ベッドサイドに置いてあ

る小さな箱を手に取った。
カメオの細工がある、繊細な小箱。母が大事にしているジュエリー・ボックスだ。開くと、ダイヤの指輪やエメラルドのイヤリング、ルビーのペンダントなどが入っていた。
「お姉さま!?」
杏奈の意図を悟って、ノリコが震え上がった。縋り付くように杏奈の腕をつかみ、必死の説得を試みる。
「ま、まさかそれを持ち出すつもりですか!? 駄目です、絶対駄目です、泥棒なんて!」
「黙ってて」
「いくらお姉さまでも、見逃すわけには!」
「いいのよ」
杏奈は、箱の中のジュエリーを洗いざらい自分のポケットに移した。
「どうせ、しまってあるだけなんだから。活用したほうが宝石のためよ」
「だけど……だけど!」
「あとで母には話すから。必要だったんだって、ちゃんと話すから」
杏奈は、ずっと小さいときにも同じようなことをしたと思い出した。
母の財布から金を盗ったのだ。小遣いが足りなかったわけではない。杏奈の親は、言えばいくらでもくれたのだから。ただ、母の気を引きたいだけだった。

だが、杏奈の目論見は成功しなかった。金に頓着しない母は、千円札が抜き取られていることにしばらく気づかなかった。杏奈が仕方なく罪を告白すると、顔をしかめて「嫌な子」と言った。それだけだった。

苦い笑いがこみ上げる。叱られなかったことが悲しくて、杏奈はこっそり泣いた。

結局、わたしは成長してないいんだろうか。小学生のときと、同じことをしてる……。

だが、今度は親の気持ちを引くためではない。自分のすべきことを果たすためだ。

鳴海区は、最近開発が進んでいる臨海地区である。まだ建物もまばらな埋立地に高速道路が走っている風景は、荒涼とした未来都市を思わせる。

ホテル・プレアデスは、埠頭の近くに建てられた最新のホテルだった。杏奈とノリコがエントランスを入ると、美貌のベルボーイが恭しいお辞儀で迎えた。

ロビーの天井は高い吹き抜けになっており、開放感がある。中央に噴水がしつらえられ、その周りを生花が飾っている。左手に一段高いフロアがあり、海を一望するティールームになっていた。客はほとんどがビジネスマンである。外国人の姿も多く、英語が飛び交っている。

ノリコは気後れしている様子だったが、杏奈はかまわず先へ進んだ。案内板でパパラチャの場所を確認し、ショッピングアーケードに入った。

高級ブランド店がずらっと並んでいる。バッグ、靴、服、食器、どれも杏奈にもノリコにも

縁のない店ばかりだ。パパラチャはその中の一軒だった。
ドアを開けて、中へ入る。円形の広いフロアにショーケースが並び、宝石が陳列されている。客はいなかった。
一番奥のショーケースの向こうに、男がいた。長い髪をオールバックにし、銀縁の眼鏡をかけている。ワイン色のスーツに、派手なタイ。髪はほとんど白髪だが、さほど年寄りにも見えない。年齢不詳の人物だった。
男は杏奈たちのほうへ一瞬視線を向け、慇懃な会釈をした。どう見ても場違いな女子高生にも、表情を崩さない。杏奈はつかつかと歩み寄った。
「いらっしゃい」
男は、店の雰囲気と比べるとずいぶん砕けた声で言った。ショーケースの上に置いた手には、指が折れそうな重量級の指輪が幾つもはめられている。
「武器が欲しいの」
杏奈は男の目を真っ直ぐ見つめて言った。男は瞬き、ゆっくり手を顎に持っていった。やはり表情は変わらない。
「——なるほど。肝試しかい？」
「用途を言う必要はないと思うけど」
「失礼」

男は一瞬、笑いをこらえるような顔をした。

「もちろん、余計なことは聞かない。お望みどおりの武器を誂えよう。ただ——念のため言っとくが、うちは一流の武器しか扱わないぜ。新たな武器を開発するためには、まず材料が必要だ。さらに、開発のための費用がかかる。決して安くはない。それでもうちの武器が必要なのかどうか、よく考えた上で……」

杏奈はポケットに手を突っ込んで、宝石をつかみ出した。男の眉がぴくっとつり上がった。

ひとまとめにしてショーケースの上に置いた。

「長話は嫌いなの。費用はこれで払う。どう、足りる？」

男はいくつかの指輪の中から一つを取り上げ、透かし見た。ピンクとオレンジの中間ぐらいの色の石が嵌まっている。杏奈には宝石の名はよくわからないが、綺麗な石だった。

男は感嘆のため息とともにつぶやいた。

「パパラチャだね」

「……？」

「知らずに持ってきたのかい？　サファイアの一種だ。キング・オブ・サファイアとも呼ばれる、最高級の石だよ。その微妙な色合いから、シンハリ語で蓮を意味するパパラチャという名がついた。この店の名もそこからいただいたんだ……わたしが愛してやまぬ石だ」

杏奈はじっと男の顔を見ていた。そんなに高価な宝石とは思わなかった。女子高生がこんな

ものを持ちこむなんて、疑われて当然だ。どこで盗んだか、問い詰められるのを覚悟した。
　しかし、男は他の宝石をすべて杏奈に返し、パパラチャの指輪を愛おしそうに手の上で弄びながら言った。
「結構。引き受ける。最高級の武器を作ってみせよう」
「二時間以内」
　第一関門突破を内心で喜びながら、杏奈は言った。男は目をむいた。
「無茶を言うな。ウェポン・デザインがどんなものかわかってるのか？　既製の武器を土台にするにしても、それをさらに加工し、特殊効果を加え、使用者の体格や癖に合わせて……」
「そんな悠長なこと、してられないの。とにかく強力な、悪魔を片っ端からぶち殺せる武器が欲しいの。二時間以内で」
「無茶だと言ってるんだ」
「できないならパパラチャ返して」
　杏奈は片手を突き出した。ジュエリー・デザイナーは反射的にピンク・オレンジの宝石を握りしめた。
　よほどこの宝石に執着があるらしい。彼は苦しげな表情で応えた。
「……わかった。やってみよう。だが、最高級のオーダーメイドというわけにはいかないぜ。既製品の流用で我慢してもらう」

「かまわないわ」
杏奈とノリコは奥の部屋に通された。見慣れぬ機械が並び、半分解体された武器が放り出してある。おもてのジュエリーショップとは大違いの、殺風景な部屋だった。
腕や指の長さを測られ、握力や背筋力を調べられた。杏奈もノリコも見かけは細いが、スポーツをやってきただけあって、筋肉はついている。デザイナーは満足げに言った。
「結構だ。あんたには銃、そっちのお嬢さんには剣を作ってやろう」
「剣？　そんなのいらない。銃を二丁のほうが強力でしょう？」
「人を殺すつもりならな」
デザイナーは物騒な笑みを浮かべた。
「だが、悪魔退治だろ？　だったら両方揃えておくのがセオリーだ。銃が効かないやつ、剣じゃ切れないやつ、いろんなタイプがいる」
「……わかった」
この男、どうもただの宝石屋ではなさそうだ。こんな裏家業に手を染めているからには、それなりに悪魔について知識があるのだろう。杏奈はデザイナーの言葉を信頼することにした。
二人はジュエリーショップをいったん出て時間をつぶし、約束の時刻に店に戻った。デザイナーは会心の笑みを浮かべて二人を待っていた。
「できてるぜ。試してみるかい」

杏奈はデザイナーが差し出した銃を手に取った。
玩具のように軽く、頼りなかった。手のひらに少し余るぐらいの大きさである。せいぜい女性の護身用という感じで、悪魔退治という大仰さは感じられない。しかも、グリップのところに可愛らしいルビーが飾られていた。
「……大丈夫なの、これ？」
「疑うのかね」
「なんだか軽すぎて……」
「扱いやすさを重視したんだよ。反動もほとんどない。悪魔退治に肝心なのは、銃よりむしろ弾丸だ。霊力のある弾丸を適切な速度で正確に射出する。それが基本だ」
男はテーブルの上に弾丸を並べて見せた。何やら呪符のような模様が刻まれ、先端には水晶が埋めこまれている。
「特別サービスだ。そいつを使えば、まあ大抵の化け物は一撃でぶっ倒れるはずだ」
「ありがと。ノリコのは……？」
ノリコは細身の剣を握っていた。
「ものすごく軽いです。重さなんてないみたい……」
おっかなびっくり振り回している。子供が遊んでいるようにしか見えない。
「見ちゃいられんね」

ジュエリーデザイナーは苦笑して、ノリコに握り方や構え方を指導した。まだ腰が引けているが、少しずつさまになってきた。

「健闘を祈る」

薄笑いまじりのデザイナーの声を背に、杏奈とノリコはショップを出た。

*

光雄から連絡があった。

慶子の行方はいまだにわからないということだった。警察に届け出て、捜索してもらうことにしたらしい。だが、ジョーカー化した人間が行方不明になる事件はまだ続発しており、警察がどのくらい本腰を入れてくれるかはわからないということだった。

やはり、他人任せにはできない。杏奈はバッグに拳銃を忍ばせて、港南区へ向かった。ノリコも、鞘に収めた剣を布でくるんで、しっかり胸に抱えている。まさか中身が霊力を秘めた剣だとは、誰にもわかるまい。

先日と同じ道を辿って、廃工場を目指す。あのときはどんよりした曇り空だったが、今日は快晴だ。空には雲一つ見えなかった。

しかし、廃工場に近づくにつれて、空の色が微妙に変化し始めた。雲がないのは相変わらずだが、青空にぼんやりと紗がかかったような気がする。例えるなら、広い空に一滴の墨を垂ら

したような――微妙な翳りが生じていた。

意識していなければ、ほとんどわからなかっただろう。現に、周囲を歩いている人は何も気づいた様子がなく、ごく普通に笑ったり喋ったりしている。

杏奈とノリコは人目を避けて鉄条網をかいくぐり、廃工場の敷地内へ入った。

一歩歩くごとに、足が重くなるような気がした。前回はそんなことはなかったのだが、今日は建物から漏れ出す邪気をはっきり感じる。錆びた鉄の臭いに混じって、かすかに腐臭が漂っている。肌がピリピリする。

先日の記憶のせいで、恐怖が増幅しているのか。あるいは、あの体験のおかげで杏奈にも霊感らしきものが芽生えてしまったのか。それとも――一番考えたくない可能性だが、この数日の間に邪気が力を増しているのか。

「お姉さま……」

ノリコも同じ緊張を感じているらしい。不安げに杏奈を見た。

「怖いの？」

「……はい。少し」

「帰りたければ、引き返してもいいわよ。あんたに強制はできない。これは、わたしが決めたことだから」

「いいえ」

ノリコは布をといて、剣の鞘をはらった。宝石店で見たときは、玩具みたいに頼りない剣だと思ったが、あらためて見ると刃が濡れたように光って美しい。
「お姉さまを一人にはできません。わたしも行きます」
杏奈は工場の鉄扉に手をかけた。先日は施錠されていた扉である。慶子の持っている鍵束がなければ開かなかったはずだ。だが、そっと引くと、扉は重い音をたてながら開いた。
「開いてる」
「やっぱり山尾さんが……？」
杏奈は銃を構えて、工場の中へ一歩踏み込んだ。
前回とは様子が変わっているのが一目でわかった。鈍感な杏奈でも思わず吐き気をもよおすほどの瘴気が立ちこめている。そのせいで、建物全体が微妙に歪んでいるように思える。
かすかな物音がした。杏奈は息を殺し、耳をすませた。
床下だ。ガチャガチャと、何かを打ち合わせるような音……低い呻き声……笑い声……無気味な音が重なり合って響いている。
杏奈は立ちすくんだ。もう一歩がどうしても踏み出せない。腕にざーっと鳥肌が立っていた。
カス校の肝試しについて、光雄が言っていたことを思い出す。霊感のあるヤツなんかは発狂寸前になるらしいです……あれは、誇張でもなんでもなかった。確かに、こんな空間に放りこまれたら人は正気を失うだろう。立ちこめた邪気があまりに強烈すぎて、理性では受け止めら

れない。
「お姉さま……」
ノリコの声が震えていた。杏奈は、踵を返して逃げ出したい気持ちをこらえ、つとめて平静な声を出した。
「行くわよ」
「……はい」
互いに背中を庇い合うようにして、先へ進んだ。
床下の気配が濃くなる。侵入者に気づき、喜んでいるものたちがいる。数百年の間、凝り続けてきた怨念。土に染みこんだ怒りと憎しみ。邪気は邪気を呼び、魔は魔を呼ぶ……。
挫けそうになる。たった二人で、扱い慣れない急ごしらえの武器で、こんな邪悪なものたちに太刀打ちできるのだろうか？
「お姉さま、あれ……」
ノリコが声を上げた。杏奈は素早くそちらへ顔を向けた。視線の先に、鞄が落ちている。
「山尾さんのでしょうか？」
「……たぶんね」
恐怖がますます募る。やはり慶子はここへ来たのだ。鞄を捨てて逃げ出さなければならないようなことが起きたのだろうか。それとも……？

杏奈は鞄に近づいて、かがみこんだ。よく調べようと手を伸ばしたときだった。
空気を切り裂くような甲高い声が響いた。
杏奈は顔を上げた。何もなかったはずの空中に、いきなり黒い影が出現した。それはたちまち、人面をもつ巨大な鳥の姿に変わった。
女の顔をしている。細くつり上がった目と、尖った鼻。赤い口が開き、長い牙が見えた。牙をむき出して笑っている。笑い声は耳が痛くなるほど甲高かった。
黒い翼が広がる。考える余裕はなかった。杏奈は両手で銃を構え、トリガーを引き絞った。
両腕に、痺れるような手応えがあった。女の顔をもつ鳥は、のけぞって地に落ちた。
杏奈はさらに弾丸を撃ちこもうとして、考え直した。魔物はすでに息絶えている。その身体はたちまち、水分を失ったように乾いて縮こまった。後に残ったのは、黒く焦げたような醜い塊だけだった。
確かにこの弾丸には魔を倒す威力がある。宝石屋の言葉ははったりではなかったわけだ。杏奈は額に手を当てた。身体は凍えそうなのに、汗をかいていた。
「お……お姉さま……」
ノリコは腰を抜かしている。杏奈が手を貸して、立たせてやった。
「……見えたんですか？」
ノリコからの質問で、ようやく気がついた。前に閉じこめられたときには、杏奈には悪魔が

見えなかったのだ。視認することができたのは、白い光が射した瞬間だけだった。
なぜ、今度は見えるのだろう。杏奈の能力が変化したのか、それとも、連中のほうがより強い力を得て実体化したのか……。
いずれにせよ、見えない敵に怯えるよりはマシだ。杏奈は深呼吸をした。
「ザコね、今のは」
わざと、そっけない口調を装った。恐怖をノリコに悟られてはならない。それは伝染して、たちまち増幅する。二人とも正常な判断力を失ったら、生きてここから出られまい。
「とにかく、今度はこっちにも武器があるんだから。怖がることない」
「はい」
ノリコは素直である。杏奈の言葉を絶対だと信じている。勇気を取り戻したようだった。
ゆっくり奥へ進む。何度か襲われたが、いずれも大した敵ではなかった。武器の扱いにも慣れてきた。難なく倒して、例の扉の前まで来た。
杏奈とノリコが閉じこめられた場所である。杏奈はノリコに下がっているよう合図して、扉に手をかけた。
ここもやはり鍵はかけられていなかった。開いた瞬間、杏奈は一歩後じさった。
見えない手で押し返されたような圧力を感じた。閉ざされた空間に凝集した邪気は、それほど強く、圧倒的な力を貯えていた。



杏奈はためらった。先に進むのが恐ろしかった。
この闇の中には、これまでとは比べ物にならない強烈な穢れが存在している。おそらく、この廃工場に満ちている邪気の中心……小さき魔を引き寄せては食らい、その力を取り込んで成長してきた悪の根源。
どうする。引き返すか。
そのとき、ノリコが口を開いた。
「何か、聞こえます」
「……え？」
「女の人の声みたい」
杏奈は耳をすませた。確かに聞こえてきた。女のつぶやき。何を言っているのかは聞きとれない。闇の奥で、声をひそめて何か囁いているようだった。
「山尾さんでしょうか？」
そんな気もするし、違う気もする。声の主を聞き分けられるほどの音量ではなかった。
悪魔かもしれない。だが、慶子だったら。
「行ってみよう」
杏奈は銃を握り直し、思い切って闇の中へ踏み込んだ。
想像していた以上にすさまじい瘴気だった。呼吸が苦しくなる。闇が濃度をもって、ねっと

り絡みついてくるかのようだ。ノリコは右手で剣を構え、左手で杏奈の服の裾をしっかりつかんでいる。
声は前方から聞こえてくる。ぶつぶつと独り言を言っているようだった。慶子の声に似ているような気もした。
杏奈は足を止め、思い切って声をかけた。
「山尾？」
つぶやきがやんだ。
杏奈は、銃を握った手が汗ばむのを感じた。失策だったか……声の主は慶子ではないのか？
ふいに視界が明るくなった。杏奈は目を細めた。
青白い火が空中にともっている。一つ、二つ、三つ……鬼火のような光が次々に増えて、周囲を照らしていく。
その中央に、女が座っていた。慶子だ。制服のまま、ぺたんと腰を落としている。
いつもは丁寧に編んでいる髪が、乱れて身体を覆うように広がっている。慶子は目を上げた。
髪の間から、かろうじて顔が見えた。
眼鏡のレンズは片方割れていた。その奥で、瞳が異常な輝き方をしている。杏奈はぞっとした。
彼女が正気でないことは一目でわかった。
「ス……オ……」

慶子の唇が開き、そこからかすれた声が漏れた。
「え？」
「ス……オウ………ココへ……」
杏奈は驚いた。すっかり狂気に陥ったように見えた慶子の口から、意味を成す言葉が聞き取れたので。
ほっとした。慶子は無事だ。錯乱しているようだが、達哉のことを気にかける正気は残っている。これなら、なだめて連れて帰ることができる。
「達哉は……」
言いかけて、彼女がこの呼び方を嫌がっていたことを思い出し、刺激しないように言い直した。
「周防くんは大丈夫よ。心配いらない。山尾……立てる？　帰ろう。みんな心配してるから……」
「スオ……ウ……」
呻き声とともに、慶子は立ち上がった。足に力を入れたようには見えなかった。まるで、上から糸で吊られたかのような不思議な動きだった。
慶子は顎を引き、杏奈を睨みつけた。口の端がつり上がり、壮絶な微笑を形作る。笑顔というより、内側から強い力で筋肉を操られ、無理やり引き上げられたかのような表情だった。
「ス……オウ……裏切リ……」

「え？」
「タツ……ノ……」
眼鏡が落ちた。双眸が大きく見開かれた。
虹彩が異常な——血の色を帯びた。杏奈は飛び下がった。慶子はけたたましく笑い出した。
「裏切リ者……周防辰之進ノ首ヲ！　我ガ心踏ミニジリ……アンダ……」
「辰之進？」
鸚鵡返しに問い返した。
榧原の話に出てきた名前だ。戦国の奸雄清忠の企みを阻止した若者。達哉の名に似ているのが面白くて、覚えていた。
「どうしたの……山尾……？」
「お姉さま！」
ノリコが悲鳴を上げた。
慶子の髪が翻る。その顔が醜く歪み、般若の相に変じた。
鬼火の青い光に照らされて、慶子の身体は陽炎のようにゆらいで見えた。
否。周囲の光のせいばかりではなかった。彼女の肌も青白い輝きを放ち始めた。周囲に渦巻いていたどす黒い邪気が、彼女の身体へ吸収されてゆく。
慶子ではない。杏奈はようやく理解した。

身体は山尾慶子のもの。だが、すでに彼女の精神は崩壊し、すさまじい力をもった悪魔に乗っ取られている。彼女が口にした周防とは、達哉ではなく辰之進。数百年前の人間だ。今、慶子の身体を操っているのは、辰之進と同じ時代に生きた者。数百年の時を越えて怨嗟の声を上げる者……辰之進に裏切られ、恨み続けてきた者……？

橿原は言った。この場所は、昔、刑場として使われていた。最初は、反抗する農民たちを虐殺。そして、清忠の一族をここで粛清……。

「……清忠の……？」

杏奈は銃を構えることも忘れてつぶやいた。

きりきりと、女の目がつり上がる。もはや山尾慶子の顔ではない。顔面が変形してゆく。引きつった目尻から、涙のような血が流れた。歯をむき出して咆哮する。

「父上ノ……恨ミ……晴ラサ……デ……！」

空間が歪んだ。

数百年の憎悪が、怨恨が、一点に凝固し圧倒的な磁場を形成する。杏奈は意識を正常に保つのに必死だった。気をゆるめれば、たちまち吸い込まれる。魂を抜かれ、この強烈な怨嗟の渦に呑み込まれてしまう。

一瞬、燃え上がる火の色を見た。飛び交う鬼火ではない。もっと熱い、もっと激しい、大火の色。

幻だ。必死に自分に言い聞かせる。

火など出ていない。狂乱する女の記憶が、鮮明な映像となって杏奈の脳裏に流れこんできたのだ。

燃えているのは城だった。珠閒瑠城。清忠の夢の砦。

炎上する城の周りで、大勢の人間が戦っている。矢が飛び交い、白刃がきらめく。兵士たちの叫びと、馬の嘶きが交錯している。足元には、地を埋めつくすほどの屍の山。

女が走っている。長い髪を振り乱し、素足で。戦場のただ中を駆けてゆく。薄紅の着物は点々と血で汚れていた。

女は泣いている。涙は血の色。だまされた……裏切られた……あの人はわたくしを利用しただけ。父上を討つための手駒として……。

兵士が数人、声を上げて襲いかかった。長い髪をつかまれ、引きずり倒される。土に顔を押しつけられ、帯が乱暴に解かれる。首筋に白刃。

女の喉から呪詛が漏れる。許さない。この恨みは決して消えない。逆臣、周防辰之進。数千年の後の世までも、おまえを決して許さない。

杏奈ははっと我に返った。醜く面変わりした慶子の顔が、すぐ目の前にあった。

鉤のように曲がった指が伸びる。まっすぐ喉を狙ってきた。杏奈は必死に首を振った。もつれ合うように倒れこんだ。慶子は杏奈の身体の上に馬乗りになり、喉に手をかけようとする。

杏奈は銃を握った手を振り上げた。夢中で、慶子の顔を殴りつける。骨を打つ嫌な感触があった。

それでも女はたじろがなかった。痛覚などないのかもしれない。指に力をこめて杏奈の喉を絞め上げようとする。

杏奈はトリガーに手をかけた。相手はまったく銃を気にしていない。位置は絶好。引き金を引けば、至近距離で頭を撃ち抜く。

だが、ためらいが生じた。魔に変じているとはいえ、これまで倒してきた魔物とは違う。慶子の身体なのだ。撃てば、絶対に慶子は助からない。

パニックに襲われた。どうすればいい。殺されるのはいや。殺すのもいや。

呼吸ができない。頸動脈が塞き止められて、意識が朦朧とし始めた。

一瞬空白になった杏奈の心に、すさまじい恨みに彩られた思念が流れこんできた。絶望、怒り、恐怖……ありったけの負の感情が入り交じった、燃え上がるほどの怨念が杏奈を圧倒した。

苦しい……許さない……なぜ、こんな目に……なぜ、わたしが……?

杏奈は必死に心を閉ざし、流入する感情を締め出そうとした。しかし、すべてを呪い滅ぼそうとする姫君の怒りは容赦なく流れこんできて、杏奈が自分の心の奥底にしまいこんでいたものを揺さぶった。

なぜ、わたしが？　なぜ、こんな目に？
走ることがすべてだった。それを失ったとき、わたしの世界は終わった。家も、学校も、薄闇に閉ざされているようにかすんで見えた。生きている実感なんてまるで感じなかった。
金田も反谷も学校の連中も家族も……死んでしまえばいい。わたしを不幸にしたこんな世界なんて、滅びてしまえばいい。みんな、死んでしまえばいい！
杏奈は歯を食いしばった。
荒れ狂う嵐にとらえられそうになる。姫の怒りに引きずられて、杏奈の心の中にどす黒い霧が広がってゆく。死んでしまえ……滅びてしまえ……何もかも終わってしまえ。
そのときだった。雷撃のように一つの名前が思い浮かんで、杏奈は目を見開いた。
――ゆきの。
なぜ、そんな名前を思い出したのかはわからない。だが、杏奈はかろうじて、失いかけていた正気を取り戻した。
考える余裕はない。自然に身体が動いた。
杏奈は必死に、慶子の手を振り払おうともがいた。しかし、食い込んだ指は離れない。慶子の口が開き、化け物じみた黒い舌がのぞいた。
死ぬわけにいかない。こんなところで。
ゆきのが救ってくれたのだから。絶望に身を任せてはいけないと教えてくれたのだから。

「や……やあああ！」

少々情けない、甲高い声がした。ノリコだ。

慶子の肩ごしに、杏奈は見た。ノリコが慶子の背中から斬りつけていた。彼女なりの、必死の掛け声とともに。

パパラチャのデザイナーの腕は確かだった。ノリコの一撃は腰が引けていたが、鋭い剣先は正確に慶子の身体を傷つけていた。

深手を負わせることはできない。が、一瞬だけ慶子の気がそれた。杏奈の首を絞め上げていた手がゆるんだ。

杏奈はその隙を逃さなかった。渾身の力で慶子をはねのける。活動を停止しかけていた肺に空気が流れ込み、杏奈は激しく咽せた。

黛ゆきの。なぜ彼女に会ったとき強烈なデジャ・ヴュを感じたのか、ようやくわかった。あれは『向こう側』の記憶。『向こう側』の杏奈も、『こちら側』と同じく走る夢を奪われ、絶望に沈み、心を閉ざしていた。そんな杏奈を救ってくれたのはゆきのだったのだ。

『向こう側』のゆきの。そして『こちら側』の達哉。達哉にあれほど惹かれたのは、彼がどことなくゆきのを思い出させたからかもしれない。言葉や態度は違っても、杏奈の絶望を見抜いた点では同じだった。運命を恨み、殻の中に閉じこもろうとしていた杏奈に、手を差し伸べてくれた……。

ノリコの悲鳴が響いた。杏奈は我に返って銃を握り直した。ノリコは剣を胸に抱いて、がたがた震えている。

慶子の身体が跳ね上がり、ノリコに向き直る。

「きゃああああ」

杏奈を救おうと斬りつけた一撃が、精一杯だった。ノリコにはこれ以上戦うのは無理だ。

杏奈はとっさに前方の床に向けて銃を撃った。

銃声が慶子を振り返らせた。杏奈は銃を構えて後じさった。

狙いを定める。しかし、引き金にかけていた指は自然に離れた。慶子めがけて撃つことは、どうしてもできなかった。

いっそ、身の毛のよだつような怪物に変じてくれていれば良かったものを——醜く表情を引きつらせているとはいえ、慶子の顔をし、七姉妹学園の制服を着た姿に向けて銃を撃つのは不可能だった。

ゆきのなら——達哉なら、こんなときどうするのだろう？　あの人たちなら、慶子をも救おうとするだろうか？　彼らなら、そんな奇跡みたいなことができるのだろうか？　杏奈には？

杏奈は、誰かを救うことができるのだろうか？

「ノリコ、逃げて」

杏奈は慶子に狙いをつけたまま言った。

「え……？　なんて……？」
ノリコが震える声で聞き返す。杏奈は声を荒らげた。
「逃げろって言ってるの。あんたなら、こいつより速く走れるでしょ」
「お姉さま……！」
杏奈は覚悟を決めた。
杏奈にできるのは、せいぜいこれだけだ。ノリコの夢を奪わないこと。杏奈に憧れて陸上部に入ったこの子を、最後まで走らせてやること。
『向こう側』の杏奈は、ゆきのに救われるまで、死んだも同然だった。だったら、『こちら側』で次のランナーにバトンタッチして死ぬのも、悪くはない。ゆきのも……そして達哉も、きっとわかってくれる。
「ダメです、お姉さま！　一緒に逃げなきゃ……！」
「さっさと逃げろって言ってるの！」
慶子が飛び掛かろうと身を沈めた——その瞬間だった。
激しい衝撃が襲った。杏奈の身体はいったん宙に投げ出され、床に叩きつけられた。
何が起きたのかわからなかった。杏奈は床に転げ、あせって顔を上げた。
慶子も、そしてノリコも同じように床に転がっていた。地の底から沸き上がるような、腹に響く低い音が聞こえてきた。

突如、床が裂けた。

杏奈の目の前で、まるでケーキでも切り分けるようにすっぱりと、床が口を開いたのだ。杏奈はあわてて壁際に身を寄せた。

地震だろうか？　いや、地震の揺れではなかった。何かとてつもない力が地底から飛び出してきたかのような……。

床の裂け目から、強烈な光が迸った。杏奈は目を細め、目の前に手をかざした。思い出したのは、前回この工場に閉じ込められたときに見た白い光だった。怪物の身体を粉々に砕いたあの光……伯爵がまた現われたのだろうか？

光の中に、人影が立っていた。杏奈は目を瞬きながら、その輪郭を見極めようとした。

まぶしすぎる。直視できない。だが、おぼろげに見て取ることができた。

おかしな格好をしている。時代劇みたいな、鎧に兜。長い太刀を手にしている。

慶子――いや、慶子だったものの喉から呻き声が漏れた。怒り。憎しみ。そして恐怖。

現われたのは若武者だった。絵巻きから抜け出したかのような。

まさか。杏奈は息を呑んだ。

この世のものではありえない、清浄な光に包まれたこの人は。

周防辰之進？　姫を裏切り、清忠の野望を阻止した青年……？

「ス……オ……！」

慶子の喉から絶叫が迸った。杏奈は素早く視線を走らせ、ぞっとした。慶子の顔は、さらにすさまじい変貌を遂げていた。血走った目、むき出した歯。理性を手放し、獣じみた怒りにとらわれた顔だった。

しかし、青年は少しもたじろがなかった。静かな、悲しげな瞳で慶子を――いや、その身体に取り憑いた姫君を見つめている。

「姫よ……」

聞こえた声は優しかった。杏奈は壁に背をもたせかけ、呆然としてその声に耳を傾けた。達哉の声に、少しだけ似ているような気がした。

「我らの時はとうに尽きている。心を惑わし給うな……」

「父上ノ……恨……ミ……」

「……我が手」

青年はゆっくり片手を目の前にかざした。

「一族の命を断った罪に穢れている。裏切りの証しは消えぬ……幾百年の後の世までも」

「キサマ……」

「姫よ。すべての責めは私が負う。この者たちを苦しめることは許されぬ。成仏されよ」

慶子の身体が躍り上がった。銀色の鎧兜をまとった武者は、すばやく太刀を振り上げた。

杏奈は思わず顔を背けた。慶子が斬られた……そう思うと、身の毛がよだった。

おそるおそる視線を戻すと、倒れている慶子が見えた。もはや、ぴくりとも動かない。しかし、杏奈が想像していたような致命的な傷は見当たらなかった。ノリコが斬った背中の傷が見えるだけだ。

杏奈は慶子に近づき、身をかがめた。かすかだが、呼吸が感じられる。死んではいない。

杏奈は顔を上げた。青年が太刀を収めたところだった。

何か言おうとしたが、声が出なかった。若者がまとう光はまばゆく、清浄だった。工場内に凝集していた邪気が、強い風に吹き払われたように消えてゆく。

青年の身体が、徐々に薄れていくように見えた。杏奈はあわてて声を上げた。

「待って！」

しかし、その声は届かなかったようだ。瞬きする間に、辰之進の身体は見えなくなった。

「お姉さま……」

ノリコが這い寄ってきた。衝撃のあまり腰が抜けているらしい。涙目で杏奈を見上げて、呻くように言った。

「な……なんですか、今の……ご、ごらんになりましたか……それとも、わたしの幻覚……？」

杏奈は答えず、倒れている慶子の身体に手をかけ、助け起こした。ノリコもあわてて手を貸した。

表情が元に戻っている。恨みと絶望に凝り固まった醜い表情は消え、ただ気を失っているよ

うだった。

杏奈ははっとした。辰之進が振るった太刀は、現実の慶子の身体を傷つけることなく、迷える姫君の魂だけを断ち切ったのだ。

辰之進への妄執を抱いたまま死に、この地で死んだ多くの人々の恨みを吸い寄せて、もはや原型を留めぬほどの怨念の塊と化していた姫を、彼は一太刀で解き放ったのだった。

「どうしましょう……」

ノリコが途方に暮れたように尋ねた。慶子のことを言っているのか、それとも床にぱっくり口を開けている裂け目のことを言っているのか不明だった。とりあえず、杏奈は答えた。

「山尾は病院へ運ぼう。いろいろ聞かれるだろうけど、わたしが適当に誤魔化すから、あんたは話を合わせて」

「はい」

「この亀裂は……」

杏奈は慶子から離れて、裂け目をのぞきこんでみた。しかし暗がりがどこまでも続いているだけで、底は見えなかった。浅いのか深いのかもわからない。

「ただの地震じゃなさそうね」

「わたしもそう思います。なんていうか……床ごと空中に持ち上げられたみたいな……」

「……まさか、とは思うけど」

杏奈は慶子の片腕を自分の肩にかけた。ノリコも反対側の腕を同じようにして、二人で引きずるように慶子を運ぶことにした。完全に意識を失っている慶子の身体は、見かけよりもずっと重く感じられた。

言いかけた言葉を、杏奈は呑み込んだ。ノリコがそれ以上聞かなかったのは、たぶん、彼女も薄々予感していたからだろう。

アメノトリフネ。

伝説の巨大船が、いよいよ浮上してしまったのだ。

*

街は大混乱に陥っていた。

倒壊した建物に巻き込まれたり、あせって避難する群衆に押し倒されたりして怪我を負った人々が、あちこちで助けを求めている。地獄図だが、杏奈とノリコにとっては幸運でもあった。血に汚れた衣服や傷を負った身体を、見咎められずにすむ。何よりも、慶子について言い訳を考える手間が省けた。大通りに出るとすぐに、数人の人が駆け寄って手を貸してくれた。

とりあえず慶子を病院へ運び、建物の下敷きになったのだと嘘をついて手当てをしてもらうことになった。ノリコが斬りつけた傷は、調べればすぐに刀傷と見抜かれるだろうが、目下のところは医師たちも多忙を極めている。怪我人は次から次へと運ばれてくるのだ。いちいち、

怪我の原因について問いただされることはなかった。
慶子を医師たちにゆだねて、杏奈とノリコは病院を出た。
不安にかられた群衆が騒ぎ合っていたが、何が起きたのか理解している人はほとんどいなかった。地震……原発事故……戦争……ポールシフト……流言飛語が飛び交い、不安をかき立てていた。
「お姉さま、これからどうしますか？」
ノリコが言った。
交通機関は全面的にストップしている。どこへ行くにしても、歩くしかない。杏奈は珠間瑠市の地図を思い浮かべた。市はほぼ円形をしており、蛇行する七夕川によって二分されている。中央が蓮華台、その周囲を四つの区が取り囲み、海沿いに鳴海区がくっついているような形である。
蓮華台には七姉妹学園がある。伯爵のいる時間城も、達哉に会ったアラヤ神社も同じ区域だ。とりあえず、蓮華台を目指すことにした。
ノリコと二人で歩き続けるうちに、状況が正確にわかり始めた。
珠間瑠市は現在、空中に浮かんでいる。信じ難いことだが、事実だった。
鳴海区は切り離されたが、その他の地区は丸ごと浮遊していた。市の外周は切り立った崖になっており、とても近づけない。

杏奈の恐れた通りだった。アメノトリフネ伝説がいよいよ実現したのだ。トリフネの浮上とともに、その上に乗った市が持ち上げられたのだった。

本丸公園に突然、城が出現したらしい。そんな噂も聞こえてきた。激震が街を襲うと同時に、地中からせり上がるようにしてそびえ立ったという。かつてその場所に建っていた珠閒瑠城がよみがえったのだ。

途中、演説している宗教団体をいくつか見かけた。悔い改めよと説く者、ひたすら祈れと言う者、天国が近づいていると喜んでいる者、さまざまだった。

『向こう側』でも、これと同じことが起きたのだろうか。杏奈は戦慄した。『向こう側』の達哉たちは戦いに敗れ、世界は死滅した。彼らはリセットを試み、十年前から分岐した世界を創造した。

現在までのところ、『こちら側』の世界も同じ道を辿っている。もうリセットはないと伯爵は言った。世界はこのまま滅びを待つしかないのだろうか？

「お姉さま、あれ……」

ノリコが声を上げた。見ると、老女が地面に倒れている。起き上がろうとしているが、足が痛むらしい。逃げる途中で転んでしまい、足を挫いたのだろう。

「助けましょう」

ノリコは杏奈の返事も待たずに走って行った。この非常時にも人助けを優先しようとするのは、ノリコらしい。杏奈も近づいて行って、老女に手を貸した。

品のいい女性だった。ノリコと杏奈ににこにこしながら礼を言い、立ち上がった。しかし——

彼女がひょこひょこ足を引きずりながら歩き出したとき、ふいに鋭い音が聞こえた。

銃声だ。老女は声も上げず、一瞬助けを求めるように手を伸ばして、崩れるように倒れた。

銃を抱え、軍服を着た男たちが四人、こちらに近づいてきた。

いずれも軍帽を目深にかぶっているので、表情は見えない。杏奈はあわててノリコを引き寄せ、庇うようにして男たちを睨みつけた。

自衛隊？　それとも、外国の軍隊？　なぜ、こんな連中が街に……？

男たちは杏奈とノリコに銃を向けた。杏奈はぞっとしたが、男たちには撃つ気はなさそうだった。杏奈たちの怯える様子を見て、笑っているだけだ。

「……何、あんたたち」

杏奈は男たちを睨みつけて尋ねた。一人が帽子のつばを上げ、杏奈を見返して答えた。

「我々は天誅軍」

「天誅……？」

「穢れを祓っていない人間を、天に代わって討つ。この女は禊をすませていなかった。無原罪の世界に生きる資格はない」

杏奈は男の目を見つめた。気味の悪い目だった。

明るいのだ。なんの迷いも、曇りも見えない。きらきらと子供のように輝く目をしている。ガラス玉にも似た、澄み切った目。そこからは、人間らしい心は見えてこなかった。憂いも悲しみも怒りもない、荒野のような空白があるだけだった。

　こいつら、信じている。自分たちが正しい行動をしたと信じ、一片の疑いももっていない。おばあさんを撃ち殺しておいて……。

「おまえたちも同罪……と言いたいところだが」

　男は白い歯を見せて笑った。

「これから儀式を受けるなら、見逃してやろう。年寄りと違って、若者には改心する時間の余裕がある。無原罪の世界に、若い力が必要なのだ」

「ムゲンザイ……って何」

「新生塾の教えを知らないのか？　人間は穢れた生き物だ。生まれたばかりの子供でさえ、すでに罪を負っている。だが、新生塾は人の穢れを祓う方法を見出した。儀式を受ければ貴様らも新しい人間に生まれ変わることができる。穢れた人間どもがすべて滅亡した後、清らかな新世界を築くことができるのだ」

「……バカじゃないの」

　杏奈は思わずつぶやいていた。つぶやいた直後に、後悔した。カチャッと音がして、四つの

銃口が一斉に杏奈のほうを向いた。
「残念だ。心の底まで腐りきっているようだな。貴様には、禊を受ける資格がない」
軍服の男が、力強く言い切った瞬間だった。
空気を裂く、鋭い音がした。
何かが飛んできて、男の手を打ったのだ。銃が落ちた。男は呻き声を上げ、手首を押さえてうずくまった。
残る三人がはっとして銃を構え直す。そこへ、飛び込んできた。三人の人影が。
あっという間に三つの銃は叩き落とされた。杏奈はとっさにノリコを庇って後じさった。
「おまえらぁあ!」
叫んだのは、ウエーブのかかった髪を帽子で押さえた、きつい顔立ちの女だ。杏奈は驚いた。他ならぬ黛ゆきのだった。
ゆきのは杏奈に気づいていないようだった。銃を構えた兵士の顎を拳で砕き、そのまま身体を反転させてもう一人の兵士を蹴り倒す。
「Sorry!　手加減は苦手ですの」
叫びながら長い剣を振るったのは、漆黒の髪をおかっぱ風のボブに切り揃えた美女だった。マイクロミニのパンツから伸びた足は、驚くほど長い。彼女が剣を振るう様子は、まるで映画のワンシーンのように鮮やかに決まっていた。見栄えばかりではなく、腕前のほうも確かであ

る。銃を拾い上げようとしていた軍人は、利き腕を裂かれて倒れた。
「でぇひゃひゃひゃひゃ」
残る一人は、派手な格好をした青年だった。二人の女性がやっつけた敵に、とどめを刺す役割のようだ。変な笑い声を上げながら飛び回っている。
見事な連係だった。たちまちのうちに、四人の軍人は地面に這いつくばった。
「黛……ゆきの」
杏奈の声に、ゆきのは振り返り、きりっとした眉を上げげた。
「あんた……吉栄さん、だっけ」
「Yukinoの友達ですの?」
ボブカットの女性が剣を収めながら尋ねる。ゆきのは「ちょっとね」と答えた。
「あーあ、二人ともひどい格好だね。この連中にやられたの?」
「……まあね」
杏奈は転がっている兵士たちを見て、適当にごまかした。
「ゆきの……さんたちは?」
「見ての通り。この連中があちこちで悪さをはたらいてるんでね、見回ってるところ。こいつらと一緒にね」
ゆきのは、連れの二人を示した。

「高校のときの同級生なんだ。桐島英理子と、上杉秀彦」
「Nice to meet you」
ボブカットの美女はなめらかな英語で挨拶し、上杉は杏奈とノリコの手を取って調子よくぶんぶん振り回した。
「天誅軍って言ってたけど……なんなの、あいつら」
「新生塾の手先さ。洗脳されてない人間を、片っ端から狩ってる」
「新生塾って？」
「このバカ騒ぎの大モトだよ。ジョーカー呪いを流行らせたり、ワンロン占いブームを仕掛けたり、アメノトリフネ伝説とやらを広めてみたり……全部、やつらが裏で糸を引いてたんだ」
杏奈は即座に理解した。
世界が滅亡した後に生き残る、一握りの人々。そのために望龍術を操り、眠れる龍を揺り起こそうとしている連中。いよいよ姿を現わしたのだ。
「天野さんたちは？」
「最前線で戦ってる。さっき、連絡が入った。本丸公園に城が出現したとかで、これから突入するって。たぶんそこが、連中の本拠地だから」
杏奈の不安な表情に気づいたのだろう。ゆきのは付け加えた。
「大丈夫だよ。あの人たちならきっとやる。舞耶さんもうららさんもがんばってるし……周防

さんもパオフゥさんも……あ、そうそう。周防さんの弟も一緒にいる」
「達哉が⁉」
思わず声がはね上がった。
達哉が、天野舞耶たちと行動を共にしている……たった一人で罪を償おうとしていた彼が、ようやく心を開いたのだと思うと、ほっとした。彼らなら信用できる。きっと達哉を助けてくれる。
祈るような気持ちだった。杏奈には何もできない。ただ、託すだけだ。『向こう側』で敗れた達哉。今度こそ、この世界を救ってほしい。それは、たぶん、彼にしかできないこと。
「さて、じゃ、あたしたちは行くけど」
ゆきのが別れを告げようとしている。杏奈はとっさに口を開きかけた。
一緒に連れて行って――そんな言葉が喉元まで出かかった。
ゆきのと行動を共にしたい。ゆきののそばで戦いたい。それは、自分でも戸惑うくらい強い衝動だった。
ゆきのは何も思い出していないようだ。だが、杏奈は断片的に『向こう側』の出来事を知ってしまった。慶子に首を絞められ、姫君が吐き出す怨念に同調しそうになった瞬間、杏奈をひき止めてくれたのはゆきのの記憶だった。『向こう側』と同じように、一緒に戦おう。そして、『向こう側』と同じように、わたしを救ってほしい。絶望の淵に下りてはいけないと、叱ってほ

しい……。

だが、杏奈は想いを押し殺し、無表情に片手を上げた。

「……気をつけて」

「そっちもね」

ゆきのは明るい声で応えて、友人たちと一緒に歩き出した。杏奈は彼らが見えなくなるまで無言で見送った。

ほんの一瞬の、偶然のような邂逅。だが、偶然ではないことを杏奈は知っていた。

大いなる手が人々を引き寄せ、出会わせ、一枚のタペストリを織り上げようとしている。『向こう側』と同じ、破滅の曲を奏でようとしている。

『向こう側』に引きずられてはいけない。達哉が言った通り——『こちら側』を大事に思うなら、デジャ・ヴュに惑わされてはならない。ゆきのが与えてくれたものは、杏奈の中に確かに残っている。それで十分。『こちら側』の彼女は、出版社のロビーで一瞬出会っただけの他人だ。

「……行こうか、わたしたちも」

杏奈はノリコに声をかけて歩き出した。

「何かできること、あるはずだから。天誅軍に襲われてる人たち、助けなきゃ」


Ken-J

「はい！」
ノリコは杏奈を見上げて、素直な返事をした。
達哉たちは戦い続けている。今度こそ、彼らは勝つ。彼らには、その力がある。
『向こう側』の達哉の言葉を信じよう。きっと、杏奈の大事な達哉は戻ってくる。
この戦いが終わったら——世界が、あるべき姿を取り戻したら。

6

ケータイの着信メロディが鳴っているのを、杏奈は夢うつつで聞いていた。

ドラッグストア「サトミタダシ」のテーマ曲である。一度聞いたら耳にこびりついて離れない、しつこいメロディだ。

最初は普通のベル音だったのだ。だが、ある日達哉が言った。

——つまらないよ、それ。変えろよ。

——面倒くさい……なんでもいいでしょ、着信音なんて。

だが、達哉は杏奈が気づかないうちに杏奈のケータイをこっそり操作して、この能天気なメロディを登録してしまった。そして、翌日自分で杏奈に電話をかけてきた。バカ明るい着メロが最大ボリュームで鳴り出したので、杏奈は仰天した。ちょうど学校にいたので、クラスの子たちにくすくす笑われて恥ずかしかった。あせって電話に出ると、達哉は得意そうに笑っていた。愛想がないくせに、時々、そういう妙に子供っぽい悪戯をして喜ぶところがあった。

結局、元に戻すのも面倒くさいので、そのままにしておいた。どうせ、滅多に鳴らないケー

タイだ。着メロなんてなんでもいい……そう思っていた。
達哉が失踪してからは、このメロディを聞くたびに少し慰められた。達哉が杏奈をからかって笑っていた、あの親密な時間を思い出させてくれたから。
杏奈は目をこすりながら起き上がった。
睡眠不足だ。トリフネ浮上以来、杏奈は連日ノリコとともに街を歩いている。瓦礫の撤去、怪我人の救助、物資の運搬……ゆきのたちのように天誅軍をやっつけることはさすがにできなかったが、街の混乱はずっと続いており、すべきことは山のようにあった。
それに、空中に浮上した都市はやはり不安定で、余震のような揺れがしばしば襲ってくる。気を休める余裕がなかった。疲れが、身体の芯にたまっている。
机の上に置いたケータイが鳴り続けていた。ノリコか、それとも光雄か。杏奈は半開きの目でケータイを睨み、のろのろと手を伸ばした。
「……もしもし」
寝起きの不機嫌な声で電話に出ると、一瞬の間を置いて、まごついたような声が聞こえてきた。
「杏奈……か？」
ケータイを握ったまま、またベッドにもぐりこもうとしていた杏奈は、ぱちっと目を見開いた。

聞き違いではないかと思った。電話を握る手に、思わず力がこもった。
達哉の声だった。『向こう側』の達哉……？　いや、彼が杏奈に電話してくる理由はない。それに、「杏奈」と呼んだ。『向こう側』の彼なら、そんな呼び方はしない。
「達哉……なの？」
夢ではないかと疑いながら、杏奈は上ずった声で尋ねた。達哉の声は、苦笑まじりに答えた。
「そうだよ。なんでそんな怖い声出すんだ。番号間違えたかと思った」
「達哉……ほんとに……ほんとに達哉？」
「ああ」
「どうして……!?」
杏奈はケータイをぎゅっと握り締めた。
心臓がどきどきしている。言葉が出てこなかった。達哉の声は、杏奈が覚えている通りのぶっきらぼうな調子で言った。
「出てこれるか？」
「う……うん。どこにいるの？」
「アラヤ神社で待ってる」
電話は切れた。
杏奈は記録的な速さで服を着替え、家を飛び出した。まだ信じられなかった。疑いが脳裏を

かすめる。もしや、罠ではないだろうか。誰かが達哉の声を騙って、杏奈を呼び出そうとしている……？

走りながら、街の様子が変わっていることに気づいた。跋扈していた天誅軍の姿がまったく見えない。追い払っても追い払ってもきりがない、害虫みたいなやつらだったのに。

空の色が違う。こんなに青い空は久しぶりに見たような気がする。空気は冷たかったが、大きく吸い込むと、すっと胸が晴れるようだった。

街が変わった？　珠閒瑠市を覆っていた黒い影が、消えた……？

アラヤ神社の鳥居が見えてきた。鳥居の横に、見覚えのあるバイクが止めてあるのを見て、杏奈は思わず声を上げそうになった。

石段を駆け上る。気が急いて、足がもつれそうになる。

社の前に、人が立っていた。こちらに背を向けて、所在なげに。

杏奈は息を吸い込んだ。『向こう側』の達哉に会ったときの記憶がオーバーラップする。声をかけるのは少し怖かった。

「達哉……」

つぶやくように呼んでみた。少年は振り返り、杏奈と目を合わせた。一見、無愛想に見える顔に、ふわっと笑いが広がった。

達哉だ。杏奈がずっと捜し続けてきた達哉が、ここにいる。杏奈は駆け寄って彼の顔を見上

げた。
「達哉……何やってたの。今までずっと、捜してたのよ。急にいなくなっちゃうから。ずっと捜してた……」
「悪かった」
達哉はぶっきらぼうに答えると、杏奈が言葉を続けようとするのを遮って尋ねた。
「杏奈。何があったか、詳しいことわかるか？」
「……え？」
「俺、記憶が途切れてるんだ」
達哉はちょっと忌々しげに眉を寄せた。
「頭を打ったわけでもない。怪我もしてない。なのに、この数日間の記憶がない。兄貴に聞こうとしたが……」
達哉は頭を振った。彼は言葉を続けなかったが、杏奈は薄々察した。
達哉は、聞くことができなかったのだ。たぶん、克哉が話すまいという素振りを見せたから。
克哉の気持ちは、杏奈にも理解できた。『向こう側』の達哉が経験してきた出来事は、何も知らない『こちら側』の達哉に話すには過酷すぎる。あの兄がためらうのは当然だった。
それよりも、達哉が質問を控えたらしいことに杏奈は驚いた。以前の達哉だったら、こういう反応はたぶんしなかった。克哉に食い下がり、どうしても話してもらえないと苛立ちを募ら

せ、不機嫌な表情を隠さなかったはずだ。
達哉の中で、何かが変わったのだろうか。『向こう側』の達哉は、本人にはちっとも自覚させないかたちで、『こちら側』の達哉に影響を与えていった……？
物思いに耽っていた杏奈は、達哉の言葉で現実に引き戻された。
「杏奈、何か知ってることがあったら教えてくれ」
「え……わたし……？」
「なんでもいい。くだらないと思うことでも」
その言い回しが、少し克哉に似ているなと思って、杏奈は微笑した。達哉はむっとしたように「なんだよ？」と聞いた。
「なんでもない……わたし、何も知らない」
「……そうか」
達哉はあっさり引き下がった。やっぱり変わったな、と杏奈は思った。冷たいようで本音は優しいのは以前からだが、そこに少し、大人びた思いやりが加わったような気がする。
「……悪かったな。こんなことで呼び出して」
「何言ってるのよ。嬉しかった。久しぶりに達哉から電話あって」
「杏奈が心配してたって、兄貴から聞いたから」
「そう。お兄さん、優しいね。達哉から聞いてた通りの人だった」

「……俺は兄貴が優しいなんて、一言も言ってねえよ」
「言ってなくても、なんとなく伝わったから」
心外そうな達哉の顔を見て、杏奈は目を細めた。
達哉――帰ってきた。無愛想な顔を見つめていると、やっと実感できた。涙が出そうだった。
杏奈の笑顔を見て、達哉はちょっと驚いたような顔をし、カリカリ頭をかいて言った。
「なんか、変わったな、杏奈」
「そう？　どこが？」
「なんとなく、雰囲気が。表情とか……前より……」
「何よ」
「いや」
達哉は言葉を濁した。
なんと続けるつもりだったのだろう。杏奈が達哉に感じたのと同じような変化を、逆に達哉のほうも感じていると知って、杏奈はおかしくなった。
そう。確かに杏奈は変わった。この数日の出来事を経て。
めまぐるしい日々だった。ゾディアックで杉本とやり合ったこと……金田や反谷の死……紙袋の男……レイディ・スコルピオン……ジョーカー化したノリコ……『向こう側』の達哉との出会い……そして廃工場での戦い。長い時間が過ぎたような気がする。実際には、ほんの数日

間の出来事でしかなかったのに。
一連の体験が、杏奈を変えた。まだ、人と話すのは好きではないけれど、頑なに殻にこもって他人を拒絶することはなくなった。
『向こう側』で、ゆきのが教えてくれたこと。それが、「こちら側」の杏奈の中に生きている。不思議な感じだった。杏奈は『向こう側』の自分のことなんて全然知らないのに、細い細い一本の糸が、確かに二つの世界の杏奈を繋いでいる。
「ねえ。バイク乗せてくれる？」
杏奈が言うと、達哉は意外そうに眉を上げた。
「なんだよ。急に」
「ダメなの？」
「そういうわけじゃ……」
杏奈は返事を待たずに、先に立って歩き出した。達哉は、これまでとは違う杏奈の態度に戸惑ったような様子で尋ねた。
「どこに行きたいんだ？」
「んー……珠間瑠市一周」
「なんだ、それ。どこが面白いんだ」
「いいのよ。見ておきたいの」

達哉は首をかしげ、「変なヤツ」とつぶやいた。杏奈は笑って、階段を下りた。

珠閒瑠市は復興してゆく。傷痕を少しずつ癒して、元どおりの街へと再生してゆく。人々は過去を克服し、新しい日々を築いてゆく。そのすべてを、隅々まで、目に焼きつけておきたかった。

二度と会うことのない、この世界から消えてしまった少年に向けて、杏奈は心の中でつぶやいた。

ありがとう。さよなら。

あなたが全存在をかけて守ったこの世界、きっと大事にする——。

それが、永遠の約束。

ペルソナ2　罰



機種●	プレイステーション用ソフト
メーカー●	アトラス
ジャンル●	RPG
定価●	6,800円(税抜)
発売日●	2000年6月29日発売

　珠間瑠市に起こる連続惨殺事件。街の噂では、事件を起こしているのは、ジョーカーと呼ばれる、都市伝説中の人物だった。刑事の周防克哉は、雑誌記者の天野舞耶や芹沢うらら、パオフゥら、ペルソナ能力の持ちまたちと事件を追う。

　次々と明らかになる陰謀、「罪」世界とシンクロしながら流れていくストーリー。シナリオの奥の深さに、思わずうなる名作。